敬語を使いこなす

講談社現代新書
868

野元菊雄

学生が先生に、部下が上司に、
受付嬢が来客に……
それぞれの場面と
人間関係に応じて、
適切で正しい敬語を
使いわけるのはむずかしい。
尊敬語・謙譲語・丁寧語など
敬語の基本的な役割と、
場面ごとの使い方のルールを
豊富な用例によって解説した
最適の日本語ガイド。



敬語と人間関係――敬語というものは、話し手、聞き手、
それに必要なら話題になるものの上下関係で
使い方が決まるものです。上下関係というものは、
特に下の者からすると親しさとは無縁のものです。
すなわち、敬語は親疎の関係で言えば、疎のとき生ずるものです。
よそよそしい関係のとき、ということになります。
これは、日本語では初めは敬語を使って話していたのが、
だんだん親しくなると友人づきあいの
ざっくばらんな会話になることからもわかるでしょう。
だんだん親しくなると友人づきあいの
夫婦げんかの際には、ことば使いが
ことさら丁寧になることもあります。
敬語はまた「敬遠」ということと関係が深いのです。――本書より

カバーイラスト＝峰岸達



敬語を使いこなす

野元菊雄

講談社現代新書

●目次

●扉カット／峰岸 達

1――まちがいやすい敬語



1――どこがまちがいかわかりますか？

最初から「まちがいやすい敬語」などと申しますと、あるいは読者をおどかすことになるかもしれません。

まずは、ある会社での会話の例をここに挙げてみましょう。

係長　部長はどこで英会話をご勉強いたされたのでございますか。ずいぶん御流暢でいらっしゃいますね。

課長　君はＪＪＣと申す会話学校を知っているかね。

係長　存じ上げております。

課長　そこでお習いなされたということでしたね、部長。

部長　うん、若い新入社員時代に依託学生として派遣されて、まいったものだ。

女子係員　部長さん、山手商事さんからお電話です。

部長　うん、俺の机に廻してくれ。――はい、山本営業第二部長ですが。

男子係員　課長、社長の反応はどうだと常務は言ってましたか。
課長　どうも社長は承知しないようだね。
男子係員　それで、山手商事の方はどうなっているかご存じになっておられますか。
課長　いや、まだわからないが、今、部長の出ている電話、山手商事からじゃないか。
男子係員　あ、さようでいらっしゃいますか。
課長　部長、山手商事のお電話、営業部長でございましたか。
部長　うん、あっちもトップの了承が受けられなくて弱っておるようだよ。

右の会話では、それぞれの文（つまり、句点「。」と「。」との間）に少なくとも、一カ所以上のまちがい、あるいは問題点が入っています。それがおわかりでしょうか。こう考えると、確かに敬語はむずかしいものと言えましょう。しかし、ことばは要するに使い馴れですから、使い馴れてしまえば、そんなにむずかしいものではないと考えます。

といっても、まちがったまま使い馴れては困りますから、まちがえないようにスタートをする必要があります。そこで、ともするとまちがってしまう敬語というところから出発してみたいと思います。まず、いくつか問題を出しますので、この文のどこがまちがっているか、そしてどう直したらいいかを紙に書いてください。正解はあとで示します。それからどこもまちが

っていないものも入っているかもしれない、ということをお断わりしておきます。

●敬語テスト50問

①（社外の人が電話で）沢田課長さんはいらっしゃいますか。
　（課員が答えて）沢田課長はあいにく出張中でございます。
②（課員が課長に）課長さん、お茶いかがですか。
③（奥さん）主人はただ今出かけられておりますが。
　（主人の上役）上田君はいないとおっしゃいますか。
④（上役に）ぼくがいたしておきますから御安心ください。
⑤（上役に）ぼくが参ります。
⑥（先輩の教員が若い教員に）山本先生、きょうの午後は都合はどうかね。
⑦（学校にかかってきた電話に）河西先生はきょうはお休みになっています。
⑧（女の先生が生徒に）春山君、秋田さん、そっちへ行っちゃだめよ。
⑨あれはあいつがわたくしにくださったのです。
⑩社長はすぐ参りますから、こちらでお待ちしてくださいませ。

⑪ 社長はすぐいらっしゃいますので、ここでお待ちいただけませんでしょうか。
⑫ 社長、あした朝、沢井商会に参られますか。
⑬ 社長、きょうはお宅に直行なさいますか。
⑭ 先生はきのうどこへ伺われたのでございますか。
⑮ そうでございますか。先生は（息子の）一郎のところにおいでいただいたのでございますか。
⑯ （レストランで目上に）何をいただきますか。
⑰ それでは御遠慮なく、サーロイン・ステーキをいただきます。
⑱ （社長の訓辞のあとで専務が社員に）ただいま、社長も申されましたようにわが社は……
⑲ （同）社長のおっしゃるとおり、今やわが社は円高のあおりをまともに受けて、不況にあえいでおります。
⑳ （課員が課長に）帰りに会計課で旅費をいただいてきてください。
㉑ （お母さんが子どもに）ポチに御飯をあげてちょうだい。
㉒ では仏様にお線香をあげさせてくださいませんか。
㉓ （目上に）父にも見せてあげてください。
㉔ たいへん御立派なお庭でいらっしゃいますこと。

㉕御秘蔵のルノアールを是非拝見いたしたいものでございます。
㉖（目上に）お子さんは何人でございますか。
㉗（同）お子さんは何人いらっしゃいますか。
㉘きのうもおっしゃられたように……
㉙きのう御返事のお手紙を差し上げました。
㉚坊っちゃまの御入学おめでとうございます。よく御勉強なされましたからねえ。
㉛風邪を引きましたからお休みさせていただきます。
㉜（教室で女子学生が男の先生に）先生、ここのところがよくわかりませんの。
㉝お酒になさいますか、おビールになさいますか。
㉞おコーヒーとお紅茶と、どちらがよろしいでしょうか。
㉟きょうはおミサにあずからせていただきとう存じます。
㊱（スーパーで買物中の奥さんが知り合いの奥さんに）このごろは大根もごぼうも高くなりましたねえ。
㊲茶でも召し上がられますか。
㊳どんなお仕事をやっていらっしゃるの？

お仕事は経理の方をやっています。
㊴わたしは建築関係の仕事をしています。
㊵お宅に猫は何びきいらっしゃいますか。
㊶宅には猫が三びきおりますです。
㊷車のお窓から手を出さないでください。
㊸(他社に電話で) 社長があしたお伺いしたいとおっしゃっております。
㊹(他社に電話で) 社長さんがあしたわたくしどもに伺うということをお聞きしましたが……
㊺(他人に) 失礼ですがお名まえは何と申されますか。
㊻わたしは杉山と申しますが、先生は御在宅でいらっしゃいますか。
㊼在宅でございますが、失礼ですが杉山様とおっしゃいましたか。
㊽(ワンマンバスの運転手が) お乗りの方は中につめてやってください。お互いさまですから。
㊾(駅のアナウンス) お乗りの方は降りる人がすむまでお待ちください。
㊿(駅のアナウンス) 杉並の原田さん、おりましたら駅長事務室までおいでください。

*

以上の五十問ですが、おわかりになりましたか。これから正解を示しますので、正しかった

ときに、一問について二点をつけてください。五十問で、満点は百点となります。

2——正解と解説

①（社外の人が電話で）沢田課長さんはいらっしゃいますか。
（課員が答えて）沢田課長はあいにく出張中でございます。

国語審議会で昔まとめたものに『これからの敬語』というのがあります。昭和二十七年五月に文部省から出たものです。これは「これからはこうあるほうが望ましいと思われる形をまとめたものである」とされています。この中の「二　敬称」に次のようにあります。

（五）職場用語として、たとえば「先生」「局長」「課長」「社長」「専務」などに「さん」をつけて呼ぶには及ばない（男女を通じて）

これによると、右の①は、社外からの電話でも「沢田課長は」とすべきだ、ということにな

ります。しかしこれは今となっては少し急進的な意見で、一般人は、特に女性のことばとしては、「さん」をつけないことには疑問を感じているようです。そこで、ここは「さん」を消しても、そのままでも、正解ということにします。「課長の沢田さんは」でもいいでしょう。

この『これからの敬語』のように考えたのは、これらの「課長」などはそれ自身として敬語となっている、と考えたからです。したがって答えの方の「沢田課長」は、特に姓に「課長」がつくと一層敬意があらわれるので、「沢田は」または「課長は」の方がいいと思います。このように直さなかったときはマイナス一点としておきます。一番いいのは「課長の沢田は」でしょう。

② (課員が課長に) 課長さん、お茶いかがですか。

①でも述べたように、課員から当人への呼びかけとしては「課長」または「課長さん」でいいと思います。そのほかの無用の直しはマイナス二点とします。

③ (奥さん) 主人はただ今出かけられておりますが。

〈主人の上役〉上田君はいないとおっしゃいますか。

まず「主人」という語に反発を感じる女性がおられるでしょう。しかし、これは純粋に敬語の問題ではないと思いますので、ここでは直しても直さなくてもいいことにします。もし直すならば、謙譲（へりくだり）の気持ちのあらわれている「上田は」がいいと考えます。

奥さんはその「主人」のことを「出かけられて」いる、といっています。これは「られる」という敬意を示す助動詞を使っていて、夫の上司に対しては不適当です。「あいにく出ております」「出かけております」「不在でございます」などがいいでしょう。「ただ今」はこのような改まった場合に使うものとしては「今」よりは適当です。

奥さんがご主人に対して敬語をいつも使っているとすれば、だれが来てもその敬語をいつも使う、というのが昔の日本語でした。今でも関西ではその傾向があります。「うちの人はいやはらしまへん」などと言います。「はる」は敬語と思っている関東人にはちょっと妙な気がします。この昔の使い方を「絶対敬語」といいます。今は、その人がある人にいつも丁寧に言っていても、話し相手がだれかということでその丁寧な言い方はやめなければなりません。これが「相対敬語」で、社外の人に対しては社内の目上の人のことには敬語を使わない①のような使い方

が今は一般的です。
上役の方の「上田君はいない」というのは、まあ上役ですからこれでいいとしましょう。次の「……とおっしゃいますか」は、部下の奥さんに対しては少し丁寧すぎるように思います。「上田君はいないのですか」などと、少し敬語の度合いを落としてはどうでしょうか。

④（上役に）ぼくがいたしておきますから御安心ください。

「ぼく」は原則として、同等以下の人に対して男子が使うものです。他の部分が丁寧ですから、そっちを生かして「わたしが」「わたくしが」と直します。「ぼく」については若い男が使うことが多いので、年輩者が使うとわたしなど甘ったれるな、という気がしてあまり好きではありませんが、これは主観的なものでしょう。
もし「ぼく」の方を生かすなら、「ぼくがするから安心しろよ」でしょうが、ここは上役へのことばですので不適当です。「いたす」は「する」のへりくだりの表現ですから、上級者のために何かをしてさしあげる、という意味です。

⑤（上役に）ぼくが参ります。

④で述べたことからわかるように、「ぼく」は不適当です。④、⑤とも、敬語についてのレベルがそれぞれの中でアンバランスだ、ということになりましょう。

⑥（先輩の教員が若い教員に）山本先生、きょうの午後は都合はどうかね。

学校という社会では、教員同士は先輩後輩にかかわらず「××先生」と呼び合うことが習慣になっているようです。これは多分、区別をつけて呼んだとき、児童・生徒などに聞かれた場合具合が悪い、というところからだと思います。それはそれで理屈が通っていますからそれでいいと思います。外部からの電話などであれば、相手が父兄であれば「××先生」でいいと思いますが、それ以外では、わたしはやはり「××先生」と同僚のことをいうのはおかしいと考えます。

もし児童・生徒に聞かれてはいけない、という配慮からお互いに「××先生」と呼び合って

いるのならば、「都合はどうかね」は少し乱暴すぎて、呼ばれた「山本先生」の地位が低いことが子どもたちにわかってしまうのではありませんか。「都合はどうですか」などと直さないとき、マイナス一点としましょう。

⑦（学校にかかってきた電話に）河西先生はきょうはお休みになっています。

学校にかかってきた、というだけで相手がだれだかわかりません。わからない段階では父兄かもしれないので「河西先生」は、これでいいでしょう。

問題は「お休みになって」いるというところで、「お〜になる」は尊敬語で、しかもちょっと高い段階ですから、校外からの電話への返事としては丁寧すぎるようです。「お休みです」でいいところでしょう。「お」をつけずに「休みです」ではちょっとぶっきらぼうの感じです。なお「お休みということが前もってわかっている」という意味で「お休みになっています」ということもあります。この場合はこれでもいいでしょうが、丁寧すぎの「お休みになる」とまちがうおそれがありますから、やはりこの語形はよくないと思います。この意味なら「お休みに」ではなく「お休みと」とした方が誤解を与えないでいいでしょう。直してない場合はマイナス

一点とします。

⑧（女の先生が生徒に）春山君、秋田さん、そっちへ行っちゃだめよ。

近ごろ先生が男子生徒に「××君」、女子生徒に「○○さん」と言って区別しているようです。わたし自身は特に女の先生が「××君」と呼ぶことには抵抗感があります。「××君」は男のことばだからです。しかし大勢の赴（おもむ）くところ仕方がないようで、ここは直さなくてもいいことにしておきましょう。

⑨あれはあいつがわたくしにくださったものです。

「あいつ」と「くださる」とがバランスを失しています。「あいつ」を主とすれば、「くださった」は「くれた」「よこした」などとすべきですし、「くださる」を変えなければ、「あいつ」の方は「あの方」などとすべきです。

⑩ 社長はすぐ参りますから、こちらでお待ちしてくださいませ。

「お待ちする」は、自分が目上の人のことを待つときに言うことばです。へりくだりの表現です。したがって社外の人を応接室などに案内した受付の人が言うことばとしては不適当です。お客さまを社長より下の人として扱うからです。事実、下かもしれませんが、お客さまと、それを迎える側という立場であるべきこの場合はいけません。

「参る」は、「来る」ことのへりくだりの表現ですから、お客さまを主に考えれば正しい使い方です。

「から」は、理由を表わすことばとしては、多少押しつけがましいようです。押しつけの度合いのよりゆるやかな「ので」にした方がいいでしょう。「から」のままにしていたらマイナス一点とします。

⑪ 社長はすぐいらっしゃいますので、ここでお待ちいただけませんでしょうか。

社外の人に、社長に対する尊敬語を使ってはいけません。ここのところは⑩の言い方の方がいいわけです。

「ここで」よりも「こちらで」の方が改まっていて丁寧(ていねい)です。「ここで」のままにしていましたらマイナス一点です。

「お待ちいただけませんでしょうか」は少々丁寧すぎの感じもあります。しかしこれはまちがっているとまでは言えないと思います。⑩の最後の「ませ」も丁寧すぎる感じがしないでもありませんが、ないと少々ぶっきらぼうな気がすることもありましょう。女性の場合に普通は丁寧な方がいいように思いますが、これもお気に召さない方もおありのことでしょう。

⑫ 社長、あした朝、沢井商会に参られますか。

あしたの朝の社長の予定を聞いているところです。「社長」というのは敬語としては相当高いところですから、さらにこれに「さん」をつける必要はありません。

「参る」はへりくだりの表現で、特にどこか、目上のところへ行くとき使います。そこで、「東宮御所に参られますか」ならばいいわけですが、社外であり、お得意先であっても、ここは「沢

井商会にいらっしゃいますか」「沢井商会にお寄りになりますか」などでいいと思います。

⑬ 社長、きょうはお宅に直行なさいますか。

⑫で述べたことからわかりますように、これはまちがっていません。社長の夕方の予定を聞いているところです。まちがって直してしまったらマイナス二点。

⑭ 先生はきのうどこへ伺われたのでございますか。

「伺う」は、これも「行く」のへりくだりの表現です。ですから、行く場所によっては使ってもいいのですが、「どこへ」というように場所がわからないのを聞くものとしては不適当です。「おいでになった」「行かれた」などとしたいところです。

⑮ そうでございますか。先生は（息子の）一郎のところにおいでいただいたのでございますか。

⑭の問いに対して先生が答えたのに対することばです。言っている人の息子の一郎のところへ行った、ということです。この表現はまずは完全で直すところはありません。

⑯（レストランで目上に）何をいただきますか。

自分の方で接待するつもりのときのことばです。この「いただく」は「食べる」のへりくだりの表現ですから、目上には不適当です。「何にいたしましょうか」とすると「いたす」は「する」のへりくだりの表現ですが、これは問いかけている人の動作ですから構いません。また「何を召し上がりますか」でもいいでしょう。

⑰それでは御遠慮なく、サーロイン・ステーキをいただきます。

⑯のすすめに対する返事です。ここでは「御遠慮」がよくありません。言っている人の遠慮なのですから、自分の方に「御」を使うのはおかしいのです。

⑱（社長の訓辞のあとで専務が社員に）ただいま、社長も申されましたようにわが社は……

「申す」も「言う」のへりくだりの表現ですから、上級者である社長の言う動作を示すのには不適当ということになります。「おっしゃったように」「言われ（まし）たように」などとします。

⑲（同）社長のおっしゃるとおり、今やわが社は円高のあおりをまともに受けて、不況にあえいでおります。

⑱で述べたことからわかるように、これにはまちがいはありません。

⑳（課員が課長に）帰りに会計課で旅費をいただいてきてください。

「いただく」は「もらう」のへりくだりの表現です。上役の課長にへりくだりの動作を要求しているのですからいけません。「受け取ってください」が一番いいでしょう。「もらってくださ

い」は「もらう」ということばが少々恩恵を受けるような語ですから、厳密にいうと不適当だという気がします。「もらう」を含む語に直した場合にマイナス一点とします。

「いただく」のようなへりくだりの表現を尊敬語の表現の代わりに使ってしまうまちがいが、今までの例にも見るように多くありました。へりくだりの表現は非常に改まった場合に使いますので、丁寧に言おうとするあまりつい使ってしまうのでしょう。気をつけなければなりません。

㉑（お母さんが子どもに）ポチに御飯をあげてちょうだい。

「あげる」は上への動作ですから、これでは犬のポチが上になってしまいます。ということで、この「あげる」をこのように使うのは誤りだというのが伝統的な考え方です。しかし、元来はそうであっても、「やる」を使うと少し乱暴な気がする、として、物言いをやわらかく上品にしたものと考え、この言い方を支持する考えもあります。ここはどっちを使ってもいいことにしましょう。

㉒では仏様にお線香をあげさせてくださいませんか。

この「あげる」ならまったく問題はありません

㉓(目上に)父にも見せてあげてください。

ここは目上にとありますから「あげる」は不適当です。一番正しくは「やってください」です。その他「見せてください」などではマイナス一点。

㉔たいへん御立派なお庭でいらっしゃいますこと。

少し丁寧すぎるようです。「お庭」の「お」は「あなたの」という意味ですからあった方がいいでしょうが、「御立派」の「御」はなくてもかまいません。「いらっしゃる」は「ある」の丁寧な形とはちょっと言えないと思います。「ございますこと」と直したいところです。「いらっ

しゃる」を直してなかったらマイナス一点とします。

㉕ 御秘蔵のルノアールを是非拝見いたしたいものでございます。

「拝見させていただきたいもの」の方がいいでしょうが、まあこのままでもまちがっているとも言えないでしょう

㉖（目上に）お子さんは何人でございますか。
㉗（目上に）お子さんは何人いらっしゃいますか。

この二つのうちでは㉗の方がいいと思います。「ございます」は丁寧な形ではありますが、わたしは、このように「ございます」と聞くことによって、答えの方にも「ございます」を強要しているような感じがしてあまり好きになれないのです。しかし、これを直してないからといってマイナス一点にするほどのことはなさそうです。

㉘ きのうもおっしゃられたように……

このような言い方はよく聞きますが、『これからの敬語』の立場では、正しくは過剰な敬語というべきでしょう。「おっしゃったように」か「いわれたように」か、どちらかです。このままで直してなければ、少し辛いと思いますが、マイナス一点とします。

㉙ きのう御返事のお手紙を差し上げました。

「御返事」はこのことばの話し手がするものですし、「お手紙」もこのことばの話し手が書くものです。したがって自分に属するものに「お」や「御」をつけるのはおかしい、という考え方もありますが、これらは結局は相手に関わり、相手の物になるのですから、「お」や「御」をつけられる、ということになっています。しかし、この並べ方はちょっと変な気もします。「お手紙で御返事申し上げました」が一番いいかと思います。少し辛すぎるかもしれませんが、他のところが甘かったので、こう直してないときマイナス一点としておきましょう。

「差し上げる」は相手へのあげる動作としては割に高い、丁寧な形です。これはこのままでいいと思います。

㉚ 坊っちゃまの御入学おめでとうございます。よく御勉強なされましたからねえ。

㉘の「おっしゃられる」と同じように「御勉強なされる」は子どもさんについては少し敬語が重すぎるように思います。「御勉強なさいました」でいいでしょう。ここもこう直してないとき少し辛目にマイナス一点とします。

「おめでとうございます」は「おめでとうございました」と過去形にする方が丁寧ということはあるようですが、ここはそうしてなくても減点にはしないでおきましょう。

㉛ 風邪を引きましたからお休みさせていただきます。

「から」というのは風邪を引いたから当然のこととして、というようなニュアンスが感じられます。「ので」と改めるべきです。しかし「ので」でも、理由を述べていてやや押しつけている

ことには変りありません。

「いただきます」も、「いただく」というへりくだりの表現を使ってはいますが、やや宣言的な響きがあって感心しません。

結局のところ一番いいのは「風邪を引いてしまいました。まことに申しわけございませんが（ありませんが）お休みさせていただきとう存じます（いただいてよろしゅうございましょうか）」などということになりましょうか。このようにしてあれば減点ゼロ、そこまで到らないものにマイナス一点、直してないものはマイナス二点ということになりますが、敬語とはなかなかむずかしいものであります。

㉜（教室で女子学生が男の先生に）先生、ここのところがよくわかりませんの。

「わかりませんわ」はもちろんよくありませんが、「わかりませんの」も女性語であるという点でこの場合不適当です。つまり、教室という場面では、男対女という関係は消し去っていなければなりませんから、自分が女性であることをことさら明示するこういうことばを使うのはそぐわないのです。

といっても、男子学生には許される「金（かね）」「酒」などということばは、女子学生としてはおかしいでしょう。やはり「お金」「お酒」と言うべきです。この辺はなかなかむずかしいところで、これらは女性である限りはどうしても使わなければならない「絶対的女性語」で、先の「わ」などの、場合によって使わない方がいい「相対的女性語」と二種類があると思います。

㉝ お酒になさいますか、おビールになさいますか。

先に「お酒」というのを出しましたが、女性でなくても、このような場面では「お酒」と言うべきでしょう。問題は「おビール」で、「お」のつけすぎの例として、外来語にはあまりつけないということになっていますので、ここは「お」をとってもいいでしょう。しかし対になる「お酒」では「お」は外せませんので、ここもこれとの対比でこのままつけておいてもいいかと思います。なお、ここの「お酒」は日本酒の意味で、もちろん広義ではビールも酒の一種です。

㉞ おコーヒーとお紅茶と、どちらがよろしいでしょうか。

右の㉝で述べたことからするならば、「おコーヒー」はよくないことになります。しかし何かわれわれとしては「おビール」より「おコーヒー」の方が変な気がします。それは外来語につきにくいことともに、長い語にはつきにくいという法則があって、「ビール」より長いからかと思います。こんなことで、「おコーヒー」の「お」を外さなかったらマイナス一点にしておきます。

漢語には「御（ご）」、和語には「お」がつくのが一般的法則ですが、飲食・育児関係のように女性が関与することの多い語は漢語であっても「お」がつくのは珍しいことではありません。ここはこのままでいいと思います。一方を「コーヒー」としたから、他方も「紅茶」とするのはよくないと思います。

> ㉟　きょうは__おミサ__にあずからせていただきとう存じます。

外来語には「お」はあまりつきませんが、それでもつくときは「お」です。ところが一つ例外があって「ミサ」だけは「御（ご）」をつけるのが例になっているようです。ここも「お」を「御」に直すのが一つの考え方です。また「お」も「御」もつけないでおくのも一つの行き方でしょ

う。男の人の場合は「御」がつかない言い方も多いと思います。

㊱（スーパーで買物中の奥さんが知り合いの奥さんに）このごろは大根もごぼうも高くなりましたねえ。

これで積極的にまちがいとも言えないとは思いますが、このような場合、都会風の奥さんなら「お高くなりました」と「お」をつけるのが普通でしょう。つけなかったからといってマイナス二点とするほどではありませんので、マイナス一点とします。「大根」には「お」をつけて「お大根」と言うことが多いかと思います。しかしどうも「おごぼう」はないので、そろえるという意味で「大根」のままでいいかと思います。

㊲茶でも召し上がられますか。

「召し上がられる」は「召し上がる」で十分な敬語ですから、さらに「られる」をつけたのでは少し重くなるというのが『これからの敬語』の立場です。

この最後のところが重すぎるために「茶」というのは少し乱暴で、バランスを失しています。ここは敬語的に言うなら「お茶でも召し上がりますか」「お茶でも上がりますか」となるところです。敬語なしなら「茶でも飲むか」です。以上のような直しならどれでも二点ということにします。一方だけのときは一点（つまりマイナス一点）です。

㊳どんなお仕事をやっていらっしゃるの？
お仕事は経理の方をやっています。

聞く方の「お仕事」はあなたのお仕事ということで「お」をつけるのはもちろんいいのですが、答えの方の「お仕事」はわたしの、ですから問題です。そうは言っても、話し手が女性ならば、物言いをやわらかくするために「お」をつけることはよくあります。そこで、もし右の問題を、男性を想定していて、「お」を消さなかったらマイナス一点として、ここでは一点を記録しておきましょう。
なお「経理の方」という言い方は、「経理」とだけいう言い方よりも漠然としていて、それだけやわらかな表現だとされています。

㊴ わたしは建築関係の仕事をしています。

ここでも、「建築の仕事を」とは言っていません。「関係の」を入れることによって先の「経理の方の」という言い方と同じ効果をつけている、と言っていいでしょう。したがって、ここは修正なしが正解です。

㊵ お宅に猫は何びきいらっしゃいますか。

㉗と似ています。㉗は「お子さん」でしたが、いくら「お宅」の猫でも「いらっしゃいますか」は不適当で、「いますか」とする。「いらっしゃる」を使うなら、これを相手の動作を示すものとして「飼っていらっしゃいますか」としなければなりません。

㊶ 宅には猫が三びきおりますです。

「おりますです」という言い方は事実上はよく聞きますが、「ます」と「です」をこのように二つ重ねるのは少し丁寧すぎる感じです。「です」を削ったときは満点としますが、このまま直さないときはマイナス一点としましょう。

「宅」は自分の家についてのへりくだり的表現ですのでこれで結構です。「います」よりは「おります」の方がややへりくだり的であっていいと思います。したがってこれらについては直さない方がいいと思います。「います」としたらマイナス一点、「いますです」としたらマイナス二点、つまりこの問では零点ということにします。

㊷ 車のお窓から手を出さないでください。

まず、この車の所有者が問題になります。どう考えてこれを直そうとしたかによって点数も変わります。

この車に乗っている人の所有としたときは、「お車」と「お」をつけた方がいいでしょう。「お車」としたらその車の一部である窓には「お」はいらないと思います。

このことばを言われている人の「手」ですから「お手」とした方がいいとは思いますが、男

のことばであったときは「お」はあまりつきません。
この車が、乗っていて話しかけられる人のものではなく、バスとか汽車などでしたら、車も窓も「お」はつきません。「手」が「お手」になるのはこの場合は確率が少し下がるのではないかと思います。
「（お）手をお出しにならないでください」などもっと丁寧な形にはどうしてもしなければならないというものではありません。ここは点数には関係なしといたします。

㊸（他社に電話で）社長があしたお伺いしたいとおっしゃっております。

これは簡単にわかるように、他社の人に対しては自社の社長への敬語は避けるべきですので、「おっしゃって」を「言って」か、もうすこしへりくだって「申して」か、どちらかに直すべきです。最後の「おります」はへりくだり的な表現ですから、このままでいいと思います。

㊹（他社に電話で）社長さんがあしたわたくしどもに伺うということをお聞きしましたが……

相手の社長のことについてですから、その社長が自分のところへ「伺う」というのはまずい表現です。「伺う」は、その目的地の方が高い地位にあるとき使うへりくだりの表現です。ここはへりくだりでなく、その社長についての尊敬語を使わなければなりません。「お見えになる」「いらっしゃる」「おいでになる」などが適当です。さらに自分の方についてへりくだって「お見えいただく」「いらしてくださる」などの表現をとってもいいでしょう。

「お聞きしました」は「伺いました」でも結構です。㊹の原文では前にまちがってはいるものの「伺う」が出ているので重複を避けたものと思われます。

自社や自宅のことを「わたくしども」と言っているのは、まずは最上級の言い方です

㊺（他人に）失礼ですがお名まえは何と申されますか。

「申す」は前にも書きましたように、へりくだりの表現です。したがって、相手のこととしてここのように使うのはおかしいことになります。「私は山本と申します」のように、自分で名乗るときには、へりくだりですから使えます。この言い方はよく聞きますから、この「申す」に敬語の「れる」をつけて「申される」とすれば尊敬の意味になると考えたのでしょうが誤りで

す。「おっしゃいますか」とすればいいところです。
しかし名まえを聞くということはそれ自身あまり丁寧な行動ではありませんから、本当のところは、こういう表現はなるべく避けなければなりません。

㊻わたしは杉山と申しますが、先生は御在宅でいらっしゃいますか。

電話にしろ、訪問先でのことばにしろ、目上の人について存否を問うのには、まず自分の名を告げるのが礼儀でしょう。この点で、この例文は完全です。ただ、目上またはその家族が相手の場合は「わたし」よりは「わたくし」の方が望ましいと考えます。「わたし」のままでしたらマイナス一点とします。「御在宅でいらっしゃいますか」は「御在宅でいらっしゃいましょうか」とすればもう少し丁寧になります。「御在宅でございますか」もいいでしょうが、「御在宅ですか」となると少し丁寧さが足りない気がします。

㊼在宅でございますが、失礼ですが杉山様とおっしゃいましたか。

「在宅でございます」という返事は、まあこのままでもいいかと思います。しかし「御在宅でございますか」という聞き方は、「ございます」という丁寧な返事を予定しているようで、わたしには前にも言いましたように気になる言い方です。「在宅いたしております」「おります」などでもいいところです。

名乗ったのが最初だったのでよく聞きとれなかったかして確認しているのが次のことばです。初めてとか、あまり接触のなかったときなどは、ゆっくり発音するか、あるいは繰り返して言うのがいいでしょう。

㊽（ワンマンバスの運転手が）お乗りの方は中につめてやってください。お互いさまですから。

あとから乗る人に聞こえたらあまりいい気持ちはしないでしょう。「つめてやる」は、恩恵としてあとから乗る人にやってやるのですから、ここでこのように言われている人々を上と見ての発言になるからです。「やる」などと言わず「つめてください」でいいところです。「つめてあげる」というと逆にこれから乗る人の方が上になって、既に乗った人が下になってしまいます。ここではそういう上下の関係はないはずと思われます。

敬語は聞いている人を不快にするものであってはなりません。

㊾（駅のアナウンス）お乗りの方は降りる人がすむまでお待ちください。

「お乗りの方」と一方ではあるのに、一方では「降りる人」とあります。直接呼びかけている相手は「お乗りの方」ですから、どうしてもその人々への敬語が重くなってしまうのでしょう。㊽でも、乗った人に対して呼びかけているので、直接呼びかけているのではない、これから乗る人に対する丁寧さが足りなくなってしまったのでした。

ここは「お降りの方」と対等な言い方にしなければなりません。アナウンスですからもっと簡単に「乗る方」「降りる方」でもいいでしょうが、「乗る方」は語形が短いこともあって「お」がつきやすく「お乗りの方」となります。そうなると釣り合い上「お降りの方」としなければならなくなります。

「すむまで」は「おすみになるまで」などのように丁寧にする必要はないでしょう。このようなアナウンスでは、簡明に伝えることも必要だからです。

⑳（駅のアナウンス）杉並の原田さん、おりましたら駅長事務室までおいでください。

「おる」は前にも言いましたように、へりくだりの表現です。「ここにいます」より「ここにおります」の方が丁寧で、目上の人に言うのに適しているのはこのためです。したがって、話し手が自分のことを言うのではなく、乗客の一人に呼びかけるものとしては不適当です。「おいでしたら」「いらっしゃいましたら」などに直すべきです。

＊

以上で五十問についての解説を終えますが、何も点数の書いてないものは正解二点、まちがったもの零点とし、マイナス一点や、一点と書いてあるものはそれによりますから、二点、一点、零点のどれかをつけます。すると、五十問で、満点は百点となります。

皆さんは何点でしたでしょうか。その点とそれぞれの答えを記録しておいてください。この本を読み終わったとき、もう一度やってみることにします。そして、その時の総得点と今の総得点との差が、この本を読んだための効果ということになります。同じ誤りをしないように気をつけましょう。

2——日本語のなかの敬語



1――主語と敬語の関係

主語のない文章

「主語」というのは、ある文の動作をするものや状態を示すものが、だれか、何か、を示している語です。これに対して、その動作や状態、あるいは存在そのものを示す語を「述語」と言います。例えば、「花が咲く」「花はきれいだ」では、「花が」「花は」は主語であり、「咲く」や「きれいだ」は述語です。日本語では、このような主語や述語を立てる必要はないという意見もないではありませんが、まずは非常に常識的な意味でこの別を立てておきます。

日本語では主語などを立てないでもいい、という意見は、一つには日本語にはいつも主語があるとは限らないからでしょう。前章に五十の問題を出して、どこかまちがっていないかを聞きました。五十問ですけれども、①、③、㊳は、問題としている文がそれぞれ二つありますので、全部で五十三文がありました。このうちの、①の二つ、③のうちの一つ、⑤、⑦、⑨、⑭、⑮、⑱、⑲、㉖、㉗、㊱、㊴、㊵、㊶、㊸、㊻、㊽、㊾の計二十の文は主語があったと認めら

れます。あとの三十三にはなかったのです。主語のあった文は全部の三七・七パーセントでありました。

皆さんの中には、これらの主語のあった文を見て、あるいは主語のなかったとわたしがした文を見て、変だと思われた文もあったかもしれません。そういうことで、ちょっとはっきりしないところもあります。元来はこの概念は、ギリシア語以来の西洋古典の文法からの流れを引くものだからです。

実際の作品例から

わたしはかつて、『国文学　解釈と鑑賞』(至文堂)の臨時増刊号「文章表現ハンドブック」に「翻訳の文章」というのを書いて(昭和四十三年十一月)、日本語の主語について少し述べたことがあります。これを少々引いてみます。

例を、テオドール・シュトルム(Theodor Storm 1817―1888)の小説*Immensee*(『インメン湖』一八四九)からとります。これには岩波文庫に関泰祐氏の『改訳みずうみ』と、第三書房の星野慎一氏の対訳本とがわたしの手許にあります。

『インメン湖』の全十章のうち、第一、二、九、十章の百四十九文中、主語の省略があるのは

第二章で四文だけでした。ここの合計四章は人のことばがあまりないところなので、このように主語のない文が少ないのかもしれませんが、それにしても主語の省略はわずか二・七パーセントにすぎません。

翻訳の方はどうでしょうか。ドイツ語は、ピリオドからピリオドまでがたいへん長いという書き方をする言語です。その代わり、コロンやセミコロンが好きで、他の言語なら文を切るところを切らないのです。『インメン湖』の場合、上に述べた計四つの章でコロン、セミコロンの数は全部で七十六あります。先の文数百四十九と合わせると二百二十五となります。これに対して、対訳では二百四十六文、関氏訳は二百十九文ですから、コロン、セミコロンをピリオドとほとんど同じように考えて訳していることになります。この文数に対して、対訳三十三文、関氏訳三十六文が主語なしで、それぞれの全文数に対して、一三・四パーセント、一六・四パーセントとなります。やはり直訳を意識している対訳の方が主語なしは少ないということになります。

しかし、主語なしが多かった関氏訳も、他の翻訳でない日本語の小説に比べると主語が多い。多分これは原文の影響を受けたのでしょう。大石初太郎氏の指摘によりますと、日本の小説家の中では、井伏鱒二(いぶせますじ)氏は主語が多いということです。大石氏は「けれども私自身はたいへん疲

れてしまつてゐるのに気がついて、私は火鉢に凭れて眠ることにしました。」(『鯉』から)、「学生監は入口のところに立つて、詮索的な目つきで見まはしてゐたが、彼は急ぎ足に教室にはいつて来た。」(『休憩時間』から)などを例としてあげておられます。

傍線のところなどは、日本人の普通の感覚では主語はいらないと思いますが、このような主語のある井伏氏は、この『休憩時間』では全文の一六・二パーセントが主語なしで、これは例外的に低い方です。あとはそれぞれ最初の百文内外しか数えませんでしたが、三島由紀夫氏『潮騒』二〇・二パーセント、阿部知二氏『冬の宿』二六・七パーセント、川端康成氏『雪国』二六・六パーセントが主語なしです。この方々の中で三島氏が一番若いと思いますが、やはり主語なしが少なくなっています。

阿部氏の場合は、翻訳家としての訳著もあるので、その一つ、エミリ・ブロンテ原作『嵐が丘』の第一章では、二六・九パーセントが主語なしでした。

敬語で主語がわかる

以上は、本当のところは、主語があるかどうかの判定にはむずかしい場合もありますが、そこは割り切って判定してしまいました。なお、ここでは複文の場合は、主文章に限ってみまし

た。副文章に主語のないのは日本語の場合もっと多いでしょう。

この小説での数字は、先にあげた五十問の場合よりも主語はずっと多くなっています。この五十問は、話しことばを主体にしていますから、文章語と違って主語の出る率はぐっと少なくなっていて、先にも述べたように、半分以上が主語なしとなっています。

にもかかわらず、それぞれの解説のところでも一部述べましたように、主語がわかるのはどうしてでしょうか。

それは、敬語があるからです。例えば「社長、きょうはお宅に直行なさいますか」⑬では、「社長」という呼びかけがありますから、主語がなくてもよくわかります。しかし、もし「きょうはお宅に直行なさいますか」だけであっても、社長に話しかけていれば「直行なさる」の主語は社長であることはすぐわかります。「なさる」という敬語が使われているので、それが目上の人についてのこととわかります。そうすると、この場面では社長のこと以外にはない、ということになるのです。

このように、日本語は主語がなくても、敬語で主語がわかるという言語です。しかし「いらっしゃいますか」ということばを聞いただけではよくわかりません。だれかの家を訪ねて、出てきた奥さんに「いらっしゃいますか」と言ったら、御主人のことですし、どこかに出かける

話をしていてこう言えば話し相手のことです。

このように、敬語はただことばだけでなく、どのような場面で言われているかで判断するという面があります。状況から察するということがかなりあり、日本語は〃察しの言語〃だ、というのもこんなところにあらわれています。

『源氏物語』の昔から

以上のようなわけで、日本語にとって敬語はどうしてもなくてはならないものと言えましょう。主語を明示しない日本語の傾向に対して、これは日本語の不合理性のあらわれだとする立場があります。そして、確かに若い人には少し主語が多くなる傾向がないわけではありませんが、それでも主語なしの文章がゼロになって、欧米語ぐらいまで主語が使われるようになるとは考えられません。

こういうことは、日本語では昔からありました。これは古典を読めばすぐわかることです。例えば、『源氏物語』は今のわれわれから見ると主語を補わないとならないような文がたくさんあります。『源氏物語』の最初の「桐壺」の巻の「いづれの御時にか」という書き初めを第一文として、第四の文は、『新潮日本古典集成』によれば、次のようになっています。

朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえ憚(はばか)らせたまはず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

ここで「いとあつしくなりゆき」は、更衣(こうい)が病がちになったということで「更衣が」を補い、「あはれなるものに思ほして、……もえ憚からせたまはず」は、「帝(みかど)が」であります。後者は、「せたまふ」といった最高の敬語を使っているので、主語が帝とわかるのです。注釈書を読みますと、「××の」「○○に」「△△を」などとたくさん補っております。注釈書ですから多めに補ってはあるものの、主語だけでなく、いろいろなものが文脈やことばづかいからわかりきったものとして省略されていることがわかります。

日本語の論理性

これは決して日本語に論理性が欠けているのではありません。言語というものは、すべて論理性が備わっているもので、もしそうでなかったら話などできないことになります。ただ、ある言語の論理から見ると、他の言語は論理性に欠けているように見えるだけです。敬語は、ですから日本語の論理性を支えているといってもよかろうと思います。

おそらく日本語の話し手たちは、今後ともわかりきったことは言わず、主語を避ける傾向は持ちつづけるでしょう。一人称や二人称を明示するのを避けることは、おそらく民族性と言ってもいいほどで、これは今後も変わらないでしょう。とするなら、敬語は日本語からは消えないだろうと思います。

しかし、そうは言っても、敬語が日本語だけの現象ではないことはもちろんです。南不二男氏は岩波新書『敬語』の中で、世界の敬語を「日本語型」と「非日本語型」とに分けておられます。日本語型の代表は、南氏によれば「韓国・朝鮮語」ですが（代表の名をとらないで「日本語型」などとしたのでは韓国の方々に怒られそうです）、ジャワ語やヒンディ語なども「日本語型」とされています。

敬語の専用要素が少ないのが非日本語型で、南氏は代表的なものとして英語を挙げておられます。非日本語型にしろ、人間の言語である限り、ある待遇上の扱いをしないものはほとんどないと言ってもいいくらいですから、敬語のない言語はないことになります。ともあれ、これらのことに関しては専門書を見ていただくことにします。本書の目的はあくまでも「使いこなす」ことにありますから。

2——敬語の移り変り

志賀直哉の作品から

言語はわれわれの見ている前でも変化します。スイスの言語学者ソシュールは、既に今世紀の初めに言語を研究する観点を、時間的な変化を主としたものと、ある一定時の変化しない面とに、方法論上分けなければならないと述べました。では変化しない面はどの程度の年数を考えればいいのか。一世代のだいたい三十年ぐらい、と考えるひともあるようですが、とてもそんな長い時間静止しているものではありません。むしろ絶えず変化している、と言った方がいい。

ということで、われわれの扱っている敬語も変わってきています。この点については、大石初太郎氏など多くの先学が例を挙げて説明しておられますし、わたし自身もいくつか述べたことがあります。ここではそれらを紹介していくことにいたします。

大石氏の挙げておられたと記憶する例では、一人の作家、志賀直哉(しがなおや)の小説に見る夫婦の会話

の変化の例があります。

まず大正五年（一九一六）の『好人物の夫婦』には次のようにあります。

「そんな事を仰有つちやあ、もう駄目」

「よし、もう旅行はやめた」

「まあ！」

「まあでも何でも旅行はもうよす」

「そんなに仰有らなくてもいいのよ。御旅行遊ばせよ。いゝわ、多分仕ないつて云つて下さつたんですもの。私が何か云つておやめさせちやお悪いわ。おいで遊ばせよ」

妻は夫に対してたいへん丁寧です。次に昭和二年（一九二七）の作品『邦子』では、

「今まで貴方はそんな事仰有つた事ないわね。私初めてうかがふわ」

「云ふ必要がなかつたからだ。又余り自慢にもならない考だからだ」

「つまり悪い事だと、御自分でも思つていらつしやるんだわね」

「そりやあ、さうかも知れない」

「悪いとお思ひになるなら、これからは決してさういふことは遊ばさないでせう？」

「さう云ひたい」

邦子という奥さんは、少し下の階級の出身だということになっているので、丁寧さの度合いが低いのかもしれません。それでも次のものよりは丁寧です。次は昭和二十三年(一九四八)の『老夫婦』から。

「煮た方がいいかな」

「御飯のおかずだからね。……何んだか急に忙(いそが)しくなった」

「そんなにあわてなくてもいいよ。どうせ九時半のバスで行くより仕方がないぢやないか」

「さうねえ、幾ら急いでも九時半より早くは出かけられないのね」

「それから金を少し持つて行つてやる方がいいよ」

「さうね。……どの位?」

「この間位でいいかな」

「充分ですわ」

「包んでお祝と書いて置くといい」

これはあまり今と変わらないようです。以上の、特に前の二つのは、平均よりは上の階層のことばですから丁寧です。もう少し一般の水準に近いのは、志賀の最初の例と同じ年に書かれた夏目漱石『明暗』の津田夫妻の会話で、それは次のようになっています。

「おい何を見てゐるんだ」
「あゝ吃驚(びっくり)した。――お帰り遊ばせ」
「そんな所に立つて何をしてゐるんだ」
「待つてたのよ。御帰りを」
「だつて何か一生懸命見てゐたぢやないか」
「えゝ。あれ雀よ。……」

見るように、かなり今に近いけれども、今、夫に「お帰り遊ばせ」などという妻はいないでしょう。

使い分けの細分化

以上のような例を見ると、敬語の丁寧な形はだんだん使われなくなっているかのようです。しかし、おそらくゼロになることはないでしょう。南氏のいわゆる「日本語型」敬語がなくなるためには、日本語がまったく変わらなければならないと思います。ちょうど、方言がだんだんなくなるように見えて、一方では新しい方言ができてきているということがあるようですが、敬語については、非常に丁寧な語形が使われなくなる、ということはありますが、一方で使い

分けがだんだん細かくなる、ということもあるようです。そこで基本的な敬語の考え方が大きく変わることはないように思います。

先の例の津田夫人の名まえは、「延（のよ）」というのですが、人から呼ばれるときは、「お延さん」とか「延子さん」と言われています。つまり、本名は「延」で、それは敬称の接頭辞（すなわち、いつも他の語の前につけて、ある意味を示すけれども、独立しては使われないことば）の「お」や、敬称の接尾辞（同様に他の語のあとにつくもの）の「子」をつけています。このうち「子」は、このような意味を持った接尾辞とは考えられなくなって、今では名まえの一部になっています。

田丸卓郎というローマ字運動家で物理学者は、『ローマ字文の研究』という本を一九二〇年（大正九）に書いて、ローマ字文の書き方を論じています。この中で、女性の名まえの「子」は、Nobu-koのようにハイフンをつけるという規則を立てました。これは、前述のような意味が「子」にはあったからだと思います。

「子」についても、このように変化しているのです。

絶対敬語から相対敬語へ

先には『源氏物語』の例を挙げましたけれども、そんなに前にさかのぼらなくても、日本語

の敬語は上に述べたように大いに変わってきました。そういう敬語の歴史の中で一番大きい質的な変化は、「絶対敬語」から「相対敬語」への移行でありましたでしょう。

絶対敬語というのは、前にもちょっと書きましたように、相手が目上であればその人のことはだれに対してでも敬語を使って話す、というものです。これに対して、相対敬語は、話題にしている人が目上であっても、さらに目上の人には、話題になっている人については敬語を使わない、というものです。

例えば、自分の父親については、自分の家族以外の目上の人に対しては敬語を使わないで話すというのが相対敬語です。「お父さん、きょうは早くお帰りですか」と聞いて、「うん、早く帰るよ」と返事を得た場合、よそからの電話などに出たときは、「父は早く帰ると申しておりました」と言うのです。前の五十問のうちには、このような相対敬語に立つ問題が多くありました。問⑪などがそれです。

日本語は昔は絶対敬語でした。このことを示すのが狂言の『塗師(ぬし)』の有名な例です。平六という塗師が北の庄で何とか口に糊していますが、その平六の元の師匠が都では技が古くなってはやらなくなり、食いつめて都落ちし、元の弟子平六のところに身を寄せて何とかやっていこうとします。平六の方は、いくら古くなったとはいっても、元師匠ですから、それなりに腕の

立つ人間がやってきて仕事を始めたら、自分の方が飯の食い上げになると心配して、女房は夫が死んだことにして追い返そうとします。

師匠　して平六には何と致しましたぞ。

女　さればそのことでござる。平六殿は三年（みとせ）以前に空しゅうなられてござる（泣く）。

師匠　ヤアヤア何と仰せらるる、平六は三年以前に空しゅうなったと仰せらるるか。

女　なかなか、さようでござる。

ここで平六の妻は夫のことを、その師匠の前で、「平六殿は……、空しゅうなられて……」と言っています。つまり、夫に対して傍点のように敬語を使っています。今の日本語の標準では、これはまちがった使い方です。師匠の方は元の弟子の奥さんに対して、その夫である弟子のことを、「平六は……空しゅうなった……」と敬語なしで言っています。平六は師匠にとっては目下ですから、目下としての扱いをし、弟子の妻には、「仰せらるる……」と敬語を使っています。師匠は弟子の妻とはいえあまり親しくないので、敬語を使うことになるのです。

この絶対敬語の一つの方向として、多くの人から敬語を使って遇される人、例えば天皇などが、自分についても敬語を使うものがあります。雄略天皇の歌に「猪（しし）待つと　我がいませば　さ猪（ゐ）待つと　我が立たせば……」というのが一例で、「自敬表現」とか「自尊敬語」などとも言わ

れています。このような敬語はタイ語にもあるそうです。日本でもこれは上代にはそう珍しくはなかったと思いますが、後にはほとんどなくなりました。

また、絶対敬語を、平安時代の敬語で、天皇、上皇、皇后、皇太子などについてだけ使われる「御幸」「奏す」「啓す」などを言うこともあります。このような場合、先にあげた狂言の例のようなものを「家族型敬語」として区別するという説もあります。しかし、そのあとで発達してきた相対敬語を考えると、狂言の例のようなものを絶対敬語と言ってもいいのではないかとわたしは思います。

家族型敬語と社交型敬語

このように、絶対敬語から相対敬語へと日本の敬語は移ってきました。しかし、絶対敬語的なものの残りは、関西にはまだあります。例えば、電話に出た奥さんに、「御主人はもうお帰りになりましたか」と聞くと、奥さんは「はい、帰らはりました」と答えるということはよくあります。「はる」は「れる」に当たり敬意を示すと思っている関東人には、やや異様に響くことばです。

相対敬語はこれに対して、奥さんは自分の御主人を自分では目上だと思っていたとしても、

夫婦は一体と考えて、他に対しては奥さんは御主人については敬語を使わない、というものです。もし聞き手が自分たちの子どもであれば、御主人への敬語はもちろん使ってもかまいません。このように、話し手と聞き手、それが話題としているものとの相対関係で敬語の使い方が決まるので、ここでは「相対敬語」としておきます。また、先の「家族型敬語」に対して、これを「社交型敬語」ということもあります。

先に、日本語では、絶対敬語から相対敬語に移り変わった、と述べましたが、もちろんこれは日本語での事情でありまして、敬語というものは「日本語型」ではすべてこういうように変遷するものでもないようです。韓国語では、絶対敬語がだんだん強くなるようだ、と南氏は言っておられます。したがって、日本語のような相対敬語の方が発達した段階である、とはもちろん言うことはできません。

3——敬語と「親しさ」

敬語というものは、話し手、聞き手、それに必要なら話題になるものの上下関係で使い方が決まるものです。上下関係というものは、特に下の者からすると親しさとは無縁のものです。すなわち、敬語は親疎の関係で言えば、疎のとき生ずるものです。よそよそしい関係のとき、ということになります。これは、日本語では初めは敬語を使って話していたのが、だんだん親しくなると友人づきあいのざっくばらんな会話になることからもわかるでしょう。夫婦げんかの際には、ことば使いがことさら丁寧になることもあります。敬語はまた「敬遠」ということと関係が深いのです。

戦後は、親しさのウエイトが大きくなりました。例えば、小・中学校、高等学校などでは、先生は児童・生徒と親しむということを心掛けるようになりました。鞭を振り振り教えていた〝すずめの学校〟から、だれが生徒か先生かわからない〝めだかの学校〟に変わった、と評されるゆえんです。このような関係で、子どもたちは先生に敬語を使わなくなりましたし、先生の方も教えられる方とのけじめをつけすぎて嫌われるのを怖れるようになりました。

学校という社会は、家庭という個人的な閉ざされた社会から、初めて人々が入る開かれた社会であったのですが、こういう役割が戦後なくなってしまいました。それまでは学校で初めて他人の目上の人に接し、そこでどういうことばづかいをすればいいかを知ったのです。ところ

が今、先生の方が子どもと同列に降りてきてしまったので、子どもたちは、大学生に至るまで、他人の目上の人へのことばづかいの訓練の場を失ってしまいました。これが、今、新入社員のことばづかいはなっていない、学校ではどんな教育をしていたんだろう、という社会人からの批判を受けることになった原因です。

このことはいうまでもなく、親しい関係を作って教育効果を上げようとしたためです。そしてそのことはそれなりのプラスの面があったと思います。戦争中までの上からの強圧的な教育への反省や反感も、この傾向に拍車をかけたでしょうし、それはそれだけの必然性もあったと思います。しかし、ことばのけじめが失われたことも事実であります。

戦前の教科書・戦後の教科書

親子の関係は、日本ではやはり親しさを大切にしていますから、普通は敬語をあまり使わないことは、右に書いたことからもわかると思います。けれども、わたしのような年代で純粋に戦前の小学校教育を受けた者は、次のような教科書で習いました。大正七年度から使い始めた国定三期の『國語讀本』です。例えば、その巻二（と言いますから、一年生の後半用）の「二十　オクスリ」という課の全文を書き写してみます。

太郎　ノ　オカアサン　ハ　カゼ　ヲ　ヒイテ　ネテ　ヰマス。太郎　ハ　イマ、オカアサン　ガ　オクスリ　ヲ　ノムトコロ　ヘ　キテ、
「オカアサン、ソノ　オクスリ　ハ　ニガウ　ゴザイマス　カ。ニガイ　ナラ、オサタウヲ　入レテ　オアガリ　ナサイ。」
「イイエ。サウ　ニガク　ハ　アリマセン。」
「ソレ　ナラ、ソンナニ　スコシ　ヅツ　ノマナイデ、モット　タクサン　オアガリ　ニナツタラ、ハヤク　ナホリマセウ。」
「イイエ。サウ　一ドニ　ノンデ　ハ　イケマセン。オクスリ　ハ、オイシヤサマ　ノ　オツシヤル　トホリ　ニ　シテ　ノマナケレバ　ナリマセン。」

これに対して、たまたまわたしの家にあった近ごろの国語の教科書を見てみました。現在使われているのではないでしょうが、昭和五十七年の光村図書出版株式会社のものです。右の「オクスリ」に当たる学年には親子の直接の会話は出てきません。やっと短いのが「二上」に出てきます。

「どう　する。あの　バスタオル、もって　かえる。」
おかあさんが、わたるくんの　かおを　のぞいてみました。

「いいよ。あの　海、夜まで　かえるくんに　かして　あげる。」

わたるくんは、そう　いって、そっと　森から　はなれました。

「海」というのは、わたるくんが寝るときいつもかけていたタオルのことです。風で飛んだのを探しにいくと、森の中で蛙がそれで遊んでいたのです。この課にはあと一ヵ所おかあさんとわたるくんの会話が出てきますが、短いので、「二下」の「くまの　子　ウーフ」からとってみましょう。

「おかあさん」

と、ウーフは　いいました。

「ポンて、たまごを　わったでしょう。そしたら、ポンて　たまごが　出て　きたね。きのうも、その　前も　そうだね。」

「そうよ。たまごが　どうか　したの、ウーフ。」

と、おかあさんが　たずねました。

「どうか　しないんだね、たまごって。」

これは熊の子のウーフとそのおかあさんですから、熊の会話ではありますけれども、もちろん人間のことばとしてここでは考えてもいいのです。

現実の反映

「オクスリ」の方はたいへん丁寧なことばを使っています。これに対して近ごろの教科書は、敬語なしの普通の会話になっています。昔は親子でもこんなことばを使っていたのでしょうか。太郎のことばも「苦うございますか」「おあがりになったら」などと言っていますし、おかあさんの方も「苦くはありません」などと、デス・マス体を子どもに使っています。いくら昔でも、現実にこんなことばは使っていなかったのではないでしょうか。

現実のことばづかいからするならば、おそらく今の教科書は実際のことばに近いのではないかと思います。現実の反映ということが今の理念になっているのでしょう。これに対して、昔の教科書は理想を求めていたと言えるのかも知れないと思います。右の例では、「たまごをわったでしょう」と、ここだけ子どものことばでデス形を使っています。この点から言うならば、ここでは文体の統一を破っている、とも言えるわけですが、しかしこのような破格は、むしろ現実の正しい反映であるような気がします。そのくらいリアリズムに徹しているのです。現在はこういう考え方が主流を占めているのでしょう。

昔のおかあさんと太郎との話は、いわば理想を求めているると申しましたが、教育というものにはそういう理想的なものを被教育者に示す役割もあるということで、いわばこれはそのころ

の教育思潮といったものに関係があることになります。

少ない敬語教育の場

日本の状況はだいたい以上のようで、現在は親しさの方にウエイトが置かれている、と言っていいでしょう。ところが、韓国では、家族間でも敬語の原則が崩せないのだそうです。したがって、祖父母にはもちろん、父母にも敬語を使わなければならないのだそうです。これは多分、前に述べた絶対敬語の考え方とより結びつきやすい考え方だと思います。家庭内でもこのとおりですから、まして学校などでは、先生と生徒との間には厳然と敬語が使われているものと思います。

このことで一つ思い出すのは、戦後まだわたしが学生時代に、何かの用があって、東京学芸大学の先生に会いに行ったことがあります。ところがその先生が出入りする学生を、「××」と呼び捨てにするのに一驚しました。わたしなどはそのころ大先生方に、「野元君」などと呼ばれていたのです。その学芸大学でも、今はおそらくそんなことはないと思います。おそらくそうなったのには、女子学生の存在ということもあったかと思います。こうして教育の場における教える者のことば上の絶対優位というものは消え去ってしまったし、このような教員養成大学

での親密化が、学校一般の親密化の原因となったのでしょう。
今、多くの人は、目上の人へのことばづかいは、学校でのいろいろなグループで習得したと言っています。運動部を代表とするこのような先輩・後輩のグループで、先輩へのことばづかいや態度を教え込まれるようです。このようなグループの行動パターンは、古い封建思想の残りかすというように一言のもとに否定されることもありますが、敬語というものがある以上、この場所に残された重要な敬語の教育の場でありましょう。先生が自分の任務の一部を放棄している以上は仕方のないことです。

4――方言と敬語

関西は敬語の〝先進地域〟

先に、絶対敬語については関西にその傾向があることを述べました。東京のことばは、江戸開府後の新しい社会、特にその後期には商業の発達した社会として、身分をまったく捨て去ったわけではないけれども、もう少しその枠をゆるめて、その代わりに商業の枠をより強く意識

しているのではないか、と思います。

江戸は関東にあり、関東は元来はあまり敬語が発達していなかったところだったようです。現に北関東から南東北地方は極端で、〝無敬語地帯〟という人もいるくらいです。

そんなところも、徳川幕府の中心地となると必然的に大都市となり商業が発達します。商業は売り手と買い手との交渉を必要とします。交渉にはことばが使われます。基本的には買う方が強い立場ですが、必ずしもいつもそうではないし、そこにいろいろの要素がからんできて、つまりは平等ということはきわめて稀となります。平等でなければどうしても敬語を使わなければなりません。しかし、基礎となっている関東のことばはそう敬語が発達していませんので、どうしても敬語を他から輸入しなければなりません。敬語が大いにあり、しかも江戸が強く関係を経済的活動の中で持たざるを得なかった先進の商業都市、京・大阪にこれを求めることになります。

このようにして、江戸の、そしてその後の東京のことばは、特に敬語的な面で関西の影響を強く受けています。例えば、敬語の助動詞「ます」の打消形は、「ません」と、東日本方言では例外的に打消の助動詞「ん」を使っています。関東流なら「ない」のはずで、芝居などに出てくる概念的田舎語では「行きましねえ」などと、「ない」の訛言形「ねえ」を使っています。

「ございます」という割に高い敬意の段階を示す語が、形容詞につくときに、これまた関東には珍しく関西流の「う音便」を使って、「おもしろうございます」「お寒うございます」などとしています。関東では「ございます」につかないときは、「おもしろくなる」「お寒くなりました」などと、「う音便」はとりません。関西ではこのような「なる」につづくときも「う音便」となります。

また「いる」よりも「おる」は、目上に対するへりくだりの表現で使う傾向が東京語などにはあります。人が「いる」というか「おる」というかを、敬語的文脈をまったく考えずに調査をすると、だいたいは東日本が「いる」となり、西日本が「おる」となります（なお「ある」というのが和歌山などにありますし、大阪は比較的「いる」の力が強いようではありますが）。しかし、これがへりくだりの表現か、あるいは丁寧な表現では、「おる」となることが多いようです。「明日は自宅におります」など。

地域で異なる使い分け

関東は右に述べたようにあまり敬語が発達していないと思われます。その一つとして、わたしどもの研究所で昔やった調査によりますと、同じ内容のことを、①近所のよくつきあってい

る同じ年ごろの男、②近所の顔見知りの年下の男、③近所の顔見知りの年上の男、④小学校の男の校長先生、⑤見知らぬ同じ年ごろの男——という五人に話すとき、いく通りにことばを使い分けるかを、男の人に具体的にことばを言ってもらって平均しますと、例えば、「この雑誌はなかなかおもしろい」という内容を、東部方言で二・七通りに言うのに対して、西部方言では三・一通りに言い分けています。九州方言ではさらに多く、三・六通りに言い分けます。東部方言と西部方言との境は、静岡・長野・新潟の西境とします。これで見たところでは、日本では、だいたい西に行くほど使い分けを多くしているようです。これはいろいろな内容のことばについても言えることです。

西九州では、敬意を示すのにたいへん多くの文法的な手段を持っているようです。ある人によると、それはまるで敬語の見本市のようだそうです。ナハル系、ンサル系、ス・サス（ラス）系、ルル・ラルル系、マイラスル系、ゴザル系がそろっていて、それぞれで敬意の微妙な差を表わしているということです。

この例は、文法的な敬意の表し方と言ってもいいと思いますが、なお、単語で示す方法もまた一方ではあります。例えば、他の家の家長である「父」を、社会的階層によっていろいろ言い分けていた例があります。二、三の例をいくつかの報告から拾ってみます。

上村幸雄氏によると、石川県能登の町野町では、上の階層から順に、〈オトトサマーオヤッサマーオトトートトートトートッツァマーバッパーチャーチャーチャー〉であり、柴田武氏によると、新潟県上北谷村では、〈オトッツァマーオトッツァンーオトトーツァーツァーヅァー〉であり、渡辺友左氏によると、福島県北部では、〈ダンナサマーダンナサンーダンナーダンボーオヤンツアマーオヤジ〉の順であるそうです。

これらでは、例えば、石川県町野町で、「トート」の方が「トッツァマ」より上であるのは、この土地の人しかわからないでしょう。わたしをも含めて一般の人は、「トート」よりも「トッツァマ」の方が上ではないかと思うのではないでしょうか。こんなわけで、この単語的な敬意の表し方は、この単語についての知識がない限りわかりません。もっとも文法的の方も、ある語が他の語とどっちが丁寧か、といったことは知っていないといけません。

このように家格でそこに属している人の呼び名が変わり、右の「父」だけでなく、その配偶者や子どもまでも呼び名を異にする、というのは、農村社会での土地所有を主とする階層分化の成立と無関係ではありません。もっともこのような階層は、戦後の農地改革とそれ以後の過疎化という農村社会の大変動の中で多くは失われているようです。

わかりにくい丁寧度

相手のことをはっきりと言いたがらないのが日本語ですが、そこを無理して言うと、三重県上野市では、昔のわたしどもの調査によると、丁寧な順に、〈アナタサマ―オタクサン―アンタハン―オウチ―アナタ―オタク―アンタ―キミ―オマン―オマエ―ワレ〉となっていました。これは全国の人にはわからない語もあるし、またわからない順序であることもあるようです。わたしの感じでは、「オタク」の方が「アナタ」よりはていねいであるような気がしますが、これはよその土地の者の勝手な考えで、何の力も持っていないことです。

平山輝男氏によると、東京都の青ヶ島では、「オメー」という語は非常に丁寧な二人称の呼び方だそうです。これもここで調査しなければ、あまり丁寧な語形とはわからないし、むしろ乱暴なことばと思ってしまいます。

この「オメー」はもちろん「オマエ」と関係があり、「オマエ」の崩れた、あるいは訛(なま)った形だと思いますから、「オマエ」よりは丁寧ではない、というのが普通の考えですが、この青ヶ島では古い「オマエ」が「オメー」になったあとに、新しく入ってきた「オマエ」があって、これは東京語の意味と同じく、乱暴な、目下へのことばとなっている、と言います。ですから、この島では「オメー」の方が「オマエ」より丁寧なのです。

このように、単語については、文法よりも推測がつきにくいようです。「それでねえ」などと言うときの「ねえ」に当たる部分、よく間投助詞などという部分について、紀州では丁寧な順に〈ニーーノーーナー〉であるということです。「それでにい」と言うと、たいへん丁寧に言っていることになりますが、これはその地方以外の人にはまずはわかりません。「それでなあ」が一番乱暴ということです。これは東京語でもあまり丁寧ではありませんから、だいたいの人はそう思うでしょうが、一方これが一番丁寧だという地方があってもおかしくはありません。

方言はだんだん少なくなるという傾向があることは否定できません。以上に挙げたような例は今は薄れているとも考えられます。しかし、一方では新方言ということが言われていて、新しい地域的傾向が芽生えつつあることも実証されていますので、敬語的現象についてもこれがないとは言えません。

5——敬語についての考え方

時の経過とともに

敬語の使い方は、常に場面とかかわってきます。その場面にとって、どのように言うのが最も適当か。その適当と考えられるように言うのが敬語の使い方がうまい、ということになります。しかし、その一番うまい使い方というのは、いつも確定しているとは言えないところがあって、そこが一つ問題になります。

例えば、たびたびふれていますが、国語審議会で出した『これからの敬語』というのがあります。これは昭和二十七年当時の国語審議会としての考え方で、ある言い方をよしとして推奨しているのですが、これには時として問題になるものがあります。二、三の例を示してみましょう。

『これからの敬語』では、「行かれる」か「お行きになる」を使うことをすすめているように考えられますが、これを合わせたような「お行きになられる」は敬語を重ねて使っているもので

よくない、と考えています。しかし今、「お行きになられる」という形はよく聞かれるところで、積極的に誤りとも言えないような気がします。

これも第三章で述べますが、敬語の使い方としては、「れる」「られる」がいいと、『これからの敬語』では考えているようです。しかし、「れる」も「られる」も敬意を示すためとともに、受身や可能をも示します。「起きられる」で言えば、「社長はもう起きられた」など多くは敬語として使っているのですが、「遅く寝たのにぼくはきょう早く起きられた」と言えばまずは可能です。また「夜中に子どもに起きられて困った」と言えば受身、この場合は迷惑の受身と言われているものです。このように多義であるのは原則として好ましくありません。

ついでに言えば、近ごろ可能を「起きれる」というのは、可能に限っては新しい語形を使い出した、という点ではプラスであるかもしれません。

あるいは『これからの敬語』では、呼びかけるのに、女子社員にまで、「課長さん」でなく「課長」と言うのがいい、と言っているのには、一般人には大いに抵抗感があるようです。もっともわたしは研究所ではだれからも常に「所長」と呼ばれています。「所長さん」と呼ぶ人があれば、それは所外の方です。

「夫」を何と呼ぶか

この問題は『これからの敬語』では触れていませんが、夫の両親に対して夫のことを何と呼んだらいいか、というような問題では、いろいろの考え方があるようです。少し挙げてみましょう。

井上清志氏『女性の言葉』（木鐸社　昭和十八年刊）には、「夫の近親に対する場合は、姓をいふよりも名で呼んだ方がよいでせう」とあります。これだけでは、「さん」をつけるかどうかははっきりしていません。しかし、多分これは「さん」づけではないのだと思います。やはりそのころの徳川義親氏『日常礼法の心得』には、「舅（しゅうと）、姑（しゅうとめ）など目上の家族に対しては『一郎』だとか『三郎』だとか名前を呼び捨てにするのが本当である」としています。

これに対して、昭和十九年に出た、日本語教育振興会の『現代敬語法』（三宅武郎氏執筆）は、意見を異にして「あるいは夫の名（姓名の名）を呼捨てにする人もある。しかし、これは少しく必要以上に親愛味が出てゐる、言はゞ露骨すぎるので、一般の標準的な言ひ方としては推奨し得ない。けだし夫の『名』を直称することは、家庭的にも社会的にも、妻として差控えるべきであると考へられる」と述べています。

要するに、このような問題についてはどうも意見がまとまらないようです。以上の例はたま

たま戦争中のものですが、戦後についても同じで、この点についての一致したきまりはできていないでありましょう。しかし現実には、ではどう言うべきかという問題は依然としてあります。

これに対しては、わたしは聞き手がどう考えるか、ということが大きくからんでくると考えます。自分の息子を嫁に「一郎」などと呼び捨てにされるのを不快に思う親もあるし、そうでない親もあります。最初に言ってみたときの反応でどっちかを判定すればいいでしょう。この反応がよくわからないようでは、ことばのうまい使い手とはならないでしょう。

一般の人では調査をすると、「一郎さん」が一番多いようです。「一郎」というのはそうはありません。「主人」というのはちょっとおかしいと思いますがどうでしょうか。子どもが生まれたら、「パパ」「お父さん」などと言ってのがれることができますし、これが現実には一番多いのではないかと思います。

人によって異なる感じ方

その夫が姑のところにいるかどうかを聞くのに、夫の動作についての使い方はこれよりもずっと簡単で、あまり問題はなさそうです。「伺っていますか」「お寄りしてますか」「おじゃまし

ていますか」など、へりくだりの表現を使って、夫の実家を上と見なす表現が考えられます。「いらっしゃいますか」は夫への敬語が目立ちすぎてあまり適当でないと思われます。

右のよしとする三例については「～て（い）る」とすべて「いる」を使いましたが、へりくだりが徹底すれば「おる」を使って、「伺っておりますか」「伺っておりましょうか」とした方がいいと思います。ここで「おりますか」と「おりましょうか」が出ましたが、「おりますか」と確言形を使うよりは「おりましょうか」と多少の疑いを残した方が直接的でなくて丁寧だ、と考えられます。

また「おりますか」より「おりませんか」と否定形を使った方が丁寧とされています。さらには「おりませんでしょうか」の方がより丁寧です。では「おりましょうか」と「おりませんか」とはどちらが丁寧か、という問題があります。わたしは「おりましょうか」の方が丁寧だと思います。「おりませんか」は否定とは言ってもやはり確言的な性格を持っていますので、ちょっときつく響かないか、というのがその理由ですけれども、これは人によって感じ方が違うかもしれません。

このあたりが敬語のむずかしいところで、人によって意見の違うところです。だいたいのところどうだというところまでは多くの人の意見が一致しても、細かいところになると必ずしも

一致しないことがあります。こういうことをまず頭に入れておいて、以下、さまざまな敬語についてのきまりを第三章で眺めてみることにいたします。

3 敬語についてのきまり



1――敬語の種類

敬語は「待遇表現」である

本来はこの章の主題は、最初に述べるべきことであったかもしれません。ここで挙げる敬語の種類の名称を、すでに今までの記述に使ってきています。改めてここで説明しましょう。

まず「敬語」というと、うやまいのことば、うやまいの表現であるように考えられます。もちろんこの語の一般的な意味はそれでよろしいのですが、この本でいう「敬語」は、もう少し広くとっておきます。同じ内容を表わす言語形式（ことばの形をとったもの）が、話し手、聞き手、その他の環境によって、つまり場面によって変えられるとき、その表現形式を敬語という、というように考えます。これを「敬語」として「敬」の字がつくことに抵抗を感じる向きもありますので、そのときは「待遇表現」と言ってもいいかと思います。

いずれにせよ、ここで主として問題とするのは言語形式ですので、言わないことはここでは扱わないことにします。例えば無視というのも一つの待遇法でしょうが、ここでは扱わない、

というわけです。また、言語形式に伴ういろいろの表情や態度もここでは扱いません。「おはようございます」とことばだけで言うか、これを言うと同時におじぎをするか、するとすればどの程度の深いおじぎで時間がどのくらいかかるか、ということは、もちろん敬意の程度を反映しているのですけれども、ここでは問題としません。こういうことは「礼儀」に関することであって、「敬語」はこの「礼儀」のうちの一部である、ということになります。礼儀とか礼法の本はまた別にありうることになります。

このように除外はしますけれども、もちろん関係がないわけではありません。寝ころびながらことばだけは丁寧な電話をかけている、というようなのは、人間の行為としてはどうかなとは思いますが、これは人間の生き方の問題であって、ことばの問題ではない、と考えるわけです。このことをまず断わっておいて敬語の種類のことに入ってまいります。

「敬体」と「常体」

最初に「敬体」と「常体」という別があります。普通これは、敬語を含む文体を敬体と言い、含まない文体を常体と言います。例えば「けさは早く起きましたね」という文は、「ます」という敬語の部分を含んでいるので「敬体」です。これに対して、「きょうは早く起きたね」はそう

いうものを含んでいないので「常体」とします。
「きょうは早く起きやがった」という言い方があるとすれば、これも敬語が入っていないという立場からするとさっきの定義では常体になります。しかしどうもこれは「常(つね)」のものではありません。「敬体」がプラスの方向のものであるとするならば、「常体」は言わばゼロのもの、あるいは原点に立つものです。「きょうは早く起きやがった」は、ゼロあるいは原点からするならば、プラスとは反対の方向のもの、つまりマイナスである、ということになります。

　プラスとかマイナスとか言いましたが、話し相手のことを「きょうは早く起きましたね」と言うよりは、「きょうは早く起きられましたね」と言う方がより丁寧、つまりプラスの度が高くなります。また、ある人のことを言うのに「きょうは早く起きやがった」よりは「きょうは早く起きたぞ」の方が、マイナスの度は少ないようです。

　ということで、言わば上下の線上に、敬語表現の観点から、原点ゼロからの相対的な位置が各文について決められます。もっともどこに位置するかは万人が一致するとは限りません。だいたいのところは一致するとしても、細かいところまでは一致しないものです。

「丁寧(ていねい)語」と「尊敬語」

さて、今まで漠然と敬語表現上、上とか下とか言っていましたが、これはどうも二つの方向に分けて考えた方がいいようです。

右の例で言いますと、「きょうは早く起きましたね」という表現は、ここでは聞き手について述べたということにしましたが、そうしますと「起きる」という動作を聞き手がしたのですが、実はその部分については尊敬の度を示していません。「ます」というのは敬語ですが、これは「起きる」という動作をした聞き手に対しての尊敬ではなく、この場で聞いている聞き手に対して、丁寧に表現している、ということになります。つまり話し手の、聞き手に対する改まった気持を表現して丁寧に言っているだけであります。丁寧に言うことによって、話し手が聞き手を尊重していることを示しているのです。

このような、丁寧な言い方で使うことばを「丁寧語」と言います。「です」や「ます」、それに「ございます」のようなものは典型的な丁寧語です。

「きょうは早く起きましたね」より、「きょうは早く起きられましたね」の方が上だと書きました。これも話し相手、つまり聞き手が「起きる」という動作をするということになると、「起きられる」はその「起きる」という動作を尊敬して言っていることになります。そしてそれに丁寧語の「ます」がついて、同じ人間ではありますが聞き手に対する丁寧さをあらわしています。

「きょうは早く起きられた」というと、聞き手に対しては丁寧語を使っていません。この場合は聞き手には丁寧でないのですから、尊敬して使っている「起きられる」という動作をしているのが聞き手では不自然です。どうしても話し手、聞き手以外の第三者ということになります。

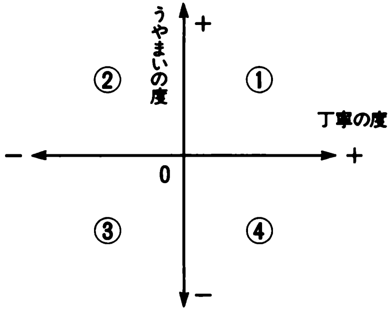
その第三者への尊敬を示していますから、このような語を「尊敬語」といいます。もちろん聞き手についても「尊敬語」はあります。尊敬語はうやまいの度を示すものですが、やはりマイナスの方向もあります。「きょうは早く起きやがったね」はマイナスの尊敬語ということになります。

うやまいの度・丁寧の度

「尊敬語」はうやまいの度によって変わるものですが、「丁寧語」は丁寧の度によって変わるものです。この二つの方向を直角に交わる線で示すことにしてはどうか、と前から考えています。

このように考えるとき、次図で示すように、数学でいう第1象限①以下、第4象限④までができてきます。

「きょうは早く起きられましたね」は、うやまいの度も丁寧の度も、どちらもプラスですから第1象限の①のところに位置している表現となります。



「きょうは早く起きやがったぜ」は、両方がマイナスなので第3象限の③となります。

「きょうは早く起きられたぜ」は、うやまいの度はプラス、丁寧の度はマイナスという第2象限の②となります。

同様にして「きょうは早く起きやがったようでございます」は第4象限の④のところに位置することになります。この④の場合は、話題になっている人についてはまったくうやまいの度はマイナスですが、話し相手には「ございます」を使っていますので丁寧の度が相当高い、ということになります。

このような点で敬語には「尊敬語」と「丁寧語」とが、うやまいの度、丁寧の度について、それぞれあることがおわかりになったと思います。

へりくだりの「謙譲語」

次の二つの種類は、この二つの度についてのことですので、

言わば二次的なのかもしれませんが、挙げておかなければなりません。

「ぼくがやろう」「お母さんに行かせよう」に対して、「わたくしがいたしましょう」「母に伺わせよう」と言った場合、傍線の部分は、話し手自身、または話し手の属する者や、あるときは物についてのへりくだった言い方です。「ぼく」は目上の人相手には普通には使えません。そういう人に対して自分のことを言うときは「わたくし」を使うのが一番へりくだった言い方です。「やる」「する」に対しては「いたす」、自分の「お母さん」については「母」、目上の人などのところに「行く」のは「伺う」というのが、それぞれへりくだりの表現です。このような場合に使うことばを「謙譲語（けんじょうご）」といいます。

この謙譲語は、目下の方を下げることによって相対的に相手を上げるために使われるものです。うやまいの度は、うやまう側とうやまわれる側との、相対的な上下間の距離の大小で決まりますから、へりくだりで自分の側を下げることによっても表わすことができるわけです。このようなことで、この謙譲語はもっぱらうやまいの度に関したことになります。

これに対して、尊敬語の方は、うやまわれる側をひたすら押し上げることによって、うやまう側との上下の差を大きくするのであって、力の向く方向は逆ですけれども、結果としては同じく差を生じさせるものです。

「美化語」

以上は普通に言われている「丁寧語」「尊敬語」「謙譲語」の三つの説明でした。しかし、近ごろは第四の種類として「美化語（びかご）」を挙げる人が多くなったようです。

これは例えば、「わたくしは今お勧めしています」「おやつにお菓子を食べる」「お手洗はどちらでしょうか」の傍線のように、別に尊敬や謙譲を示すのではなく、ただ物言いを美しく上品にするために使われる語があります。傍線の語の順に言いますと、「勧めて」「三時（の間食）」「菓子」「食う」「便所」「どこ」の、それぞれ美化語です。

美化語は尊敬語や謙譲語とは違う、ということを書きましたが、それからもわかるように、主としてうやまいの度とは関係が薄いものです。むしろ丁寧の度に関与するところが大きい。「お菓子」などの「お」や「ご」は、美化語のこともありますが、また尊敬語のこともあります。「お宅さまからいただいたお菓子、たいへんおいしゅうございました」などと言うときの、相手に属するものについてつける場合は、美化語的要素もありますが、意識としてはむしろ尊敬語であると思います。

単語的区分と文法的区分

常体の「きのう君は山本と一緒にどこへ行ったか」に対して、敬体は「昨日（きくじつ）あなたは山本さんと御一緒にどちらへ行かれましたか」が考えられます。これを比べると、どこをどう直したために敬体となったかはっきりします。これを整理してみますと、

(1)敬語にだけ使われる単語を使う。〈君→あなた〉

(2)うやまいを表わす接辞をつける。接辞とは、常に別の語にくっつけてだけ使われて、独立しては使われないものです。〈山本＋さん〉のように後ろにつくものを接尾辞、〈御＋一緒〉のように前につくのを接頭辞と言います。

(3)うやまいや丁寧を表わす助動詞や補助動詞をつける。〈行く→行かれ〉は尊敬の助動詞「れる」をつけたもの、〈た→ました〉は丁寧の助動詞「ます」をつけたもの。もし〈行く→お行きになる〉でしたら、接頭辞「お」と補助動詞「になる」とを使ったものです。

以上のうち、(1)と(2)は単語的、(3)は文法的と言えるでしょうが、これはどちらかと言うと、という前提つきで、この二つの間には決定的な境界線がありません。なお単語的というのにもう少し専門的な用語を使えば語彙（ごい）的ということになりましょう。

先の二つの文、常体と敬体とを比べたとき、常体→敬体という形をとって挙げると、〈きのう

↓昨日〉、〈どこ↓どちら〉がなお違っていました。どちらも単語の違いですが、特に〈きのう↓昨日〉の方では、敬語だけに使われるかどうかという点がはっきりしません。「きのう」が口頭語的、「昨日」が文章語的であることは事実です。そして文章語的であるが故に多少の改まりのニュアンスがあり、したがって敬語的になるのだと思います。「どこ」は場所を示し「どちら」は方向を示す。という点で「どちら」の方が直接的でなく、したがって敬語的だ、ということにはなります。

この文法的か単語的か、ということは前にも書きましたが、種類のうちの一区分ではありますのでここに書きました。

2——尊敬語と謙譲語

動詞について

さて、以上のような種類を認めた上で、まず尊敬語と謙譲語のことをもう少しくわしく書いてみることにします。取り上げることばの見出しは、原点ゼロあるいはそれに近いもので挙げ

ます。敬語に使われる単語では、動詞と名詞とがありますので、その順であげることにします。

【する】……

「する」の意味の「やる」もここに入れておいていいでしょうが、「やる」にはまた「与える」の意味もあるので、ここでは見出しには立てないでおきます。

「する」よりも一段上のうやまいの度を示すものとして「なさる」があり、さらにそれより上のうやまいの度を示すものとして「遊ばす」があります。

自分の「する」動作のへりくだりの表現としては「いたす」があり、漢字を使うときは「致す」と書きます。

以上のうちでは「遊ばす」は最上のものであり特に男性はあまり使わないようです。

【食う・飲む】……

飲食の摂取に関するものです。飲酒はもとより喫煙も含みます。「食う」と「飲む」とでは等しく見出しに立てましたが、どちらかというと「食う」の方がマイナスの価値があって、女性はまずは人前では使えないと言っていいでしょう。

「する」の場合の「なさる」に当たるものとしては「あがる」があり、それよりも一段うやまいの度の高いものとして「めしあがる」がありますが、「めしあがる」は「遊ばす」よりは低い

と認められます。「上がる」「召し上がる」と書くこともあります。

謙譲語としては「いただく」があり、漢字では「頂く」「戴く」などと書かれます。この「いただく」は、ものをもらうときの謙譲語としても使いますので、またそこでも取り上げることにいたします。

「いただく」は、また美化語としても使われます。食べ物のことを「いただき物」などと言うのがその例ですが、言うまでもなく「いただき物」には「これはいただき物ですが」というように、ひとから賜わった物という意味もあります。

「食う」は少しマイナスだと申しましたが、「食らう」となるともう少しマイナスの度が強くなるようです。ある女性のエッセイストがロンドン塔の鴉（からす）が物を「くらう」と書いているのを見て驚いたことがありますが、これはわたしだけの語感でしょうか。

「食う」は「喰う」とも書き、「飲む」はまた「呑む」とも書きます。ゼロの語としては煙草の「のむ」は「喫む」などと書くこともあります。また、「吸う」も原点ゼロの語としてはあります。

【寝る】……

少しうやまいの度の高いものとして「やすむ」がありますが、これについては、やや美化語

的に使われることもあるようです。もう少しうやまいの度が高いものとしては「およる」があって、「およっていらっしゃいます」のように使う場合もありますが、今は使用頻度はあまり高くはありません。

謙譲語としては「ふせる」、漢字を使うと「伏せる」があります。これは文語で言うと「伏す」でありまして、助詞の「て」がつくと「伏せて」になるはずですが、「伏せって」と言う習慣です。「語る」が「語って」などとなるのと同じように、「ふせって」ですが、この「ふせって」以外の形は使わないことになっていまして、打ち消しも「ふせっておりません」などと、「おる」を使って言うということになっています。

【死ぬ】……

「なくなる」が一つうやまいの度の高い語になります。さらに高いものとして「かくれる」がありますが、この語はこのままで「かくれられる」などと使うことはあまりなく、「おかくれになる」の形で表わされるのが普通です。「おかくれになる」は一般人の死については言いません。皇室関係しか言わないのではないかと思います。

「死ぬ」の謙譲語というのは使いません。自分の肉親についても「父が死んだとき」というようです。ときに「父がなくったとき」と言うことがないわけではありませんが、正確に申せば

うやまいの表現なのでよくありません。「父をなくしました」ということはよくあるので、これとの混同があって「父がなくなりました」と言ってしまうのではないでしょうか。
「死ぬ」ののしりの表現には「くたばる」などがあります。よく「死にぞこない」のことを「くたばりぞこない」などと申します。

【行く・来る】……

うやまいの表現では「いらっしゃる」を使いますが、「いらっしゃる」はまた「いる」のうやまいの表現でもあります。こうして「いらっしゃる」は、「行く」「来る」の他に「いる」の三つのうやまいの表現であるため、多義となって、まわりの状況からしか判断できないようなこともあります。
なお、「来る」のうやまいの表現としては「みえる」もあります。この「みえる」は「行く」のうやまいの表現とはなりませんから注意してください。
謙譲表現としては「まいる」があります。ただこの「まいる」は「行く」や「来る」の謙譲表現であると同時に、参拝するの意味ではうやまいの度ゼロの表現です。参拝すること自身がへりくだりの行為であることとおそらく関係がありましょう。

【いる】……

うやまいの表現としては前に述べた「いらっしゃる」の他に「みえる」があります。「みえる」は本来は「来る」のうやまいの表現でしょう。そこに「いる」ためには、そこに「来る」という動作がまずあったので、「みえる」が「いる」のうやまい表現を示すことになったものだと思います。

謙譲表現は既に書きましたように「おる」です。この「おる」はへりくだりの程度はそんなに大きくはないように思います。

ののしりの表現はありません。強いて言えば「いやがる」でしょうが、このように「……やがる」という接尾辞は、「食いやがる」「飲みやがる」「寝やがる」「死にやがる」という次第で、多くの語に機械的についてしまうので、ここでは特にあげないことにします。同様のものに「死にくさる」のような「くさる」もあります。

【着る・はく・乗る・呼ぶ】……

「着る」と「はく」とは、すべて身につけることを示すので一類と考えることができますが、「乗る」や「呼ぶ」などはまったく意味の方面が別です。

にもかかわらずこれらを一括して見出しとしたのは、これらが、うやまいの度を示す語形として「召す」を共通して持っているからです。しかし、この「召す」がすべて同じような頻度(ひんど)

で使われているわけではありません。「はく」は「着る」よりも「召す」になる率は少ないでしょう。「呼ぶ」についての「召す」は、これも皇室の人などに呼ばれる場合が多いようで、「お召しでございましたか」などは普通にはあまり聞きません。「召」という字は「召集」などのように、上の人、あるいはある権限を持った人が人を呼び集めるのに使われます。

【言う】……

うやまいの表現には「おっしゃる」があります。もう一つ上のうやまいの度を示そうとして「おっしゃられる」と、尊敬の助動詞「れる」をつけて言う場合がありますが、これは『これからの敬語』では明言はしていませんが、よくない形と考えているようです。しかし現実にはよく聞きます。「いらっしゃる」を「いらっしゃられる」などと言うことはまずはありませんが、「れる」がついておかしいものとそうでないものとがあるようです。

謙譲語としては「申す」があり、へりくだりの度が一段と高いものとしては「申し上げる」があります。「わたしは山田と言います」よりは、「わたくしは山田と申します」の方がうやまいの度としては高いことを示します。ただし、この「称する」の意味では「申し上げる」は使いません。目上の人に対して本当に話すときにだけ使います。

ののしりの表現としては「ほざく」がありますが、あまり上品な語ではありません。

「言う」ということをめぐっては、ゼロの「言う」と並ぶ表現として、「話す」「しゃべる」がありますので、これについて少し述べておきましょう。この「述べる」もそうかもしれません。

「話す」は名詞として「話」があり、これがよく使われる故か、「お書きになる」ほど「お話しになる」はうやまいの度が高くはないようです。また謙譲語の方でも「お書きする」に対して「お話しする」はうやまいがそれほど感じられないようです。へりくだりを示すためには「お話し申す」や特に「お話し申し上げる」を使うことになります。要するに「話す」という語は敬語的にあまり機能していない、ということになるでしょう。

「しゃべる」は方言によっては「言う」とまったく同じ意味で使われますが、標準語では、「おしゃべり」という語の意味から、少し多弁すぎるという価値判断も加わっていますので、敬語的場面では使わない方が無難です。

「語る」を同じように「言う」と同じに使う方言もあります。この方は別段特別の価値判断は標準語の方にはないようです。ただ少々固い、文語調という感じはします。「述べる」はこの点からやはり少々公式的だという感じはします。

【思う】……

うやまいの度の高いものは「おぼしめす」というのがありますが、これは相当高いので、こ

れをうまく使いこなす人はそうはいなそうな感じです。

謙譲語の方は「存ずる」、もう一段へりくだると「存じ上げる」となります。この「存じ上げる」は「知っている」の謙譲表現としても使われます。「わたしはまだ奥様を存じ上げませんので」など。しかし、この語は、相手および相手に属するものや、だれから見てもこの語が使われるべきものを「知っている」ときに使うのであって、その他のものを「知っている」とき使ってはおかしい。例えば「わたしはまだあの人の友達を存じ上げません」や、まして「わたしはそのことをよく存じ上げています」は変です。第三者としての「先生をよく存じ上げています」のような使い方はいいとされますので、どこまでおかしくないかは、判断がむずかしいようです。

「存ずる」はまた「存じる」でもいいのですが、打ち消しのときは「存じない」が普通で、「存ぜない」はないようです。

【くれる】……

うやまいの表現は「くださる」です。「賜わる」というのもあります。「くださる」と「賜わる」とは、だいたいうやまいの度は同じですが使い方に少し違いがあるようです。この辺はなかなか複雑です。「くれる」や「くださる」は、その動作を受けるのは話し手であるのが普通で

す。「これはあの方がくださったものです」など。「賜わる」はこれに対して、この動作を受けるのは話し手であってもいいし、その他でもいいということになるのではないかと思います。話し手であれば「これはAさんから賜わったものです」であり、そうでないものでは「これはAさんがあの方から賜わったものです」など。

「頂く」も「賜わる」と同じようだと思いますが、「賜わる」よりはうやまいの度は低いように思います。「もらう」はうやまいの度はありません。その点で「くれる」と似ていますが、「くれる」は与える側から見ているのに対して「もらう」は与えられる側から見ていると言っていいでしょう。いずれも「受ける」ことにあって、物の移動はこの意味では中心に向かっていると言っていいでしょう。

【やる】……

これに対して「やる」は、受けるのとは逆ですから、物の移動は中心から他の方に向かっています。

へりくだりの度のあるのは「上げる」で、そのへりくだりの度がもう一段高いのは「さし上げる」です。どちらもその物を受ける人は、その物の移動の起点になる人よりも上の人です。

「上げる」は、「棚に上げる」からもわかるように、上の位置へ物を移動させることです。です

から上のものへの動作のはずです。ところが今は「子どもに御飯を上げる」はまだいいとして、「猫にえさを上げる」のように、「上げる」を使うのはおかしいのではないか、ということが言われています。確かにそういうことは言えましょうが、この「上げる」は、へりくだりによって子どもや猫をうやまっているのではなくて、ただ「やる」ということばを上品に言っている美化語である、と言えましょう。この言い方はすでに市民権を得ているようにわたしには思えます。しかしもちろんまだ気にしている人は少なからずいるようです。

「さし上げる」よりへりくだりの一段強い表現としては、「奉(たてまつ)る」「ささげる」などがありましょう。これは相当目上の人に対してでないと使いません。

「やる」は、ややその物を受けるものは与える人よりも低い位置にあるようです。つまり、目上から目下への動作であるようです。「与える」はこのような上下の関係のない中立的な表現であると思います。

　マイナスのうやまいのことば、つまり罵倒(ばとう)やののしりの表現としては「くれてやる」がありますが、そうは言っても、「言う」の「ほざく」、「死ぬ」の「くたばる」よりはずっとののしりの程度は軽いものです。

【たずねる】……

「たずねる」と言っても、ここでは二つの意味に分けて考えます。

まず「訪ねる」とも書く「訪問する」方です。へりくだりの表現としては「出る」「上がる」があります。「上がる」の方がへりくだりの度は強いでしょう。「息子はお宅に上がっておりますか」などと使います。「出る」はこの場合使えないことはありませんが、あまり頻度（ひんど）は多くないでしょう。「出る」は「申し出る」のように、ごく軽いへりくだりの意味があります。「伺う」はへりくだりの度はもう少し強いと思います。「父は伺っておりましょうか」など。

次に「尋ねる」とも書く「何かを問いただす」意味です。へりくだりの表現として「訪問する」と同じく「伺う」があります。それより使用頻度は少ないと思いますが、「うけたまわる」があります。「承る」とも書きます。

【聞く】……

右に述べた「何かを問いただす」のも「聞く」と言います。「訊く」と書くこともありましょう。同じ意味なので、へりくだりの表現としては同じ「伺う」と「うけたまわる」とがあります。

こうして「伺う」は、「訪ねる」「尋ねる」「聞く」の三つの常体の語に対する謙譲語となっています。いわば多義語です。「うけたまわる」も多義語となります。

【承知する】……

へりくだりの表現として「かしこまる」があります。「承知しました」よりも「かしこまりました」の方が丁寧となります。同じ「承知する」でも、聞いてわかっています、の意味のときに「うけたまわっております」の方を使う方が適当であろうと思います。

名詞について

以上で動詞を終わって、名詞の説明に移ります。最初に英文法などでは代名詞としているものを一人称から順に三人称まで挙げてから、純粋の名詞に入ります。日本語の文法では、いろいろの性質が名詞とあまり変わらないので、代名詞という品詞を設けることはあまりありません。

【一人称】……

「僕」や「わたし」が普通の形です。大人の常体は「わたし」ではないかと思いますが、女性の場合は「あたし」となることもあります。

「僕」は男の専用語で、子どもの場合は相手がだれであろうと「僕」を使うことも許されますが、ある程度の年齢になったら、同輩以下に対して自分を示すときはいいのですが、その他は

不適当です。つまり、これは同輩以下に使うのが原則ですから、これを使うと尊大ととられるおそれがあります。

なお、「僕」は、小さい男の子への二人称として使われることがあります。例えば、「ぼく、いくつ?」など。

へりくだりの度の強いものとしては「わたくし」があります。女性の場合はそれほど強いものとは感じられないでしょう。「手前」というのは、「手前ども」の形で自分の属する会社・商店などのことを称するのに使います。これ以外の「手前」は現在はあまり使われないようです。「俺」というのは、相手が目下であるときなどに使うものですから、ある程度のフォーマルな場面では使わない方がいいものです。もちろん男性専用です。「やつがれ」は少々古いでしょう。「あたい」などというのもありますが、少々俗ですし、また下品と感じられると思います。

なお、一人称については、接辞のついた語がありますが、これについては二人称や三人称についても同様です。

【二人称】……

「君」「あんた」「あなた」あたりが常体の近くにあるようです。

「君」は「僕」と対応するもので、同輩以下について呼びかけるものです。まずは男性専用で

すが、これは使う方のことで、呼びかけられる相手方では女性はそれほど多くはありませんが、使えないものではありません。

相手を見下したときの二人称としては、「お前」や「手前」（「てまえ」ですが「てめえ」と発音されることもよくあります）があります。これらはあまり普通には使われません。

だいたい、日本語では一人称と二人称はできるだけ明示しないという傾向があります。文脈でわかると考える限りはなるべく省略します。「あしたはどちらへお出掛けですか」では、二人称（あなた）は文の上では現われていません。「あしたお迎えに上がります」では、一人称（わたし）が明示されていません。それでも敬語の使い方ではっきりわかりますから、このように省略するのです。特に二人称については、言うことはむしろ失礼になる、というのが伝統的な考え方でした。

【三人称】……

男性「彼」、女性「彼女」がまずは原点ゼロの表現でしょう。うやまいの度がプラスになると「あの方」などが使われます。「たれかれ」の「かれ」とは違って、今普通に使う「彼」や「彼女」は昔からの日本語ではなく、英語の he や she の訳語として明治になってから登場したものと思います。

「彼氏」として、敬語の「氏」をつけ、これで時に、女の愛している男をいうのに使っていますが、これは昭和五年ごろからだ、と物の本にあります。「彼氏」に当たる表現は女性についてはないようで、「彼女」が男の愛している女の意味に使われます。もっともこれの意味は「氏」のつかない「彼」にもあります。

ののしりの方は「あいつ」がまずはあり、それより程度がはなはだしいと「あの野郎」などとなります。

【夫】……

「夫」については、ちょっと前にも書きました。うやまいの意味では「旦那さん」があります。この「—さん」はうやまいの度を一段と高めたとき「—さま」になるのはすべてについて言えます。もっとも「—さま」は関東語であるようで、関西は「—さん」の敬意の度が割に強いようです。

「旦那」というのは軽いヤユを込めた言い方です。「ダンナ」とカタカナで書くとそのふざけの意味はもう少し強くなるでしょう。

謙譲語としては「主人」「やど」「宅」などがあります。「主人」については、夫婦間の上下関係を示すものとして、一部に強く反発の感情があるようです。このような意見の人は、配偶者

を互いに「つれあい」などと呼ぶことがあるようですが、そういう平等な呼び方には謙譲的な意味合いが薄れますから、そういう謙譲的な意味を含めた呼び方も考えてもらいたいものです。もっとも謙譲自身がけしからんと言われればそれまでではあります。

「やど」は少々古い感じで、今はあまり使われないでしょう。「宅」もそれほどではないけれどもちょっと古いかもしれません。こういうものを除くと、姓を呼び捨てにして夫を示すことが多くなっているのではないかと思います。山田夫人は夫のことを他人に「山田」と言うわけです。

少々乱暴な言い方では、三人称としての夫を「おやじ」などと言うことがありますが、これはまずは自分の夫のことは言わないで、第三者の夫婦の夫を指すのだと思います。「旦那」はこの点では自分の夫をいうのにもやや謙譲的なふざけた表現として使うことがあるようです。「亭主」というのもこれに少し似ているところがあります。「亭主元気で留守がいい」などと、ややふざけた感じで使われます。

【妻】……

うやまいの表現は「奥さん」で、謙譲表現では「家内」が普通です。自分の妻をいう謙譲的表現では、このほか「うちの」「うちの奴（やつ）」などいろいろな表現があります。「山の神」という

のも恐妻的なニュアンスでヤユ的、あるいはふざけて使うことがあります。

夫の「おやじ」に対応するものとしては「かかあ」があります。「かかあ天下」というと、必ずしも乱暴な表現とは言えないでしょうが、それでもさほど真面目な言い方でもないと思います。

夫のことを言うのに、やや公式のときに、その姓を使うのに対応しての、妻の言い方は確定していないようです。例えば「春子」というように名を使うものも考えられますが、妻の名まえは日本ではそれほどよく知られませんから、使いにくいと思います。よく知られた、例えば中曽根氏の蔦子夫人のようなときに、首相時代の外遊のときなど「今回は蔦子も一緒かい」などと噂話では使うこともあるようです。

【父親】……

「父親」というのはまったく無色の原点ゼロの表現でしょう。うやまいの表現では「おとうさん」(「お父さん」)、謙譲表現では公式的表現では「父」、ややくだけた場合では「おやじ」が使われます。

自分の父親を「おとうさん」などというのは子ども的表現であって、これは絶対敬語の名残(なごり)でよくないとされています。

「おやじ」は夫のときも出てきましたが、またある程度の年齢の男性を指すのに使います。例えば「あのおやじ、どこかで見たことがあるなあ」など。「そこのおやじ」などと呼びかけに使うこともありますが、あまり丁寧な表現とは言えません。「かかあ」にはこのような用法は稀薄です。

【母親】……

「父親」に対して「母親」、「おとうさん」に対して「おかあさん」、「父」に対して「母」、「おやじ」に対して「おふくろ」などすべて平行しています。

なお、「父親」を「男親」、「母親」を「女親」と言うこともあります。

この両親を示す言い方には、接辞を使った言い方が尊敬語、謙譲語に多くありますが、これは後に述べることにします。

【息子】……

「息子」はゼロの表現であると同時にやや謙譲的になります。もう少し謙譲の度の強いものとしては「せがれ」があります。「坊主」というのはやや非公式ですが謙譲語です。

うやまいの表現としては、後に述べる接尾辞の「―さん」をつけて「息子さん」ということもありますが、「坊っちゃん」というのも使われます。ただし、あまり年齢の高い人にはちょっ

と不適当な気がするものの、実際は使われているようです。

【娘】……

「せがれ」に当たるものはありませんが、「娘」は謙譲表現としても使われます。

うやまいの表現は「お嬢さん」で、これは「坊っちゃん」と同じくあまり年齢の高い人に使うのはおかしい感じがします。

「尼」などというのも、ののしりの表現として使われないことはありません。男の子の場合「尼」にあたるものはあまりありませんが、次の「子ども」のところで述べるののしりの表現を借りて代用することはあるように思います。

【子ども】……

うやまいの表現としては「お子さん」があります。

ののしり的な表現では「餓鬼」「ジャリ」などがあります。「ジャリ」は芸能界で使う用語が一般にも使われるようになったものです。

【その他の家族について】……

「おじいさん」「おばあさん」はうやまいの表現です。これに対して原点および謙譲表現として「祖父」「祖母」があります。ののしりとしては「じじい」「ばばあ」でしょうか。「じいさん」

「ばあさん」というのは、ややくだけた謙譲語と言っていいでしょうか。老夫婦がお互いに呼ぶときは男性からは「ばあさん」ですが、女性からは「おじいさん」と「お」がつくことが多いように思います。

なお、親族関係以外の老人に対して「おじいさん」「おばあさん」と呼びかけるのを嫌う老人が多いので気をつけた方がいいと思います。例えば、受付などで「おじいさん、お待たせしました」など。この場合「おじいちゃん」はいよいよいけないようです。この「おじいちゃん」「おばあちゃん」は呼びかけるのが幼い孫である場合が多いので、肉親でもないのになれなれしい、という思いがさらに加わるのかと思います。

「おじさん」「おばさん」も肉親以外の然るべき年齢の男女に呼びかけるのに使うことがありますが、これも好まない人が多いようです。

「おじさん」「おばさん」の場合、漢字で書くとき「伯父」「叔父」、「伯母」「叔母」と書くことがあります。「伯―」か「叔―」かは、その人が両親より年齢が上かどうかで決まります。年上なら「伯―」で年下なら「叔―」です。この際、例えば母より年上の実の「伯父」の妻で、母より年下となっても「伯母」です。

親戚以外の「おじさん」「おばさん」は、「小父さん」「小母さん」と書かれることがあります。

いわゆる「オジン」「オバン」は親戚以外について言うのだと思います。
兄弟姉妹については「おにいさん」「おとうとさん」「おねえさん」「いもうとさん」がうやまいのことばで、「兄」「弟」「姉」「妹」が謙譲語で、これらは義理の関係についてもまったく同じです。「(お)にいさん」「(お)ねえさん」は呼びかけにも使いますが、弟妹に対してはそのような用語はなく、名まえなどで呼ぶことになります。
その他、うやまいの名詞としては、「先生」「天皇」など漢語形がたくさんあります。謙譲語としても、自分の妻のことを「荊妻」(「荊」は「いばら」の意味)、「愚妻」とか、自分の子どものことをいう「豚児」などがあります。

3——接辞を使った敬語

尊敬をあらわす接頭辞

「接辞」については前にも述べました。その際、「接辞」は、「接頭辞」と「接尾辞」とに分かれることも述べました。まず、接頭辞から説明します。

「おー」「みー」「おみー」「ごー」は、「あなたの」という意味になるときは、うやまいのことば＝尊敬語になります。また、目上の人に属するものをも示します。「お年」「お体」「み心」「み仏」「おみ足」「おみ帯」「ご出家」「ご承知」「ご出発」など。

「おー」「みー」「おみー」は和語につき、「ごー」は漢語につく、というのが原則ですが、例外もあります。「お勉強」「お弁当」「お炊事」「お点」など、家事、育児、教育に関する語の場合、漢語でも「おー」がつきます。これは昔から女性が使うことが多いから漢語としての扱いより和語的な扱いになったのでしょう。「ごゆっくり」「ごゆるりと」などは和語に「ごー」がついた珍しい例です。

外来語には「おー」はあまりつけない方がいいとされますが、「おビール」や「おコーヒー」など、ときどき聞きます。多くは美化語として使われるようですが、多分「お酒」「お紅茶」とそろえるということかと思います。確かに「お酒になさいますか、ビールになさいますか」ではバランスが崩れるように思います。「ごー」は外来語にはつきません。唯一の例外は「ごミサ」です。「ごー」はまた「御ー」と漢字でも書かれます。

「おみー」は、多くは母音で始まる語につきます。右に挙げた例では「足」や「帯」についていました。母音の前が「お」では母音が重なって発音しにくい、ということがあったようです。

今はその発音のしにくさはそれほど感じられなくなったようではあります。「おみくじ」は「くじ」が子音で始まりますのに「おみ―」がついています。この「おみくじ」は単なる「くじ」のうち寺社で出している運勢占いだけを示します。やはりややうやまいの気持ちがあるようです。味噌汁をいう「おみおつけ」は「おつけ」と「お―」をつけて、さらに「おみ―」をつけたものでしょう。

「みー」や「おみ―」は、これがつく習慣が固定したものにだけつくようです。つまりどんどん新しいことばが作られるという意味での生産性は低いものです。母音で始まる語だからといって何でも「おみ―」をつける、というようなわけにはいきません。

「おふくろ」「おかず」「お陀仏（だぶつ）」「おはぎ」のように、「お―」をとると意味をなさないか、別の意味となってしまうものがあります。美化語として出発したものもあるようですが、今は美化の意味を失っています。

〈漢字の接頭辞の例〉

本当の意味では接頭辞とは言えず、漢語の造語成分なのでしょうが、それもここで挙げておきます。

天皇関係のものですと、「宝―」「龍―」「宸―」「親―」などがあります。「宝算（ほうさん）」（天皇の年齢）、

「龍顔」（天皇の顔）、「龍駕」（天皇の乗り物）、「宸翰」（天皇の手紙）、「宸筆」（天皇の筆蹟）、「親電」（天皇の打つ電報）など。「親電」などは天皇に限らず、一国の元首になら使ってもよさそうです。

以下はすべて、あなたの、とか、目上の人の、とかいう意味のものです。

「高―」……「高説」、「高配」、「高著」

「尊―」……「尊父」、「尊名」、「尊影」（写真などに）

「光―」……「光来」（来ること）、「光臨」（ある場所に来ること）

「貴―」……「貴名」、「貴社」、「貴兄」、「貴台」（あなた、の意味）

「芳―」……「芳名」、「芳志」

「令―」……「令夫人」、「令兄」、「令弟」、「令嬢」、「令息」、「令閨」（奥さま）、「令室」（同）

「高―」以下では、「貴―」を除いてすべて「御」がつくことがありますが、少々丁寧すぎとなりましょう。

次に、謙譲でうやまいを示す接頭辞があります。すべて自分、または自分の側について言い、また自分の動作について使います。

「拙―」……「拙宅」、「拙文」、「拙著」、「拙僧」、「拙者」――最後の二つは一人称として使い

ましたが、少し古い感じです。

「愚―」……「愚息」、「愚父」、「愚考」

「卑―」……「卑見」、「卑説」

「弊―」……「弊行」(銀行について)、「弊社」

「小―」……「小生」、「小社」

「寸―」……「寸志」、「寸書」

「粗―」……「粗品(そしな)」、「粗酒粗肴(こう)」、「粗餐(さん)」「粗茶」

尊敬をあらわす接尾辞

呼びかけにも使われるものとしては、「―さん」「―さま」「―君」「―先生」などがあります。「―さん」より「―さま」の方が丁寧ですが、呼びかけとしては「―さん」の方が多く使われると思います。「―さま」は「―様」と書かれることの方が多いでしょう。特に手紙の宛名にはこれが使われて「―さん」は使われません。

「―さん」はまた会社名などにもつけて使われることがあります。「春山建設さん」などがこの例ですが、「宇治興産さん」などと、発音上は「さん」が重なるようなことも起こり得ます。こ

のときはより丁寧にと考えて「―さま」を使うことはあまりありません。
「―君」は昔は男性専用でしたけれども、今は呼びかける相手が男性であれば女性も使うようです。ただしこの場合、学校の先生が児童・生徒に対して使うか、大学生以下の女性が友人の男性に対して使うかのどちらかです。例外は、国会とかその他の団体で、そこの習慣としてすべての人(つまり女性も含めて)を「―君」と呼ぶというものや、大学や会社で、上役や先生が若いOLや女子学生をも「―君」と呼ぶ人がいる、というようなことがあります。
「―殿」は「―様」よりは、やや公式の感じがします。したがって、役所から一般人や他の役所の人に出す手紙の宛名には「―殿」を使います。しかし、一方に「―殿」は「―様」よりもうやまいの度は低いとも感じられていますから、主権在民の現在、役所からの手紙に「―殿」を使うのはけしからんというような考え方もあります。地方自治体(県や市町村)などからの手紙には、これを考慮して、近ごろだんだん「―様」が多くなっています。
「―殿」は、しかし役職名だけにつけるときはよく使われます。「大和小学校長殿」などと。それに姓名をつけたときは「大和小学校長山田一雄殿」の方が多いと思いますが、このようなときに「―様」もだんだん多くなっています。
「―殿」は一般には呼びかけには使いませんが、表彰式などで受賞者を呼び出すとき、あいさ

つを受けるときにあいさつをする人を呼び出す場合などに使うこともあります。「—御」とも書きます。

「—ご」というのは少し古い感じですが、「親ごさん」などという形では今も残っています。昔は「そこの娘ご」などと呼びかけにも使ったようです。

やはり古いものに「—ぎみ」があります。「母ぎみ」「兄ぎみ」などです。「—君」とも書きますが、「—くん」と間違うので「—ぎみ」と書いた方がいいでしょう。「加藤ぎみ」などと固有名詞につけるのは今はほとんどありません。

「—氏」は人名につけて、うやまいを示します。また一度「山口氏」などと述べてから、「同氏は」という用法もあります。「—君」も同様に「同君」という用法があります。「—氏」の場合は、「山口氏をここにご紹介します。氏は……」というように「氏」だけの用法もありますが、この点からいうと独立の用法があるので接尾辞とは言えなくなるかもしれません。この時の「氏」は名詞でしょう。「—君」の方はこの用法は標準語にはないと思います。方言では「この君(くん)は……」のように使うのもあるようです。

〈その他の接尾辞の例〉

以上に挙げたもののほかにも、「—夫人」、「—女史」(ある程度の地位を占めている女性に)、「—嬢」、「—兄(けい)」(男の同輩以上に)、「—ちゃん」(主として小さい子どもに)、「—老」、「—翁」(ともに

男の老人に)、「―媼(おう(な))」(男の「―翁」に対する女性の老人に。ただしあまり使われない)、「―師」(仏教・キリスト教などの聖職者に。また、講談師、落語家など一部の芸能人に。ただし落語家のときは「―師匠」ともいう)、「―関(ぜき)」(力士)、「―画伯」(画家)、「―国手(こくしゅ)」(医師)、などがあります。また「―教授」「―博士」なども敬称として使われることがあります。

なお、マイナスのうやまい、つまりののしりを示す接尾辞としては「―やがる」があります。「行きやがる」など、また「―くさる」も「言いくさる」のように罵倒に使うことがあります。

〈謙譲の接尾辞の例〉

謙譲を示す接尾辞としては、次のようなものがあります。

「―ども」……「娘ども」、「私ども」

「―め」……「せがれめ」

「―儀」「―こと」……「一郎儀」、「一郎こと」、「私儀」、「私こと」

「―ども」の「私ども」は、こちらが複数でなくても使います。また、会社などで自分の会社を示すときも使います。複数を示すときは、「―がた」は「―方」とも書き、「先生方」のようにうやまうものについてつけます。方言によっては「私方」のように自分の方にもつけることがありますが、標準語の感覚で言うと少し変ですので気をつけましょう。「―め」は多少古い感

じです。「―儀」や「―こと」はあいさつ状などに書きことばとして使われるだけです。

4――敬語に用いる助動詞・補助動詞

尊敬をあらわす場合

助動詞というのは、動詞などにつけて、その動作にいろいろの意味をつけ加えるものです。助動詞で始まる文はありません。

「絵を見る」と「絵を鑑賞してみる」の二つの「みる」を比べますと、前の「絵を見る」の「見る」は実質的に、つまり本当に目を使って見るのですが、後ろの方はこのような実質的な意味はなくて、他の語を使えば「こころみる」という意味を加えているものである、という点で違っています。後者のように実質的な意味を失ったものを補助動詞とか形式動詞と言います。実質の動作の方はここに書いたように「見る」と漢字を使って書くことがありますが、補助動詞の方はいつもかな書きとなります。補助動詞には他に「ている」「てある」「てくる」などがあります。

尊敬、うやまいを示す助動詞としては、「れる」「られる」などがあります。「行かれる」「起きられる」のように使います。

補助動詞では「お……になる」「(お)……なさる」「お……あそばす」「(お)……くださる」「……ていらっしゃる」などが、うやまいの度プラスとして挙げられます。( )の中はあってもなくてもいいものです。「お」とあるのは、「ご」をとるときは「ご」となります。例えば「お行きなさる」「お勉強なさる」「おいでくださる」「御理解下さい」など。

「れる」「お……になる」「お……なさる」「お……あそばす」は一つの系列でうやまいの度がこの順で高くなるようです。これをもう少し詳しく並べてみると、次のように1→5の数字が大きくなるに従って、うやまいの度は高くなります。

1	2	3	4	5
行かれる	(お)行きなさる / お行きになる	お行きなされる / お行きになられる	お行きあそばす	お行きあそばされる
出発される	(ご)出発なさる / ご出発になる	ご出発なされる / ご出発になられる	ご出発あそばす	ご出発あそばされる

2、3の段階に強いて順をつければ、

行きなさる―お行きなさる―お行きになる―お行きなされる―お行きになられる

ではないかと思います。この方の「お行きなさる」と「お行きになる」との差はごくわずかで、人によっては逆と感じておられることもありましょう。「行きなさる」は1にやや近くなる感じです。

『これからの敬語』によれば、「動作のことばとして三つの型がある」として、型Iに「書かれる」、型IIに「お書きになる」、型IIIに「(お書きあそばす)」を挙げています。これによりますと、わたしが右に挙げた例のうち大部分は入っていません。特に型IIについては「――になる」の型を「お――になられる」という必要はない、と述べられています。これは『これからの敬語』としては「必要ない」と認めているのですが、現実にこの語形がある以上は然るべき位置を与えなければならない、というのがわたしの立場です。

このように二重の敬語形式を「必要ない」とする考え方から言うと、「お行きなされる」「お行きあそばされる」も「必要ない」ことになります。さらに型IIIは、( )の中で示しているように『これからの敬語』では「いわゆるあそばせことばであって、これからの平明・簡素な敬語としては、おいおいにすたれる形であろう」とされています。

なお、「れる」「られる」については、「受け身の言い方とまぎらわしい欠点はあるが、すべての動詞に規則的につき、かつ簡単でもあるので、むしろ将来性があると認められる」と大いに推奨しています。

謙譲をあらわす場合

謙譲をあらわすのには、主として補助動詞が使われます。例を挙げましょう。

「(お)……(て)いただく」、「……てまいる」、「(お)……いたす」、「……ておる」、「(お)……して(さし)あげる」、「(お)……申す」、「(お)……申しあげる」、「(お)……つかまつる」などです。

例えば「行ってまいります」「お待ちいたします」「所望いたす」「お持ちしてあげました」「お待ち申しあげる」「(ご)期待申し上げる」など。以下、少し説明をつけておきます。

「(お)……(て)いただく」は、「お」がつけば「て」は削られ、「お」がなければ「て」がつくという関係になります。「お行きいただく」「行っていただく」など、相手にその動作をしてもらうときです。

「……てまいる」以下は、言う人間がする動作についてのことです。

「(お)……いたす」は、「お」をつけるときに、あなたのために、という意味を示します。「お」をとらないときは「出発いたす」のように漢語が「……」のところにきて、その場合はこの、あなたのために、という意味はありません。これ以下では、和語のときは、「お」がつき、漢語のときは「ご」がつく場合とつかない場合があります。

「(お)……して(さし)あげる」は、言うまでもなく「さし」を入れた方がうやまいの度は増します。同様に「申す」より「申しあげる」の方がうやまいの度は高くなります。「(お)……つかまつる」は少し古い言い方です。

丁寧さをあらわす場合

丁寧さをあらわすものでは、助動詞に「です」「ます」があります。丁寧の度がゼロのものとしては「です」に対しては「だ」があり、「ます」に対しては裸の動詞となります。

『これからの敬語』では、形容詞につける「『大きいです』『小さいです』などは、平明・簡素な形として認めてよい」とありますが、ゼロの形としては「だ」はつけず、「大きい」「小さい」と裸の形となります。この本では形容詞には「です」をつけず、裸の形を使います。

丁寧さを示す補助動詞としては「……でございます」があり、これは「です」より一段と丁

寧です。形容詞につけるときに「大きゅうございます」「小そうございます」と「う音便」の形につづきます。この「ございます」を動詞につけるものとしては「行くのでございます」のような形となります。

終助詞について

以上の外、「ね」「さ」「よ」「わ」などの、文や文節の最後につける終助詞も敬語に関係してきます。これらは相手に関係してくるものなので、丁寧さ（マイナスを含む）を示します。

非常に目上の人や公式な場では使われないということは、これらは少々押しつけやなれなれしさを示すと感じられるからでしょう。一面で親しさを示すととられます。

「さ」は多少相手を下げる力が強いようです。「わ」は標準語では女性専用となっています。

5——場面別の敬語の使い方

敬語は非常に場面的なものです。その場がどういう場面であるかを適確に把握して適確に言

語化することが要求されます。その場面は一人称、二人称、三人称で構成されます。そのそれぞれの地位の上下関係で使い方がいろいろ違ってきます。ことばである以上、一人称（話し手）と二人称（聞き手）とは常に存在します。一人言さえ、一人称が二人称を兼ねているのですから例外ではありません。

とにかく、このような構成で上下関係もいろいろですから、組み合わせの数は非常に多くなります。本当はこれを、あまり生じないようなものも尽くして全部取り上げなければなりません。わたしの前著『美しい敬語』（芸術生活社　昭和四十七年）にそれを全部挙げましたけれども、そのように純理論的な取り上げ方は若いころの特色かと思います。少し煩瑣に過ぎるようですので、今回は主な場面だけについて述べることにします。

〔1〕二人称と一人称の場面

右に述べたように、普通、会話を交わす際には一人称と二人称とがいるのが基本的な場面ですが、その中で、社会的関係から言うと相手、つまり二人称が上なのが敬語で一番問題になるタイプです。これを右の見出しのように「二人称と一人称」と書いておきます。この場面は、うやまいの度、丁寧の度、ともにプラスの表現をするのが普通です。

〈二人称の動作へのうやまい〉

うやまいの度で言えば、二人称の動作へのうやまい、がまずあります。

第一は、その動作が二人称だけの問題で、一人称には何も及ばないものがあります。

「もうおやすみになりましたか」

「どちらにお出かけですか」

「どちらにいらっしゃいますか」

などがこの例です。「いらっしゃる」は前に述べましたように多義ですが、ここでは「出かける」と同じ意味だとしますと、「いらっしゃる」の方がうやまいの度は高いと思います。この「いらっしゃる」は、またあるところに「居る」の意味があり、さらにある状態であることを示す場合もあります。

「いつもおきれいでいらっしゃいますね」

はその例です。これは動作とは言えませんけれども広義の動作として状態も含めることにいたします。

第二には、その二人称の動作が一人称に及ぶものがあります。

「わたしにこうおっしゃったじゃありませんか」

「ではわたしとお出かけになりますか」

どちらも文法上の主語は、実は「あなた」＝二人称で、その動作が一人称にまで影響を及ぼしているものです。主語の「あなた」は文の表面には出てきていません。日本語はわかりきっている限り「あなた」を省略します。「あなた」などと言うのは少し礼儀に外れたことなのです。次に「わたし」もできるだけ避けます。上の第一の例では、「わたしに」は省くこともあるでしょう。また第二の例では「わたしと」をやめて「ご一緒に」などとすることもあります。このように一人称も二人称も明示しなくても、この場面ではわかるはずと考え、また現にわかるのです。この辺があるいは外国人にはむずかしいかもしれません。

〈二人称への間接のうやまい〉

二人称の動作について述べる点では右と同じですけれども、その動作は直接のうやまいを示すのではなくて、その動作自身が上から下への動作を示すので、その動作を受ける一人称が下位にあることが示されるものです。

「これは（あなたが）（わたしに）下さったものです」

「きょうはお招き下さいましてありがとう存じます」

「きのうわたしに命令しました」

傍線の語は、いつも上の者から下の者への動作を示しますから、その動作をした人＝二人称は、その動作を受ける人＝一人称（話し手）より上であることを示すものです。ここでは間接のうやまいを示すとしました。直接のうやまいをこれにプラスすることもできます。例えば最後の例は「きのうわたしに命令なさいました」とすればいいのです。

このような、上から下への動作を示す動詞は「採用（する）」「ほめる」「叱る」などがこれです。下の者、例えば生徒は先生を「ほめる」ことはできないし、社長の案を部下が「採用する」とは普通は言いません。

〈二人称へのへりくだり〉

一人称が自分の動作へのへりくだり、謙遜によって、二人称へのうやまいの度を高めるものです。

「それではあした駅でお待ちします」などです。「あした駅で待っているよ」は、うやまいの度、丁寧の度、ともにゼロの表現です。もう少しうやまいの度を高めると「あした駅でお待ちいたします」と「いたす」をつけることになります。

この「お待ちする」を、目上である相手＝二人称の動作として使うのは間違っています。

「それではあした（わたしを）駅でお待ちしますか」

は変です。「お待ちになりますか」でないといけないし、もう少しうやまいの度を上げて「お待ち下さいますか」とすべきです。もっともこれはことばだけのことであって、実際上は目上の人に待たせてはいけないので、目下である自分の方が早く出向くようにします(もっとも、この目上の人がもっと上の人を待つというのなら「あした駅でお待ちしますか」を使っても間違っているとは言えません。例えば、この二人称が秘書課長で、社長を待つとするならばこれでいいわけですが、これは三人称が入っている場合です)。

右の「お待ち下さいますか」は「下さる」がついていますので、一つ前の間接のうやまいとなります。

「お荷物をお持ちいたしましょう」
「あしたご返事申し上げます」
「あしたお宅に参上したく存じます」

などを追加の例として挙げておきましょう。

先に「間接のうやまい」について述べましたが、これと並行して「間接のへりくだり」の表現もまたあり得ることになります。

「上申(する)」「報告(する)」などはいつも下の者から上の者への動作ですから、その間接のへ

りくだりの表現の例とすることができます。「あしたまでには上申したいと思います」「きのう報告した件はどうなりましたか」など。

〔2〕 一人称と二人称の場面

さて、一人称の方が上だ、という場面が当然あり得ることになります。ここに入るもののうち、二人称の動作へのいやしめや、一人称（つまり話し手自身）の動作へのうやまい、また、一人称自身の下への動作について述べるといったものは、現代の日本語では普通には使いませんから省略いたします。

一人称の下の者への動作を示すものとして、

「お前にやったぞ」

というのがあります。「君にやった」よりはずっと乱暴な言い方です。これは「君」より「お前」の方が下ですし、「ぞ」がつくことで、丁寧の度も下がっています。

「その申請はもう君に却下した」

では「申請」は下から上へ、「却下」は上から下への動作を示すものですから、この二つがあって、一人称の方が上だということははっきりします。

「きのうお前はこう上申したではないか」

のようなものは一人称（話し手）が自分の地位を高いとして、相手を下に扱っているものです。現在はあまり使いませんが、時代劇などで聞く「近う参れ」の「参る」も領主などが自分で高いと思って家臣などに言うときのことばで、ここに入れてもいいでしょう。

このように、一人称の方が二人称より高い、という場面はそう珍しいものではありませんが、それを敬語的に示す言語形式はそう多くはありません。うやまいの度でマイナスを示すような表現は現代ではあまりしません。むしろ丁寧の度でゼロまたはマイナスにすることで表現をしているのではないかと思います。うやまいの度でのマイナス表現がなくなった、または少なくなった、というのが現代日本語表現の特色になっていると思います。

〔3〕一人称と二人称とが同じ場面

これで一人称と二人称との関与している場面を終わることとします。これまでは、二人称が上の場合と、一人称が上の場合とに分けて述べました。もちろん、一人称と二人称とが同じぐらいの社会的関係だ、という場面もあります。この場合は、二人の間の親疎関係がことばのレベルを決定します。これについて少し述べて、次の一人称と二人称に三人称が加わった場面の

例に移りましょう。

疎であればあるほど、うやまいの度と丁寧さの度は両方ともプラスの方になります。だんだん親しくなるとこれは限りなく二つの度の交点ゼロに向かって近づきます。非常に親しくなったときは、丁寧の度の方はマイナスの方に移ることもあり得ます。しかし、うやまいの度はゼロを越してマイナスになることは、喧嘩でもしない限りはないと考えておきます。一例を挙げておきましょう。

疎の場合、「あしたはお暇がおありですか」
中間の場合、「あしたは暇がありますか」
親の場合、「あしたは暇があるかい」

〔4〕 三人称が一番上の場面

一人称、二人称、三人称（つまり話し手と聞き手以外のもの）が全部そろっている場面で、そのうち三人称の社会的関係が一番上の場合から始めることにします。

〈三人称の動作へのうやまい〉

まず、その三人称の動作だけについてのうやまいを考えます。三人称の動作では、原点ゼロ

の表現としては「彼はきょういる」というのがあります。この「いる」のところをうやまいの度をつけて表現することは、一人称、二人称ともこの「彼」という三人称よりは低いことを示します。

「あの方はきょうおいでだ」
「先生はきょうおいでです」

「先生はきょういらっしゃるよ」
「あの方はきょういらっしゃいます」

この二つの組み合わせで、それぞれ前の方は、うやまいの度はプラス、丁寧さの度はマイナスであるのに対して、後ろの方は、うやまいの度、丁寧さの度ともにプラスとなっています。つまり、丁寧さの度に違いがあるわけで、この差は一人称と二人称との上下関係で定まります。丁寧さの度がプラスなのは、話し手＝一人称の方が、聞き手＝二人称より低く、丁寧さの度のマイナスなのは、話し手＝一人称の方が、聞き手＝二人称より高いことを示しています。

次に、一人称に対する三人称の動作へのうやまいについて考えます。これも二人称と一人称との上下関係によってことばが決定されます。右と同じように組み合わせで示します。

「社長がぼくにこうおっしゃった」
「社長がわたくしにこうおっしゃいました」

「部長がぼくを呼ばれた」
「部長がわたしを呼ばれました」

やはりうやまいの度は両方プラスで、丁寧さの度がプラスである後ろの方は、二人称の方が一人称より上ですが、前の方は丁寧さの度がマイナスですから、二人称の方が一人称より下となっています。

以上のようなことを考えるならば、「社長がぼくにこうおっしゃいました」や「部長がぼくを呼ばれました」という言い方はあり得ない、まちがっている、ということがわかります。「ぼく」は原則として目上の人には使えないものだからです。

次に、二人称に対する三人称の動作へのうやまいの示し方について考えてみます。これについても、一人称と二人称との上下関係が丁寧さの差になって現われます。

「部長がお前にそうおっしゃった」
「部長があなたにそうおっしゃいました」

がこれです。前者の「お前」を「君」に変えると、丁寧の度はマイナスからゼロに近くなって

きます。

「部長が君にそう言えと言ったよ」というように、目上の人の動作についてうやまいの度ゼロの表現をすることがあります。この三人称、ここでは「部長」が、この場、あるいはこのことばが聞こえる範囲にいないときは、このような言い方をすることがよくあります。しかし、日本語の敬語では、この部長に聞こえるところではこのような言い方は許されていません。したがって、正しい言い方ができるようにしておかなければなりませんし、また、急にこの部長が現われる場合もないではありませんから、やはり「……とおっしゃったよ」ぐらいは言わなければいけないと思います。敬語はその三人称の人が聞いていても困らないような語形を、不在のときも使え、というのが鉄則であると思います。

ここで「部長さん」と特に言わなくてもいいということを、『これからの敬語』で述べてあることについては既にふれました。現実にはそれでは乱暴すぎて不適当と考える人は少なくないようです。この少なくない人の存在は無視できませんが、これは要するにその職場の習慣に従うのがいいでしょう。『これからの敬語』がそう考えるのは、「部長」ということば自身がうやまいの度を上げる、という解釈にもとづいています。

〈三人称の下への動作〉

三人称の、一人称に対する下への動作は問題となり得ます。

「あの方がぼくに下さったものだよ」
「あの方がわたくしに下さったものです」

この二つはやはり三人称が一番上で、その次に二人称がくるのか一人称がくるのかで、どっちをとるかが決まるものです。三人称が、他のどちらかより下の場合は「下さる」のような語形は使えません。

三人称の下への動作には「命令（する）」「命じる」「下げ渡す」などがあり、これは間接的に三人称が上であることを示すものです。「あの方がぼくに命令したよ」のような言い方は、「命令する」ということで三人称を間接的に上げるものではありますが、三人称に対する直接のうやまいの度を高める方法をとって、「あの方がぼくに命令されたよ」などとする方が自然であるし、またいい言い方だと思います。

「下さる」や「命令する」相手が二人称のときは、やはり同じ考えで次のようになります。

「社長がお前に下さったぞ」
「社長があなたさまに下さいました」

この一対もやはり一人称と二人称とのどっちが目上かということで、前をとるか後ろをとる

かが決まります。「下さったぞ」は少し丁寧さでマイナスの度が強いようです。

〈三人称の上向きの動作〉

三人称が二つ以上に存在するときに起こる問題です。

「あの方は社長宅に伺ったよ」
「あの方は社長宅に伺いました」

二つの違いは、一人称と二人称の上下関係です。「あの方」と「社長」と二人、三人称の目上の人がいて、社長の方が上だとすると、右の例のようなことになります。しかしもう一人もまた一人称や二人称よりは上であることは、「あの方」という語を使っていることでわかります。

〈三人称への上向きの動作〉

ここでは「先生」というのは三人称であって、聞き手、つまり二人称ではないとします。その中で一人称が三人称への上向きの動作をすると考えてください。

「あしたおれが先生のお宅に参上するぞ」
「あした先生のお宅に参ります」

ここでも一対は、一人称と二人称との関係でどちらかに決められます。

前の方の例は丁寧の度はだいぶ低くなっています。このような場合、理論的にはこの文でい

いと思いますが、「先生のお宅に参上」などというたいへんうやまい度の高い表現と、「おれ」「ぞ」という丁寧さのたいへん低い表現とが共存している、という点でアンバランスとは言えます。そういう点では、例えば「おれ」などはやめて、「あした先生のお宅に参上するよ」ぐらいにはやわらげて表現すべきでしょう。

なお、ここでは「先生のお宅に」と言っていますが、実は会いたいのは「先生」です。これを「先生のお宅」といって直接指すのを避けているのです。うやまいの度はこのように間接表現をすることによって一段と上がるのです。

後ろの表現はその先生に直接向かってのことばとしても通じます。「訓令を仰ぐ」「指示を仰ぐ」「請訓(せいくん)(する)」「願書を出す」「上申書を提出する」などは、すべて三人称への上向きの動作です。もちろん二人称への上向きの動作ともなります。「大臣に指示を仰ぎました」「先生のご指示をお願いします」などで、後者は二人称とする方が多いと思います。

三人称に対する二人称の上向きの動作についての表現でも、一人称と二人称の上下関係がかかわります。

「お父さんによろしく申し上げてくれ」
「きのう社長宅に参上されましたか」

前の例は二人称より一人称が上です。つまり、一人称＝話し手は、二人称の上役か何かだとします。そしてこの部下である二人称＝聞き手が帰省でもする場合に、一人称＝話し手が、昔習ったことのある、二人称＝聞き手の父親への伝言を頼む、というような場面です。〈三人称―一人称―二人称〉という順で、その二人称が三人称への上向きの動作として「申し上げる」という語を使っているのです。

後ろの例は、〈三人称―二人称―一人称〉の順となっています。「参上」というところで、〈三人称―二人称〉の上下関係がわかり、「される」のところで、〈二人称―一人称〉の関係がわかり、これを合わせて、三人称が一番上で、一人称が一番下だという関係がはっきりするのです。

「お父さまにおっしゃいましたか」では、三人称は「お父さま」だけで、これで三人のうちで一番上であろう、ということはわかります。しかしその三人称の動作もなければ、直接その三人称を動かす動作もありません。直接には二人称の動作へのうやまいだけが示されています。この場合は、一人称が一番下になります。

「お父さんに言ったか」となりますと、二人称は一人称より下であることは確定していますけ

れども、三人称である「お父さん」は一人称より上でも下でもどちらでもいいと思います。「お父さん」は確かにうやまいのことばではありますが、やや美化語化していて、うやまいを示さないこともあると思うからです。

〔5〕二人称が一番上の場面

一人称、二人称、三人称のうち、三人称が一番上の場合を終わって、次に二人称＝聞き手が一番上の場合です。敬語の場面ではこれはよく経験する例であろうかと思います。

〈二人称の動作へのうやまい〉

一人称、二人称、三人称がそろっている場合について述べていますから、二人称の動作といっても、それは一人称に対するものではなくて、三人称に対するものとなります。

「せがれにおっしゃいましたか」

では、「せがれ」は自分の息子へのへりくだりの表現で、この三人称はまず一番下となります。「おっしゃる」という「言う」に対するうやまいの表現をとっていますから、二人称は一人称より上です。上から〈二人称―一人称―三人称〉という関係になります。

これに対して、

「五郎さんにおっしゃいましたか」

は、二人称が一番上とした場合、三人称が次で、一人称が一番下と考えることもできます。しかし最も正しくは「五郎さん」といううやまいの度プラスの表現は、より高い二人称の前では使わない、というのが伝統的な言い方とされています。したがってここは「五郎におっしゃいましたか」とすべきだ、ということになります。しかし、この五郎氏が一人称よりも上の場合、特に一人称が女性であるときは言いにくいと思います。

「あなたは五郎の陳情をお受けになりましたか」

も同じような言い方で、「五郎」は一人称＝話し手より上でも下でもかまいません。五郎が一人称より上の場合、「さん」を外してしまうのが言いにくいのは、美化語的観点からして言い方が乱暴になる、と考えるからだと思います。

秘書が社長のその日の予定を、当の社長から聞かれたときの返事としては、

「あいつとお会いになる予定でございます」
「彼とお会いになる予定でございます」
「総務部長とお会いになる予定でございます」

の三つがあるとします。この秘書の三人称へのうやまいの度は、右から順に、マイナス、ゼロ、

プラスとなっていますが、すべて二人称が一番上です。状況によっては「あの方とお会いになる予定でございます」というのもありますが、これは場合によっては社長より「あの方」の方が上かもしれません。

〈三人称の下への動作〉

一人称に対する三人称の下への動作というのが、この場合の普通の形で、他は非常に特殊なのでここでは触れないことにします。

「課長がわたくしを呼びました」

という例では、これが部長などに対することばだとしますと、二人称＝聞き手が一番上となります。「呼ぶ」というのが、大声を出して呼ぶのではなくて、招き寄せる、の意味であるときは上から下への動作です。つまり呼ぶ権限を持つ人しか呼べませんから、呼ぶ人、ここでは課長という三人称が、呼ばれたわたくし＝一人称より上だということになります。

「呼ぶ」は上から下への動作である、とするならば、前に述べた相対敬語の立場に立つならば、使うべきでない、ということになりますが、このような、上から下への動作という意味が薄いような場合は、他に言いようもないので使ってもいいかと思います。もちろん「呼ばれました」のようにうやまいの度がはっきり出ているようなことばには使えません。ただし、二人称が係

長で一人称がヒラのときは、このように「課長がわたくしを呼ばれました」というのは正しい言い方です。しかし、ここでは二人称が一番上の場合のことを言っていますので、ここでの正しい例とはなりません。

〈二人称の下への動作〉

「あいつにおやりになりましたか」
「あの方におやりになりましたか」

「やる」は上↓下という動作を示します。前の方の例では、「やる」動作を受ける三人称＝「あいつ」が一番下になります。後ろの方の例では、それが「あの方」になるので、一人称より三人称が上となります。しかしその三人称に二人称は「やる」わけで、したがって二人称の方が上になります。

「やる」はここで示しましたように、それ自身で上の者のする動作です。ここの二つの例では、これにさらに「お……になる」という、うやまいの度の高い接頭辞をつけている、という点で、「あいつにやりましたか」「あの方にやりましたか」よりも、二人称と一人称との高さの差は大きくなっています。この関係は「採用する」と「採用なさる」との関係と並行しています。

〈一人称の下への動作〉

「彼にくれてやりました」

この言い方は、「くれてやる」が、普通の「やる」よりもさらに下の者への動作という感じが強い表現です。「ました」を使っているので、二人称＝話し相手＝聞き手は、一人称＝話し手よりも上です。

「あの方にやりました」ということばがあり得るのは、二人称が一番上で、三人称＝あの方がその次、一人称である話し手が一番下という場合です。一番下の一人称が、上である三人称に下への動作ができるのは、この「やる」という動作が、一番上の二人称の依頼による代理行為であると考えられるときです。この場合も「渡しておきました」ぐらいがいいでしょう。さらに目上の人の前で、その人よりも下の人を「あの方」とうやまいの度のある語を使うのは、相対敬語の立場からは正しくないかもしれません。それでも、なかなか「あの人に」「松田に」などとは心理的に言いにくい場合もありましょう。

〈三人称の上向きの動作〉

「山本は神社に参拝しました」

これもやや特殊ですが、三人称＝山本が、神社という上のものに対する動作を示しています。「山本」と敬称なしなのは、二人称が一番上である場合には使われます。この形に、なお山本

夫人が夫のことを他人に言う場合、ある営利的組織体、例えば会社の人間が、その組織体の人間の行為を、組織体外の人に言う場合、組織体内で上役のことをさらに上役に言う場合と、下役のことを上役に言う場合、などがあります。

以上のものは三人称だけの関与する上向きの動作でしたが、次に三人称の、一人称への上向きの動作を、三人称に言うという複雑な場合があり得ます。

「彼はまだわたくしのところに上申してきていません」

というのは、「わたくし」と言い、丁寧の度もプラスですから、まず、二人称は一人称より上ですし、「上申する」という上向きへの動作を三人称が一人称にしているのですから、一人称より三人称が下です。ただこのような場合に、一番上の二人称に対して、自分への上向きの動作を明示するのはいかがか、という問題はあります。

これは例えば、「彼はまだわたくしに申し上げていません」のようなものがいけないということになるのですが、「上申する」のような特殊な職場用語は許されるでしょうし、「参っておりません」は実は一人称である自分への謙譲語なのですが、多少美化語的になっているところもあって、許容される使い方でしょう。

二人称に対する上向きの動作は、この場合二人称が一番上ということなので、比較的やさし

いと思います。「一郎があなたに差し上げたはずです」では、「一郎」は一人称より上でも下でもどちらでも成立します。目上の人に対して「あなた」はあまり使わないとすれば、「一郎が差し上げたはずです」でもいいでしょう。「山田がおたずねしましたでしょうか」では、得意先に同じ社の同僚が訪問したかどうか、妻がその夫＝山田が目上の人のところを訪問したか、などを聞くときのことばです。

〈三人称の動作へのいやしめ〉

「彼もついにくたばりました」では、三人称＝彼は、二人称＝話し相手＝聞き手より下です。この「彼」と、一人称＝話し手の上下関係は普通は一人称の方が上ですが、必ずそうでなければ誤りだとも言えません。

「くたばる」は前に述べたように「死ぬ」のうやまいの度をマイナスにした、いやしめ、ののしりのことばです。身分上、社会上の上下関係はともかく、心理的には下向きの動作です。このような用語を目上である二人称に対して使っていいか、という立場はあり得ます。目上の人に対して物言いを上品にすべきだと考えるならば、このような用語を使うのは控えた方がいいかとも思います。

〔6〕一人称が一番上の場面

これは話し手が一番上ですから、あまり気を遣わなくてもいい場面ですが、これも間違うと下の者から何と教養のない、などと思われかねないので油断は禁物です。

〈一人称の下への動作〉

「彼にやった」というのはおだやかですが、「あいつにくれてやった」というと少し尊大だと思われます。「あいつにくれてやったぜ」などと「ぜ」をつけると、二人称もだいぶ下がってしまいます。

この場合に、二人称と三人称とはどっちが上でも下でもかまいませんが、どっちかというと〈一人称―二人称―三人称〉の順であるときの方が使いやすいと思います。聞き手よりも上の人に対して「くれてやる」というのは、聞き手の心理状態としてはおだやかでないこともありましょう。

〈二人称の下への動作〉

「彼にやったか」というのは、二人称が、それより下の三人称に対して「やる」という動作をしたかどうかを聞いていることばです。「彼にやりましたか」となると、相手が丁寧に言ってい

ますから、二人称の方が一人称より上となって、一人称が一番上ということの例としては適当ではありません。

「あいつを採用したか」も、まずは右の例と同じ関係です。これを「あいつは採用されたか」とします。「される」はこの場合受け身で、採用するという動作を受けることになりますが、どっちにしろ採用というのは上から下への動作ですから、採用される「あいつ」=三人称は下となります。採用する側は二人称か、「あいつ」以外の三人称で、後者の場合は三人称が二つ以上ということになり、次の〔7〕で述べるべき項目です。

「彼を採用したのか」というとき、採用したのは一人称になる場合があります。社長などで直接採用という業務にはタッチしなくても、自分の会社で採用したかどうかを聞くときに使えると思います。

〈三人称の下への動作〉

この場合はまったくないわけではありませんが、きわめて特殊なケースとなります。例を挙げるとかえって混乱することもあり得ますので、ここでは省略しておきます。

〈三人称の上向きの動作〉

「あいつは宮中に参内(さんだい)したぞ」というのがこの例で、「あいつは宮中に参内しました」とマス形

をとりますと、一人称より二人称が上になって、ここの例とはならなくなります。

「あいつはやっとぼくのところに上申してきたよ」というのは、三人称「あいつ」が一人称に対してとった上向きの動作です。「あいつはまだぼくのところに参上しないよ」というような言い方はあまりありません。前にも書きましたように「上申する」のような職場のことばではそう異常ではありませんが、一般的な語である「参上する」などとなるとちょっと変に思います。「伺いを出す」などならいいと思います。

一人称が一番上で、しかも三人称から二人称への上向きの動作というのはあまりありませんが、「三郎がお前に差し上げたいと言っていたよ」などという例が考えられます。あるいは社長が部長に向かって、「課長から君のところに上申してきたそうだな」などというのもこれに当たるでしょう。

〈三人称の動作へのいやしめ〉

一人称の動作へのうやまいは万葉の昔には既に述べたようにありましたが、今はきわめて珍しいもので、ここでは省略し、三人称の動作へのいやしめについてここでは述べます。

「彼もついにくたばりやがったな」「あいつはいつまでそんなことをほざいているんだ」などと、いささか乱暴なことばですが、両方とも丁寧の度はマイナスですから、二人称の方が一人称よ

り下であることはわかります。三人称の動作に対してこれをいやしめ落とす表現をしていますが、この三人称が二人称より上かどうかはこれだけからはわかりません。しかし、もし三人称の方が二人称より上の場合は、聞き手である二人称としては、まして自分はこの一人称＝話し手に、ことばの上でこのように扱われることがあるのではないかと考え、あまり愉快な気持ちにはならないのではないかと思います。

〔7〕三人称が二人の場合

三人称は三人以上いてもいいと思いますが、ここでは複雑になるので二人の場合だけを考えます。このように言っても、ここで二人というのは正確には二グループの場合もあるということをお断わりしておきます。つまり「彼ら」と言ったとき、一つのグループだけで三人以上のこともあるわけです。

話をわかりやすくするために、ここでは、会社の地位（ポスト）を例として挙げることにします。その会社の地位も、下の方から、

係員―係長―課長―部長―取締役―常務―専務―副社長―社長

ということにします。もっともこの全部は登場しないかもしれません。また、係員―係長のと

ころは官庁風かもしれません。

〈二人の三人称の動作へのうやまい〉

話し手＝一人称は課長だとします。「社長が係員にこうおっしゃいました」は、言うまでもなく、一人の方の三人称「社長」の動作についてのうやまいの度はプラスであり、もう一人登場する三人称「係員」は、その動作の受け手となっています。聞き手は多分、係員より上です。係員が最下級だとしますと、このような場合にその係員に向かって「係員は」というのはあまり聞かない言い方だからです。そして、聞き手は部長から副社長まで、ということになります。

同じく話し手が課長としますと、「社長が常務にこうおっしゃったぞ」は、動作の受け手の地位がだいぶ上がってきましたが、一人称＝話し手は副社長以下ならだれでもよく、二人称＝聞き手は、同じか一ランク下ならばだれでもいいことになります。常務を話し手とするのは少々変かも知れません。複数の常務がいて、当の動作の受け手である常務以外の常務が言ったとしてもちょっと変な気がします。そのときには「山田常務」などと話し相手を固定させる必要があるでしょう。

「社長が係長にこう言った」「社長が常務にこう言ったぞ」と言う場合が実際上にあるでしょうが、敬語のいい使い方としては感心できません。当の社長にこのことばを聞かれたらあまり愉

快ではなかろうと考えて、社長の聞こえるところでは決してこうは言わないはずだからです。当人に聞かれて困らないように言え、というのが敬語の鉄則です。

ただしこれは、二人称＝聞き手が、この動作をしている人＝三人称よりも下の場合に限られます。二人称の方が上の場合は、例えば副社長に向かって課長が報告しているときに、「部長が係長にこう言いました」というように「おっしゃる」といううやまいの度プラスの用語は使わないことになります。相対敬語の立場で、ある社会組織外の人に対して「父が母にこう言いました」「うちの社長が部長にこう言いました」のように言うべきです。

〈二人の三人称の下への動作〉

「専務があいつにやった」
「専務さまが部長さんに下さいました」
「専務が係長にやりました」
「専務が課長に下さった」

一人の三人称、ここでは「専務」が下に向けての動作「やる」をしています。このことが確定しているだけですが、一人称である話し手は、場合によってその動作をした「専務」より上のことも下のこともあります。また二人称＝聞き手は、一人称＝話し手よりも上の場合も下の

場合もあります。以上のことから右の四つの例を考えてみましょう。
「専務があいつにやった」では、〈専務―あいつ〉という上下関係がまずあります。その他は、〈一人称―あいつ〉、〈一人称―二人称〉という上下関係が確定しています。ということは、その他はどういう上下関係もあり得る、ということです。一人称は社長でも副社長でもよさそうです。二人称＝聞き手は一人称の同僚以下ならだれでもよくなります。
「専務さまが部長さんに下さいました」は、やはり「下さる」と下向きの動作がありますし、職階上もそうなっていますから、〈専務―部長〉という上下関係がまずあります。「下さる」は上から下への動作ですが、「やる」よりは上品で、その動作をした人に聞かれてもいいし、面と向かっても使える語です。したがって、多くはこの語は、自分より上の人の動作について言います。マス形を使っていますから〈二人称―一人称〉の関係です。一人称は課長以下です。これは「部長さん」と言っているのでわかります。二人称は当の「部長さん」であってもいいでしょうが、他の部長ではいけません。当の「部長さん」でない場合は、〈二人称―一人称〉の関係を考えれば、一人称は係長以下となります。
「専務が係長にやりました」は、「やる」という語が、上から下への動作ではありますが、その動作をした人＝「専務」を直接高めませんから、一人称＝話し手は「専務」より上でもかまい

ません。「副社長」や「社長」でもいいのですが、マス形ですので、〈二人称―一人称〉となりますから、「副社長」が一人称で「社長」が二人称でもいいでしょう。それでも一人称が「社長」のときは二人称は社外の人となります。もちろん一人称、二人称はそんなに上でなくても成立します。「専務」に「さま」や「さん」はついていませんが、役職名のあとにこれらをつけるには及ばない、というのが『これからの敬語』の立場です。

「専務が課長に下さった」は、「下さる」には前に述べましたように上へのうやまいの度がありますので、一人称は常務以下であろうと推測できます。マス体を取らず、丁寧の度は低いので、〈一人称―二人称〉です。

「下さる」は上から下への動作である、と申しましたが、同様のものに「下げ渡す」がありますす。このようにした上で「下げ渡される」と敬語の助動詞「れる」をつけると、この動作をした人への直接の敬意が示せるということになります。「下しおかれる」もやや大時代ではありますが、その人に対する直接のプラスのうやまいの度が示されるだろうと思います。

〈二人の三人称の上向きの動作〉

上向きの動作を示す語としては「申し上げる」「差し上げる」などがあります。「言う」ということを中心に述べていますから、「申し上げる」を例として挙げてみましょう。

｛「係長が取締役にこう申し上げた」
　「係長が取締役にこう申し上げました」

この二つの違いは、マス形があるかないかです。この有無によって、第一のものは〈一人称―二人称〉で、第二のものが〈二人称―一人称〉だということがわかります。どちらも取締役に対するうやまいの度プラスの表現ですから、このうやまいを受ける人物「取締役」より目上の人に対して使うのは不適当です。つまり、常務以上には使えません。第二のものは当の「取締役」に対しても使えます。「取締役」より目上のときは「係長が取締役にこう言いました」とします。「係長が取締役にこう申しました」でもいいのですが、この場合に「申す」は謙譲語というよりは美化語としているのだと考えます。

「係長が取締役にこう申し上げた」は、〈取締役―係長―一人称―二人称〉の順である可能性が高いのですが、それでも一人称が、部長や課長である可能性もなくはありません。このときは、〈取締役―一人称―係長―二人称〉となるか、〈取締役―一人称―二人称―係長〉となるかどうかです。一つの会社内で申せば、前者は、〈取締役―部長（ときに課長）―係長―係員〉となり、後者は〈取締役―部長―課長―係長〉となりましょう。

これが「係長」でなく、例えば「三郎さん」という「さん」づけであれば、一人称は「三郎

さん」より下だと確定します。「三郎さん」でなく「三郎」であれば、この「三郎」が一人称の身内なら、一人称より上の場合もあります。そしてもし「山口」なら、同じく一人称と同僚以上で「取締役」よりは下の者の可能性もあります。しかし「申し上げる」ですから社外の人には使えません。

「係長から取締役に上申させました」では、話し手である一人称は、係長より上で取締役より下と思われます。「させる」という使役が使ってあり、「上申する」ですので取締役より下ということになります。つまり、部長、課長です。二人称は取締役以下一人称までのレベルとなります。当の「取締役」へのことばとしても変ではありません。「係長」自身は「上申する」という三人称の上向きの動作をするのですが、「上申させる」のは一人称ですので、厳密にはこの項目での問題ではなさそうです。

「係長から取締役に上申いたさせました」となると一段と複雑になります。「いたす」という謙譲語、へりくだりの表現があり、これに「させる」という使役を表わすものがついていますので、「上申いたさせた」のは一人称だとわかります。この場合ですと二人称は「取締役」自身であることもあり得ます。その場合は三人称は二人ではなく「係長」一人になってしまいます。

「させる」では一人称の三人称への下向きの動作、「上申いたす」で三人称の二人称への上への

動作ということになり、ここでは一人称と三人称＝係長とが共同で動作をしていると言っていいでしょう。

また、この例文では「上申する」が職業語的・職場用語的なので、下から上への動作ではありますが、上の人にも使えるケースとなります。そうすると、常務以上の人に対して言うことも可能となります。これらの人々でも「取締役」を通じて上申の内容が達するとするならば、「取締役」以上は執行機関として一体化されていると考えられます。

＊

以上で敬語についてのルールの記述を終わります。特に最後の方はたいへん複雑になっていますが、実際の生活ではこのように複雑なことが多いと思います。

これに対しては、基本的な事例を頭に入れた上で、実際にそれを応用して使ってみるほかはないと思います。そうして使い馴れていくほかはないと思います。何よりも基本は、場面というか、状況の把握で、これは多分に人間関係への洞察とかかわることで、この意味ではまた人間研究ということになりましょう。

4―ビジネス現場の敬語



1——日立製作所の調査例から

第三章で述べたことは、敬語についての一般的なルールでした。基本的なものとして、社交的な場面ではこれでいいかと思います。しかし、近ごろはだんだん会社など企業の中での生活のウエイトが強くなったようです。われわれとしては、地域社会の人間としての生活はだんだん少なくなっています。起きている時間の主要な部分は企業活動に費やされるというのが実情で、家には寝に帰るだけということになりました。このような現状から、ここで第四章として「ビジネス現場の敬語」ということについて考えてみることにしましょう。

国立国語研究所は、地域社会における敬語の実態調査として、昭和二十六年に三重県の上野市、その翌年に愛知県の岡崎市で、考え得るいろいろな包括的な調査をしたことがありました。この調査の報告書としては、同研究所報告11『敬語と敬語意識』が出ています。この調査については、岡崎市では第一回の調査の約二十年後に主な調査について同じ考え方でもう一回調査して、二つの調査の間にどう敬語の使用実態が変わったかを、同名の報告77『敬語と敬語意識』

として発表しました。
しかし地域社会とは別に右に述べたような考え方から、企業でも敬語の調査をしなければならないと考えて、日立製作所その他の協力を得て、調査を行いました。結果は、報告73『企業の中の敬語』として発表されています。この調査は昭和五十年度からの三年間にわたるもので、調査としては岡崎市の二回目の調査より後ですが、報告書は岡崎市の第二回のものより先になりました。
ここでは、この『企業の中の敬語』について、結果のあらましをまず述べておきたいと思います。原報告書は五百ページ余の大部なものなので、ごく簡単に紹介します。調査は東京の本社と茨城の工場、京阪の工場や営業所などで行われました。

言語意識・敬語意識について

社内でのことばづかいに気を配る度合いは、事務系従業員の方が現場系従業員より高く、また、本社機構の方が工場・営業所より高い。職階別にみると、気を配る人の率は中位の職階で高い傾向があります。上にも下にも気を遣っているのでしょう。
ことばづかいでは、敬語に関しては関心が強いようですが、方言や発音については関心はあ

まりないようです。

社内の敬語は仕事にとって不可欠、とする人の方が圧倒的に多い。しかし、現場系従業員にはこれに反対の意見も見られます。また上位の職階ほど不可欠とする意見が強いようです。

将来の社内敬語のあるべき姿に関しては、全体として現状維持派が過半数を占めます。現在のよりもきちんとすべきだという意見の人は二～三割いますから、これと合わせますと八～九割となりますので、本書に書きましたようなことは、当分は言わなければならないもののように思います。

もっとゆるやかになった方がいい、あるいはなくなった方がいい、という意見の人は、年齢の若い層、在社年数の長い層、学歴の低い層に多い傾向があるようです。

第三章で例として示したような短い文について、この中の人間の地位の上の順について聞いてみました。一人称と二人称の、つまり話し手と聞き手の上下関係は正しく把握される場合が多いようですが、三人称として登場する人物と一人称・二人称との上下関係については正しく把握する人の率が下がってきます。この際、学歴が高いほど正しく把握する人が多いようです。性では男が、職階では上位の者に正答者が多い傾向もあります。

部長・課長という上位の職階は、ことばづかいに気を配らなければならない相手として意識

されるようです。この人たちはことばにとって煙たい存在なのでしょう。

あまり気を配らなくてもいい相手としては、職階では、最下位職階の者にとっては自分と同位の相手であり、それ以外の回答者にとっては、自分より一段階ないし二段階下位の職階の相手です。これらについては、所属の同じある職階に対して無頓着ですむ度合いが、他の所属でそれより一段階下の職階の人に対するよりも高い場合が多い。

年齢では自分より年上の人、在社歴では先輩が、気を配る相手として意識されています。性では同性同士は無頓着に、異性であれば気を配る方に傾きます。これは特に女性に特徴的です。これらは常識的な結論と言えましょう。

職階と年齢は、広い意味の上下関係を作るものとなりますが、話し手と同位階以下で同年配以下が下位、それ以外は上位と意識するようです。上位に対してはことばづかいの丁寧さはかなり急な勾配で上がるのに対し、下位に対してはゆるやかに丁寧さが下がります。

「呼びかけ」について

以上は意識に関するものですが、実際に敬語をどう使っているかの調査結果について述べてみます。

まず「呼びかけ」については、上位者のうち、部長と課長（調査ですので、それ以上の職階の人の被調査者が少なくなりますし、また現実にそういう上の人に対して呼びかける人はそう多くはありません）には、職階名で「部長」「課長」と呼びかけます。

主任以下の上位者には、その姓に「さん」を添えて呼びかけます。「主任」と職階名で呼びかける例は多くありません。

女性には、その姓に「さん」を添えて呼びかけます。

職階名に「さん」をつけた「部長さん」「課長さん」という呼びかけは少なく、それも女性事務員に限られます。

姓の呼び捨ては、東京ではほとんど現われず、茨城、京都に多く、この呼び捨ては、主任以下の男性が自分と同じか少し下の男性に対するとき比較的現われやすいようです。

京阪地域では、名で呼びかける例も現われ、また愛称で呼びかける例も出てきます。全体として、親しい感じの呼びかけは京阪に多く、東京は規則的、あるいは機械的です。

呼びかけについては、以上のような傾向が調査では出てきましたが、会社の人事がだんだん年功序列を崩していくといろいろな現象が起こります。先輩を飛び越して上位者になってしまったような場合、それまで「くん」で呼ばれていた者が、一朝にして相手を「くん」で呼ぶと

いうことになるわけで、お互いにこれは困ることになります。

　そこで上位、下位にかかわらず、お互いに姓に「さん」をつけて呼ぶようにしよう、という動きが出てきました。「さん」呼びの元祖は本田技研工業だそうですが、昭和六十二年の四月から積水化学工業が始めたという記事が新聞に出ました。この記事によると、経済同友会が「抜擢や降格がスムーズに行なわれるよう、職場での『さん』呼びを」と企業に勧めているそうで、この呼びかけはだんだん増えてきているようです。

　この記事では、ある課長の話として、「後輩でも将来こいつはオレよりえらくなりそうだ、とわかる。そういう相手には、徐々に『さん』呼びに変えたりしている。これもサラリーマンが生きるための知恵」というのを紹介しています。人事異動のつど呼び方が変わり職場の人間関係がぎくしゃくしたり、コミュニケーションがうまくいかなかったりでは困ることになります。職名では服従関係が前提になって、自由に物が言えなくなる、という考えがあるようです。

一人称、二人称の動作

　まず、一般的な傾向としては、尊敬、うやまいの語形は、部長、課長に対した場合に集中します。

謙譲の表現は尊敬の表現より現われにくいようですが、この謙譲表現は、「行く」と「来る」との比較では、「行く」の項よりも「来る」の項で多く現われ、またこれは課長、係長に対したときにほとんど限られます。この表現は、男性では部長以外に使うことは稀ですが、女性の場合は課長に対しても、部長に対するよりは少ないが使われます。

部長と課長とは他よりはっきりと高い言語上の扱いを受けていて、この会社の課長のすぐ下の職階である主任以下との間とには段差があります。

上位者へのことばづかいでは、部長に対しては尊敬の表現、課長に対しては尊敬の表現に丁寧の表現がまじり、主任以下に対しては丁寧表現となることが多い。下位者へのことばづかいは、東京の部長、課長は、女性事務員に対した場合を除いて、普通のうやまいゼロの形に「よ」をつけて「行くよ」などとなることが多い。

課長の下が主任ですが、その一つ下の企画員とその他の事務員との間では、年齢に大差のない場合は、ことばづかいの選択に在社歴が多くかかわります。

女性の事務員は高い敬語形式を多く使います。

語形に関しての傾向

男性の使う尊敬の表現としては、尊敬を示す助動詞の「れる」「られる」が最も優勢で、「行かれますか」「起きられたようです」などのように使われます。しかし「いる」に対しては「いらっしゃる」系が最も多くなっています。

その「いらっしゃる」の方が「れる」「られる」を使った「おられる」などよりはうやまいの度が高いという意識で使われています。この「いらっしゃる」は女性の方が男性より多く使います。

「おいでになる」系のうやまいを表わす語形はあまり現われませんが、使われる場合はこれは「いらっしゃる」よりも高いうやまいの意識で使われます。

終助詞の「よ」は、普通のうやまいの度ゼロ形式に「行くよ」のようにつきやすく、「行きますよ」のような丁寧の形式にはつきにくく、「私がいたしますよ」のような謙譲の形式にはさらにつきにくいようです。後二者は特に女性事務員には現われにくいようです。

質問のときの終助詞「の」のついた普通語形「行くの?」や、ただイントネーションをつけただけの形「行く?」は、一人称か二人称の一方またはこの双方が女性のときに現われやすい。終助詞の「か」や「かい」のつく普通語形「行くか」「行くかい」は女性では現われません。

地域別の傾向

東京では、上位者、特に部長、課長、なかでも部長から、男性に対してより女性事務員に対して丁寧な形を使うことが多く、この傾向は、茨城では少ないように思われますが、京阪ではまったくありません。

茨城では、うやまいを表わす尊敬の語形が、部長、課長に対したとき、および女性事務員が話し手であるときに多く現われます。そしてここでは、上位者から男性事務員に対して丁寧な語形をとる例が、東京や京阪より多いようです。

京阪では、尊敬の形式、丁寧の形式、普通のゼロの形式が、職階差にきれいに対応して現われます。またここでは女性事務員が部長に対した場合を除いて、東京、茨城より「いらっしゃる」系統の語形が現われにくいようで、女性事務員が話し手である場合を除き、「行くよ」に相当する謙譲の語形「まいります」が現われない、と言えます。

＊

以上のことから、だいたい、企業における身分序列とその敬語との関係の実態がわかったことと思います。これが今後はどうなるのか、一部分は呼びかけのところで述べたように「さん」が多くなると思いますが、大筋では近い将来もそう変わらないでしょう。

2――接客の際の敬語

店などの商業活動で

接客と言ってもいろいろあります。いわゆるサービス業もありましょうし、会社などでの営業活動としてのものもありましょう。紙数の関係でそう多くは述べられませんが、少し考えてみることとします。

まず一般的な心得としては、相手に対する尊敬の心を持たなければならないことは言うまでもありません。「お客様は神様です」というのはこのことを言うのでしょう。しかし、あまりにも機械的に、あるいは建前的に敬語を使っていればいいというものでもありません。人間として、お互いの尊厳を保つということはどうしても必要かと思います。

客の出入りのたびに「いらっしゃいませ」「ありがとうございました」と言う、というのがまず基礎的な心得としてあると思います。多くの客の中には、こういうのはわずらわしい、とか、押しつけがましい、といって嫌う人もいないではありませんが、それは少数ではないかと思い

ます。

英語などの外国語の場合、お客の方もこれに対して何か返事をすることが多いように思いますが、日本ではあまり返事をしない習慣です。特に初めてのところとか、大きい商店、デパートとかスーパーなどでは、お客の方は黙っているという習慣です。そこで、店側の人間としては、張り合いがないということになりますが、返事のあいさつはしなくても、あいさつがあるというのは期待しているお客が多いのですから、しておかないと、あいさつもしない、など思わぬ批判を買うことになってしまいます。

店側としては、商品についての知識はお客よりは当然深く広くなければなりません。これはことば以前の問題ではありますが、知っているのといないのとでは、迫力が違います。成績を上げるためには知っていることが大切です。

『これからの敬語』では、ここの主題に関しては「奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙そん語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格的尊厳を見うしなうことがあるのは、はなはだいましむべきことである。この点において国民一般の自覚が望ましい」と言っています。これは基本的には今も言えることだと思います。

これは接客の場合に限らないけれども、復唱ということはまちがわないために大切です。まちがってしまえば、まちがったまちがわぬで、気まずいことになり、敬語どころではなくなってしまいます。「××でございますね」というように確認しなければなりません。特に支払いを受けるときには、このことは大切です。特に問題となるのは支払った紙幣が一万円札であったか五千円札であったか、です。受け取ったのが五千円であったときに「五千円お預りします」の一言を忘れてはなりません。

「高い」とか「安い」とかいうような直接的なことばは使わない方がいいとされています。「お値段が張る」とか「お徳用」「お求めやすい」とか言う、というのがこれです。敬語の使い方の一つに、何事もあからさまに言わない、というのがありますが、これもその一つです。便所を「お手洗い」などというのもこの類いです。このようなものは、使っているうちに、その示す真の意味の影が強くなって、ぼかして言うという効果がなくなってくるものです。したがってまた新しい言い方を工夫しなければならなくなります。

それと似たことは、使っているうちにその語の価値が下落する、ということがあります。例えば、「女中」という語は、江戸時代には歌舞伎や講談に出てきますように、「これこれ、お女中」などと、女性に対する敬意のある呼びかけ語でしたが、明治時代からは、個人の家に雇わ

れて家事の手伝いをする女性を意味するようになりました。この意味で使われているうちに価値が下落したものですから、「ねえや」という呼び方に変わり、さらに「お手伝いさん」となりました。今はこういう人自身がいなくなってはいますが。

店などの女主人に「奥さん」と呼びかけるというのもこの類でしょう。前は「おかみさん」と言っていましたが、この語が価値を落としたので嫌われたからでしょうか、文字どおり表には出ずに奥にいた、やや上のクラスの主婦を呼ぶ語の「奥さん」がこの店先の場合にも使われるようになったのです。

会社などの場合

基本的には右に述べた、商店などの場合と同じです。しかし、ある程度以上の組織体となると、商店以上に従業員のことばづかいで、その組織体の構成員に対する教育の良否がわかります。特に受付とか電話交換手のことばは判断の材料にされます。

このようなところでは、自分の上司についての表現が非常に多くなりますから、この点については決してまちがわないようにしなければなりません。自分の方を称する場合も多いと思います。「わたくしども」のような言い方に馴れる必要があります。

何か相手の目的が達せられないような場合、例えば会いたいと言ってきたのに不在であるような場合に、「あいにくですが」などのことばを入れなければなりません。

訪問というようなことについては、まず約束を取りつけることを忘れてはなりません。日本では飛び込みで面会を求めることが比較的多いようですが、これは原則としてはよくありません。飛び込みの場合、それを理由に面会を拒まれる覚悟はすべきです。訪問販売のような場合も、会う約束のないときは断わっていいのですし、したがって販売しようという側は電話などで何とか面会まで漕ぎつけたいと努力しているようです。

初対面の場合、名刺を交換する、というのが日本の習慣です。日本語には敬語というものがあるために、初めて会ったときに相手をどのように言語的に待遇したらいいかを決める一つの大きいインデックスとして、所属している組織における地位があり、名刺の交換はその確認の手段となっているのです。もう一つの大きなインデックスとしては年齢もありますけれども、この地位の方がより強いインデックスになっていると思います。ですからビジネスマンは名刺を忘れてはいけないのです。

ところが、名刺を交換して、自分の相手に対してのことばのレベルを決めてしまうと安心するせいか、日本人は人の名まえを覚えないようです。欧米語では話の途中に相手の名まえを入

れるのが礼儀とされています。「はい」と言うよりも、「はい、××さん」と言う方が丁寧ということになっているので、相手の名まえを正確に覚えていないと会話が運びません。日本語の場合このことは要求されていませんので、これらの理由からあまり名まえを覚えないようです。しかし、商談などをスムーズに進め、あるいは親しさを示すためには、会話の中に名まえを入れるやり方は今後多くなる方がいいのではないか、とわたしは思います。

3――文書・手紙の敬語

帳票化・定型化の傾向

近ごろは電話で用件を済ます場合が多くなりましたけれども、確かな証拠として後まで残せるという点で、手紙の重要性は無視できません。もちろん、電話で物を注文することはできますが、同時に注文書を送附しなければなりません。電話では聞き違いの事故もあり得るからですし、証拠としての力もないからです。

そこでビジネスでは「文書主義」という原則がとられる、ということになります。しかし、

書くことがだんだん少なくなっている現代人には、手紙を書くのがおっくうだという人は増えていますが、ビジネスをする以上は避けては通れないものですので、積極的に書き馴れることが必要ではないかと思います。

手紙には一定の決まりが、口頭での話よりもずっと多くなっています。それが一つには面倒だという感じを人に与えるのだろうけれども、これを逆手にとって考えれば、一定のフォームが決まっていればかえって書きやすいとも言えるでしょう。

この観点から、いろいろな会社や団体では、この類のものについてはできるだけ帳票化することが実行されています。伝票などに書けばいい、というものです。対外的にも決まった帳票、例えば「注文書」などで済ませることもあります。けれども対外的には儀礼的要素もありますから、全部を帳票とするわけにもいかないことがあります。

帳票化できないものについても、世には文例集や印刷のあいさつ状の見本などがありますから、これに準拠して書くことができます。ひと頃はやった、あらかじめいくつかの決まりきった文を決めておいて、それをその時々に合ったように組み合わせて文章を作り上げていくパラグラフ・システムを使うこともできます。箇条書きも大いに使うべきです。

一般的な注意

ビジネスの手紙は、まず書く目的がはっきりしていることが第一に挙げられます。私信の場合はただ良好な関係を維持するために、書くほどの用でもない手紙があり得ますが、ビジネスの文書にはこういうことはありません。

書くことは個人の意見ではありません。公の、自分の属している団体の意思表示です。したがって個性を出す必要はないどころか、なるべくこれは押さえるところから出発すべきです。ビジネスの文書は文学ではありません。実際の書き手と発信人とは別だ、というのが普通です。

便箋・封筒や書式などには一定の標準があります。内容にも一定の型があります。これによるべきことは言うまでもありません。ついでに申しあげると、このような会社なら会社で決められた便箋や封筒は個人的な手紙には使ってはなりません。使った人間の品性がこれで明らかになってしまいます。大学の先生などはこの点きわめてルーズというか呑気で、学会誌への投稿原稿などを送るのに大学名入りの封筒を使う人がよくいますが、これも避けてもらいたいとわたしは思っています。学会誌に自分の論文をのせるのは個人的な活動であるはずです。大学名入りの原稿用紙などは、時には生協の売店などで売っていますから、これはあまり厳格に考えなくてもいいと思います。

さらに文書を書いたら、これは原則として複写して控えを取っておくべきです。発信番号などがついているのは是非ともそうしなければなりません。

私信を書く場合もそうですが、書くときは常に辞書を手元に置いて、面倒がらずに引くことです。大丈夫と思っても念のために引くことも必要です。あるいは暇のあるときには辞書を読むこともおすすめします。人は案外思い込みで間違った書き方をしているもので、何げなく辞書を見ていて、本当はこうだったのか、と思うようなことはよくあることです。私信の場合は間違って書いても書いた本人が笑われればそれで済みますが、ビジネス文書の場合は、書いた当人が笑われるのではなく、発信名義人、あるいは会社そのものが笑われるのです。普通は発信までは幾人かの目によるチェックがありますが、間違っているとチェックに上司が余分な時間を費やさなければならないし、第一書いた人間の勤務もこれでマイナスに評定されてしまいます。

宛名の敬称について

少しビジネス文書についての一般論を書きましたが、この本の主題は敬語ですので、この観点から述べてみましょう。

ビジネス文書は近ごろは横書きが多いようです。この場合、やはり宛名は一番上に書くべきです。時に、発信年月日、発信人と書いてきて、最後に受信者を書くのを見ることがあります。これは従来の縦書きのものをそのまま九十度転回しているのですが、横書きでこのようにすると受信者は発信者よりも下に書かれることになり、われわれの日本の感覚から言うと変なことになります。この形式を正式としている会社などは即刻改正していただきたいと思います。

その受信者名につける敬語は、次のようにするのが一般です。

官公庁・会社などの団体名には「御中」

職名や個人名をつけた職名、あるいは職名のあとの個人名には「殿」あるいは「様」

このことは前にも書きましたが、『これからの敬語』では、「将来は、公用文の『殿』も『様』に統一されることが望ましい」とあり、少しずつ「様」が拡がっているようです。例は「人事課長殿」「山本総務部長様」「会計課長　根本松雄様」など。

同文のものを多数に出すときは「各位」をつけます。「株主各位」「評議員各位」などで、この「各位」にさらに「様」や「殿」をつける必要はありません。

宛名が個人名のときは、「様」「殿」、場合によっては「先生」などとします。わたしの知っている大学教授には学生からのレポート送附などの宛名に「様」とあって「先生」としてないの

は減点する、という人がいます。減点は厳しすぎるかもしれませんが、そういう意識を持つ「先生」と呼ばれる人もいることは忘れてはなりません。

この敬称をつけ忘れることが時にありますが注意して下さい。あいさつ状など印刷した物は「殿」や「様」を先に印刷しておいて、あとで名まえを入れるようにしたものがあります。これが入っているものと思って名まえだけを入れてしまったところ、実は「様」が印刷してなかった、ということは、わたしが最近受け取った高名な文学者のあいさつ状にもありました。

なお、原則としてわたしは「殿」や「様」ぐらいは名まえを書くついでに肉筆で入れた方がいいのではないかと思っています。ましてゴム印で「殿」などと押してあるのには好感は持てません。

もちろん、職名や個人名を間違って書くことはたいへん失礼ですから注意しなければなりません。わたしの姓は「野元」ですが、世には「野本」さんの方が多いので「野本」と書かれることは珍しくありません。わたしの場合は馴れてしまっていますから、この誤りは平気ですが、世の中にはたいへん気にする人がいます。事務文書ではカタカナ書きの宛名がよくありますが、これもお気に召さない人があります。さらに常用漢字の字体では気に入らないでわたしは「広沢」ではなくて「廣澤」だ、と頑張る人もいます。ここで国語国字問題について論争しても実

りはないでしょうから、相手の好むのに従っておく方がいいでしょう。

知っておきたい常識

宛先については、返信用の封筒や葉書に表書きが印刷されていて、「××行」「××宛」となっているときは、その「行」や「宛」を消し、受取人によって「御中」や「様」と改めるべきです。この訂正を相手にさせるのは気の毒と、あらかじめ「××御中」「××殿」などと印刷してあるのが稀にありますが、この合理主義は日本ではまだ早いように思います。ついでながら、出欠の返事を書くときは、「御出席」「御欠席」「御住所」「御芳名」の「御」や「御芳」は消すべきです。どうせ消すのだからと、これらをつけないで印刷するのも早すぎる合理主義でしょう。

個人的な手紙での宛名は、手書きの場合、本文より字を大きめにするということになっています。高さ（縦書き）や、左端（横書き）は本文とそろえます。

横書きでは、前に述べたように最初の方に宛名を書くならば起きない問題ですが、縦書きの場合は、宛名の後に余白があまりないのは失礼とされています。本文を書くときから、なるべく余白が残るように考えるべきです。ついでに言えば、目上の人に手紙を書く場合は、便箋が

二枚以上になるように字配りを考えて書くべきで、このために、あまり長い用件でない場合に使う、罫の幅の広いものを用意しておいた方がいいでしょう。

個人的な手紙の宛先は、相手が目上であるときは、姓だけを書くというのが古くからのしきたりです。相手が近親の目上であるときは、名まえなどは書かず「父上様」「姉上様」「叔父上様」のように書きます。近親の目下の場合は名に「殿」をつける、というのが昔のやり方でしたが、近年はこの場合も名に「様」をつけるようです。古くは、自分の子どもなどに書くとき、まだ独立していないときは漢字を使わず「どの」とひらがな書きにした例もありました。

発信人の方の名に、もし職名に姓名をつけるときは、その職名は縦書きでは右肩に、横書きでは左肩につけるのが原則です。

ついでに個人的な手紙での発信者名は、昔から言われているのは、相手が目上の場合は必ず姓名ともに書き、相手が目下の場合は姓だけにしてもいい、というものです。しかしまずは姓名とも書いておいた方がいいでしょう。相手が祖父母、両親、兄姉弟妹の場合は名だけを書くのが一般です。

公的な文書の場合、タイプやワープロ、ゴム印などで発信人を書くのが普通です。これは正式の四角な印を押せばそれでいいわけですが、個人の手紙の場合は、自筆で署名するのが礼儀

にかなっている、とわたしは思います。

その他、ビジネス文書、あるいは個人の手紙の書き方については、そのための本も多いので、その方にまかせることとします。

4――電話のマナーと敬語

電話は強制力をもつ

電話の利用度はだんだん高まっています。文書まで電話線を利用したテレファクスなどで送られることがたいへん多くなりました。ここでは在来の意味での電話について述べます。

電話というものはある強制力のあるものです。ベルが鳴れば出ざるを得ません。どんな急用の電話かわからないからです。また、ベルが鳴っている段階では発信人がだれであるかわかりません。手紙なら気に入らない人からのものは封を切らないでほうっておくこともできますが。こういうことですので、最近はいろいろこれらに対する策（留守番電話など）が考えられています。と言ってもすべての人がこれを備えるわけにはいきません。

とにかくこのように強制力のあるものですから、電話をかける方としては、このことを心して、特に目上や得意先にかけるときはそれなりの心配りをすることをまず求めておきます。近ごろは電話はもう一般的なものとなっているから「電話で失礼ですが」などと言う必要はない、とする意見もありますが、この強制力の故にやはり基本的には目上の人には失礼なものでありましょう。

電話は公器であることを忘れてはなりません。両端の電話機とそこまでの短い電線は専用でしょうが、中間の長い電線は共用ですから、あまり長い時間一回線を占領することは全体の電話の交信に阻害の原因となり得ます。この辺は郵便とはまったく違うのです。

電話は強制力がありますから、一定時間は電話機のところに相手をも釘づけにしていることになります。どんなに相手が忙しいかは、かける側ではそれほどはっきりわかりません。今、天麩羅(てんぷら)を揚げているところかもしれませんし、便所に行きたくなっているところかもしれません。公共性とともに以上のようなことを考えたら、用事はなるべく早く切り上げるべきです。長距離でかかってきた電話は、電話代のことも考えて、話をなるべく早く終わるようにしなければなりません。

特にビジネスの電話は用事があるからかけるものです。したがって受けた側は、用事が終わ

ったのかどうかを確認してから切るようにしなければなりません。電話はかけた方から切る、ということを言うのはこのためです。

大切な名乗りと確認

電話というものはやや公式の感じがするものですから、電話での話は、面と向かうよりもやや丁寧になるのが一般であろうと思います。今のところ視覚に頼ることができませんから、すべて話しことばによって通達するほかありません。この辺に電話のむずかしさがあります。面と向かっての話より多少はどうしても音波の効率は悪くなりますから、数字などの確認ということはどうしてもしなければなりません。復唱によって正確を期することがこのときも大切になってきます。

普通は電話が鳴って出るときは「××です」と言え、ということになっています。それは原則としては正しいし、特にビジネスの電話ではいつもそうすべきです。また一方、電話をかける側については、「××ですが」とまず名乗るべきだ、ということになっています。そうすると通話が成立したとたんにかけた方は自分のことを「××ですが」と言い、受けた側も自分のことを「○○です」と言って両方の言うことが重なってしまうことがあります。

これを防ぐためには、電話の交換手というプロの受け手は「おはようございます。××でございます」などと言うべきだ、とされているのは従うべきでしょう。しかし、かけた方も交換手であるときはやはりことばがダブってしまうことになります。この辺はなかなかうまくいかないことがありますが、相手が出たときいきなり「○○さんですか」と相手を確認するのはどうかと思います。かけた側はまず自ら名乗るべきです。

わたしがブラジルにいるころの電話では、かけた方が相手が出ると「だれですか」と聞くことになっていました。今はどうか知りませんが、これは妙な話で、そこに電話しているのですから「だれですか」は変です。何でも、電話事情がよくなくて誤接続が多かったのでこんな習慣ができた、と説をなす人もいました。

とにかく、相手が見えないのですから、まずは相手を確認してから話し始めなければならないことは言うまでもありません。同性の親子というのは声が似るものですから、親父さんに話しているつもりになっていたら息子さんだった、などという経験は多くの人が持っているでしょう。他人に聞かれては具合いの悪い内容もあるのですから、確認ということはお互いにまずしなければならないことです。

ずっと昔の話ですが、わたしの同僚に宇本という人がいました。野元と宇本ですからよく間

違えます。ある朝わたしは奥さんからだという電話で、いきなり「ゆうべはどうしたのよ」と怒られてしまいました。宇本君はどこかで研究会をやってそのあと酔いつぶれて外泊したようで、わたしはいきなり宇本夫人に怒られてしまった、というわけです。もちろんすぐまちがいとわかりましたが、宇本君は、奥さんがこのまちがいですっかり動揺してしまったので、追及はあまり厳しくなくなって助かったようです。

エチケット違反の例

「××さんですか」と確認してから、「先生はご在宅でしょうか」などということはよくありますが、わたしの経験では「家には先生は三人いますが」などと言われたことがあります。必ず「○○大学の××先生」と言うようにした方がいいと思います。

電話をかけた側としては、交換手がまず出て、次に秘書が出て、やっと本人と話せる、などということはよくあることですし、それは覚悟していると思います。しかし、かける側に廻ったときは、相手が出る前に話をする本人が出ていて応答を待つのがエチケットだと思います。ところが時にそうでない人がいます。電話だというのでこちらが出ますと、「野元さんですか。ただ今社長と代わりますのでしばらくお待ち下さい」などと言ったあと、オルゴールの音楽な

どを聞かされることがあります。

これははなはだ失礼なことで、ビジネスでかける場合にこういうことをしてはいけません。用事はかけた方の用事なのですから、その用事のために何も待たされるいわれは受ける側にはありません。こちらの用事で忙しいところを応対してもらうのですから、いくら社長だからといって、他社の社員を待たせるのはいけません。もちろん、この社長が出張先などの自社の社員に電話をかけるのであれば、その社員を電話口で待たせておいて、おもむろに出てもいいと思います。

このような非礼は会社などではあまりないようですけれども、官公庁とか学校とか、非営利のところでは往々にしてあります。このようなところの交換手や秘書は、自分のところの上司を大切に考え、出てきた相手を確認してから取り次ぐべきだと思っているのでしょう。しかし、これはまちがっています。

いくつかの注意

ビジネス電話の多くの部分は外部からの電話ですから、前から述べている相対敬語を使わなければならないものです。したがって、その事務所を代表する声となる交換手などは、この点

からの訓練を受ける必要がありましょう。あるいは学校を出てすぐ来た新入社員への教育も大切です。原則として外部からの電話には相対敬語を使うべきですが、稀にしろ上司の家族からの電話があります。このような場合に多くは、その姓を呼び捨てにして「××はおりますか」のようにかけてくるので、身内であることはわかりますが、古い学友などが姓の呼び捨てで電話をかけてくることもあって少々混乱することがあります。

ビジネスでは電話や面と向かったときなど相手側の団体名などには「さん」をつけて呼ぶ習慣があります。この場合、サンという音で終わる社名ですと、例えば「山田恒産さん」となって、サンがつづいてしまいますが、やむを得ません。このような呼び方はこの団体のさらに小さな、課名などになったときは「人事課さん」などと外部から呼ばれることはまずありません。確認のときも「山田恒産さんですか」ということになって、その人事課の場合も、「山田恒産の人事課さんですか」とは言わないようです。これは受ける側で「人事課です」のように言うというのが普通だからではないかと思います。

電話は前にも言ったように、用事があるからかけるのです。受けた側は、まずその用件を聞くのが第一です。かかってきたなら、相手よりも先にこっちの用事を述べ始めるべきではありません。電話代は普通かける方についてくるものです。ですから本当のところは、かけた方の

用事が終わってからこっちの用に移るのも遠慮すべきです。ただお互いにちょうど時間が一致して話し合えたのですから、切って改めてこっちの用のためにこっちからかける、などということまではしなくてもいいでしょう。

電話をかけるときは、何かの用事を思い出してかけるのですが、その用事のほかにもその相手に伝えるべきことがあったかどうか、ダイヤルを廻す前に考えてみた方がいいと思います。特に何か言わなければならないお礼のことばはなかったかどうか考えてみることです。彼は自分の用にかまけて、当然述べるべきことも言わなかった、などということがないように気をつけましょう。

メモのすすめ

ビジネスの電話では伝言ということがつきものです。本人に代わって受けたときは、代理の、または同じ課の××です、というように名乗るべきです。もし代わりの人が名乗らず、その人に伝言などを頼んだ場合は、「失礼ですがお名まえを伺わせていただけますか」というように聞いてもかまわないと思います。名まえを聞くことによって、伝える責任をその人にも感じてもらうことができます。

ずはダイヤルインには設置者側の利便のために移行しているような気がします。

電話については、なお、マナーに関していろいろのことがあります。

相手によってかける時間をいつにしたらいいか、ということもその一つです。ビジネスの電話はもちろん常識的なビジネスアワーのうちにすませるべきで、私宅にまでかけるのはできるだけは避けた方がいいと思います。ビジネスでない場合、夜あまりおそいのはよくありません。せいぜい十時半ぐらいまででしょうか。日曜の朝は早いのは迷惑でしょうから十時以後にすべきでしょう。

ビジネスの場合はもちろん短く要領のいい電話を心がけるべきですが、そうでない場合には時としてはあまり短く切るのは喜ばれない場合もありますので、この辺はむずかしいところです。普通は時間によっては、今何分ぐらいよろしいでしょうか、と聞いてから話に入る方がいい場合があります。そのような時は遠慮なく、今ちょっと取り込んでいますから、あと何分したらこちらからおかけします、のようにいうべきです。長くなりそうな、あるいは長いのが常習の人がかけてきたときは、最初に「今でかけるところなので、五分ぐらいで」などと言うのがよろしかろうと思います。いつでも、でかけるところ、と言うわけにはいかないでしょうが。

電話に関しては本題の敬語という点からやや外れて、マナーというべき面についてだいぶ述

べてきました。しかし、敬語というものも結局はマナーであり、このマナーの基本に思いやりということがありますので、このようなことを述べるのも、そう的違いとは言えないと思います。

電話は今でこそ日常的なものになっていますが、その出発は非日常的なものでした。ですから、敬語の上からいうと丁寧なことばが使われている、ということになります。電話は前にも述べましたように、中年以上の人にとっては今もやや改まったものですし、また公式な感じもするもので、これに丁寧さも結びつきます。友人間でも、面と向かっての話よりはやや丁寧になります。中年以上の女性は電話ではその人の平時的な声のレベルよりも高い声を出す人がいるのもこの故でありましょう。日本では声の高さは高い方が丁寧さと結びついています。

電話に向かって頭を下げながら話すのはおかしい、というのは冷静な眼で見ればそのとおりでしょう。しかし、そのような態度でいて声の調子もそれにふさわしいものとなり、敬語的なものとなると考えるならば、電話へのお辞儀を笑うべきだとは思いません。

5　これからの敬語



平明・簡素を旨とする

「これからの敬語」というのは文字どおり、これからの社会における敬語です。しかし実は、前から述べてきましたが、昭和二十七年五月に文部省が発表した『これからの敬語』という文書があります。これはこの年の四月十四日に国語審議会が文部大臣あてに建議した『これからの敬語』によったものです。以下、この二つの「これからの敬語」があってまぎらわしいので、後者の文書のことを言うときには『これからの敬語』と二重のカギかっこをつけて示すことにします。

『これからの敬語』には、まず基本の方針として四条挙げてあります。そのうち、最初の二条は、これからの敬語の考え方として三十五年後の現在でも少しも古くなっていませんし、ある点では進みすぎている、という面もないではありません。ここでは、これをまず掲げておきます。

㈠　これまでの敬語は、旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎをいましめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

(二)　これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

『これからの敬語』は戦後の民主主義高揚期にできたものですので、簡素という点ではやや進んだものとなっています。例えば、自分を指すことばとしては「わたし」、相手を指すことばとしては「あなた」を標準の形とし、敬称には「さん」を標準の形とする、というようなことを述べています。標準の形というのはそれでいいのですが、その他の形についてはあまり重きを置かない方向で考えているようです。

わたし自身は、右のものを含めて『これからの敬語』よりはもう少し丁寧な、あるいはうやまいの度の高いところまでを考えに入れたこれからの敬語の立場に立っていて、この考え方で今まで述べてきました。

『これからの敬語』の基本の方針の(四)には、「奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に低い謙そん語を使うことが特に商業方面などに多かった。そういうことによって、しらずしらず自他の人格的尊厳を見うしなうことがあるのは、はなはだいましむべきことである、この点において国民一般の自覚が望ましい」とありますが、例えば「明日休業させていただきます」というような掲示は、関東方面でもこのころ以後、識者の批判にもかかわらず拡まって

いるようです。
理想は理想として、現実にやはりそう簡素にはなり切れないところがありますし、前に述べたように、人称代名詞による主語がほとんどすべての文につくような文構造に日本語が変わらない限りは、ある程度の複雑さを持った敬語の体系でこれを示すほかはないと思います。

行きすぎは避けたい

『これからの敬語』では、「戦前、父母・先生に対する敬語がすべて『おっしゃった』『お——になった』の式であったのは少し行きすぎの感があった。戦後、反動時に、すべて『言った』『何々した』の式で通すのもまた少し行きすぎであろう。その中庸を得たいものである。たとえば、『きた』でなく『こられた』『みえた』など」とあります。
しかし、「おっしゃった」や「お——になった」を好ましくないような書き方は今としてはどうかと思います。反対の方について「言った」「何々した」が行きすぎというのは事実でしょう。また「こられた」「みえた」なども決して悪くないというよりは望ましい語形であろうとは考えます。
実は、この「お——になった」を行きすぎとしているのは、『これからの敬語』の中の「学校

用語」というところです。右に述べたように「父母・先生に対する敬語」とありますから、必ずしも学校だけのことばではありませんで、先生とともに父母を挙げて、目上であるけれども、親愛の情がなければならないものとして一括して述べたものと思います。
この学校用語について、『これからの敬語』で「先生と生徒との対話にも、相互に『です・ます』体を原則とすることが望ましい」とあるのはいかがでしょうか。現実にはそういうことにはなっていません。両方で「です・ます」で話すことは、おそらく親しさに欠けると考えられているのではないかと思います。
このあと「付記」に、「このこと（つまり相互に「です・ます」体を原則とすることが望ましい、としたこと）は、親愛体としての『だ』調の使用をさまたげるものではない」とあります。この「付記」には「相互に」とはありません。現実には相互に「だ」調を使っているように思われます。わたし自身は、今まで述べてきたことから読者が想像されるように、先生は「だ」調、生徒は「です・ます」体とするのを基本としたい、と考えています。
このことは、敬語の基本に小さいうちから習熟させるための手段とわたしは思っています。女性の先生も「だ」調でいいか、という問題がここに出てくると思います。ここでは「だ」調というものをもっと広く考えるべきだとわたしは思います。「の」とか「のよ」「わ」などを使

って、「です・ます」体は避けることができるでしょう。

「れる」「られる」の使い方

このような関係ではない一般社会については、「動作のことば」という項にこの「お——になる」の形を、「れる」「られる」の型の外に第二の型として挙げています。第一の「れる」「られる」の型は『これからの敬語』で「受け身の言い方とまぎらわしい欠点はあるが、すべての動詞に規則的につき、かつ簡単でもあるので、むしろ将来性があると認められる」と大いに推奨しています。

これらのことについては前にも触れるところがあったと思いますが、受け身の「れる」「られる」の外、可能を示す「れる」「られる」もあって一層まぎらわしさがあったのですが、可能では、「れる」については「書かれる」ではなく五段活用の動詞については「書ける」という可能動詞が多く使われ、この可能動詞に引きずられて、五段活用でない、つまり可能動詞形のないものにも、例えば「起きられる」の「られる」の形が「ら」抜きで「起きれる」という人が近ごろ増えてきました。この可能の「起きれる」はまだ標準型としての認知は受けていませんが、だんだんまぎらわしさはなくなっています。その芽があったかして、『これからの敬語』には可

能の形とのまぎらわしさには触れなかったものでしょう。

今のところ「れる」「られる」の形は、『これからの敬語』で推奨された割りには使用が大幅に増加してはいないようです。この理由はおそらく、この助動詞が右に述べたように多義でまぎらわしい場合があるのとともに、やや文章的で固い感じがすることにあるのではないかと思います。

学校用語としては行きすぎとされている「お——になる」の形は、ここでは「れる」「られる」に次ぐ第二の型として挙げられています。この型を「お——になられる」という必要はない、とここではされています。敬語の語形が二つも重なっていて簡素ではない、と認めたものでしょう。しかし、そうは言うものの現実にはこの語形はかなりあるように思います。

「お書きあそばす」のような形は、「いわゆるあそばせことばであって、これからの平明・簡素な敬語としては、おいおいにすたれる形であろう」という予測はそのとおりになっている、と言ってもいいかと思います。

「です・ます」体と「だ」体

『これからの敬語』では、「対話の基調」という項に「これからの対話の基調は『です・ます』

体としたい」とあります。これが基本である、ということは、まずは認めていいのではないかとわたしは思います。

ここで述べているのは、「対話」とあることからわかりますように、話しことばについてです。わたしは敬語を論じた本書を書きことばであるにもかかわらず「です・ます」体で書きました。これは、書きことばもできるだけ話しことばに近づけるべきだ、という年来のわたしの考え方によるものです。だいたい、昭和四十九年、五十年あたりからこの文体をとっています。と言っても、「です・ます」でなければ書かない、ということではありません。編集者に「である」でと頼まれれば従うことにしています。この本については編集の方はわたしの自由を認めて下さったので「です・ます」を使っています。

一般の文章はまだ「です・ます」には至っていません。しかし、長い間、書きことばの基調であった「である」体は「だ」体の方へ動き始めているようです。新聞では、昔は「である」体が主流でしたが、昭和四十年前後から「だ」体が多くなったようです。「である」は純然たる書きことばですが、「だ」はやや談話語的です。これは新聞文章の「だ」体が実際の談話を記事にした部分から始まったことと関係があります。「です・ます」はこの「だ」を実際の話しことばに直したもの、と言えましょう。

日本語教育で教える日本語は「です・ます」を主体にしています。日本人の友人同士の自然な会話では、「です・ます」などを使うことはあまりありませんので、日本人の友人からは時に、そんな他人行儀な「です・ます」はやめよう、などと言われて、役に立たない文体を教わってしまった、という批判を外国人が抱く場合もあるようです。しかし、日本人の丁寧さゼロの話し方は、丁寧に言えるという能力を持った上でのことです。そういう能力なしに、友人づき合いのことばから出発するのは、外国人への日本語教授として取れないところです。まずはあまり苦情の出ない線ということで、ここで基調としたいと考えている「です・ます」から出発するのは当を得ていると思います。

なお、この「です・ます」を基調としたい、という記述の次に、「付記」には次のようにあります。「これは社会人としての一般的対話の基調を定めたものであって、講演の『であります』や、あらたまった場合の『でございます』など、そのほか親愛体としての『だ』調の使用を制限するものではない」

こうして、一般の会社などでは基調としての「です・ます」体が使われていて、上役の者がそれを使わずに「だ」調で話すと、尊大さを示すというように考えられるようになってきているようです。こうしてこの基調がかなり強くなったようで、「ございます」の使用は減っている

ように思われます。

複雑化する使い分け

以上、たびたび書きましたことからわかりますように、わたしの考える「これからの敬語」は、『これからの敬語』で示されているよりは少し丁寧なところ、ということになりましょうか。『これからの敬語』が一貫して述べている、「お——になられる」という必要はないという立場に対しては、これをもあえて誤用としなくてもいいのではないか、と考えます。これらは現実の問題としてよく現われるところです。

したがって「お」「ご」の整理という項目の中の「省くほうがよい場合」に挙げられている「(ご)調査された(これは『調査された』または『ご調査になった』が正しい。)」というのは、「正しい」ということばで、誤りであることが間接に示されている語形も認めてはどうか、と今は思っています。

ここに述べたことは、すべて現在において、わたしが考える「これからの敬語」です。言うまでもなく、言語についての考え方はいつも変わるものです。考え方だけでなく、どう使われているかについても時々刻々に変わるものです。言語は常に動いている、ということはたびた

び言ってきたことです。一面では特殊な用語の使用は減りましたけれども、区別をしないというのではなく、むしろ細かく使い分けるようになったのではないかと思います。細かい使い分けということとともに、敬語を使わなくてもいい場面では使わなくなり、逆に敬語を使うべき場面では使う、という点で、使い分けが近ごろはうまくなったのではないかと思います。この点では近ごろの人は敬語の使いようを知らない、という一般的な評にもかかわらず、このようなことは言えるのだろうと思います。

このことを考えるならば、『これからの敬語』が出た、戦後民主主義の高揚期よりは、むしろもう少し複雑なものへの志向が今はあるだろうと思います。また、それだけに敬語を学び習熟するのはあるいはむずかしくなった時代ではないかと思います。といっても、これから限りなく複雑になっていくということはないでしょう。特殊な語彙(ごい)はだんだん使われなくなり、その代わり、限られた語を使って細かい差を出していかなければならない時代になっているのではないかと考えます。たいへんむずかしい時代になったのではないでしょうか。

使い馴れることが大切

さて、この本もいよいよ終わりになりました。ここまでお読み下さって、皆さんの敬語の使

い方は上手になったでしょうか。

覚えておいでのことと思いますが、最初に五十の問題を出して、それが合っていたかどうかで点数をつけてもらいました。もう一度あの問題に挑戦なさいませんか。すべての皆さんが、第一回の点数よりは高い点数を取られたのではありませんか。

第二回の点数から第一回の点数を引いたのが、この本を読んでの読者の進歩ということになります。この点数には多少知識というものが反映しています。知識だけでは敬語はうまく話せません。何回も言いますが、使い馴れることが必要です。頭だけで話しているとたいへんぎごちなくなるものです。敬語は無理をして言っているな、と相手に思われないようにしなければなりません。自然に出るようにということは、自然に出るくらい使い馴れるということだと思います。英語を話すときに、いちいち頭の中で英作文をやりながらやっていたのでは決して流暢に話せないのと同様で、昔はやった大脳生理学の用語で言えば、早く「皮質化」して、考えなくても出るようにしなければなりません。

言語能力というものは、ある程度は運動能力に似たところがあります。少しぐらい使わないでいてもすぐ回復はします。しかし、例えば何年も自転車に乗らないでも、あるいはスケートをしなくても、すぐ前とほとんど同じようにできるのとはちょっと違っているように思います。

これは頭を使ったものであるので、まったくの運動能力とは違うからです。外国語もしばらく使わないでいると、さびついてしまった感じになりますが、敬語もまったく同様だと思います。

第二回の点数が八十点に達していなかったら、これは少し足りない点がどこかにありますので、まちがったところをよく復習してほしいと思います。第一回の点数の方はあまり心配はいりません。それはこの本を読めばいいのですから。

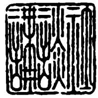
たびたび前にも言いましたように、敬語は一面では場面の把握能力に関係してきます。人間関係の把握と言ってもいいでしょう。こういう点ではきわめて人間的な営みです。人間というものに興味を持つべきだ、ということにもなりましょう。

読者の皆さんの、敬語の面での成功を祈っています。

敬語を使いこなす

一九八七年九月二〇日第一刷発行　一九九五年二月八日第一六刷発行

著者――野元菊雄



発行者――野間佐和子　発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二-〇一
電話（編集部）〇三―五三九五―三五二二（販売部）〇三―五三九五―三六二六（製作部）〇三―五三九五―三六一五
装幀者――杉浦康平＋赤崎正一
印刷所――凸版印刷株式会社　製本所――株式会社大進堂
ISBN4-06-148868-6（定価はカバーに表示してあります）

「講談社現代新書」の刊行にあたって

教養は万人が身をもって養い創造すべきものであって、一部の専門家の占有物として、ただ一方的に人々の手もとに配布され伝達されうるものではありません。

しかし、不幸にしてわが国の現状では、教養の重要な養いとなるべき書物は、ほとんど講壇からの天下りや単なる解説に終始し、知識技術を真剣に希求する青少年・学生・一般民衆の根本的な疑問や興味は、けっして十分に答えられ、解きほぐされ、手引きされることがありません。万人の内奥から発した真正の教養への芽ばえが、こうして放置され、むなしく滅びさる運命にゆだねられているのです。

このことは、中・高校だけで教育をおわる人々の成長をはばんでいるだけでなく、大学に進んだり、インテリと目されたりする人々の精神力の健康さえもむしばみ、わが国の文化の実質をまことに脆弱なものにしています。単なる博識以上の根強い思索力・判断力、および確かな技術にささえられた教養を必要とする日本の将来にとって、これは真剣に憂慮されなければならない事態であるといわなければなりません。

わたしたちの「講談社現代新書」は、この事態の克服を意図して計画されたものです。これによってわたしたちは、講壇からの天下りでもなく、単なる解説書でもない、もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物を、新しく世の中に送り出したいと念願しています。

わたしたちは、創業以来民衆を対象とする啓蒙の仕事に専心してきた講談社にとって、これこそもっともふさわしい課題であり、伝統ある出版社としての義務でもあると考えているのです。

一九六四年四月　野間省一

哲学・思想

916 哲学入門一歩前——廣松渉
1001 今こそマルクスを読み返す——廣松渉
977 哲学の歴史——新田義弘
66 哲学のすすめ——岩崎武雄
285 正しく考えるために——岩崎武雄
663 哲学とは何か——後藤平
148 新・哲学入門——山崎正一 市川浩
276 人間の思想の歩み——山崎正一
203 弁証法入門——茅野良男
159 弁証法はどういう科学か——三浦つとむ
168 実存主義入門——茅野良男
171 構造主義——北沢方邦
898 はじめての構造主義——橋爪大三郎
871 言葉と無意識——丸山圭三郎
1002 言葉・狂気・エロス——丸山圭三郎
788 現代思想のキイ・ワード——今村仁司
921 現代思想を読む事典——今村仁司編
1000 作ると考える——今村仁司
989 ミシェル・フーコー——内田隆三
24 現代思想事典——清水幾太郎編

225 現代哲学事典——山崎正一 市川浩編
1071 ヴァルター・ベンヤミン——高橋順一
1075 精神病理からみる現代思想——小林敏明

★

176 ヨーロッパの個人主義——西尾幹二
501 ニーチェとの対話——西尾幹二
832 オカルト——坂下昇
857 ジョークの哲学——加藤尚武
963 超人の哲学——田原八郎
272 愛について——今道友信
324 美について——今道友信
881 うそとパラドックス——内井惣七
970 パズルとパラドックス——内井惣七
922 シャーロック・ホームズの推理学——内井惣七
973 ダンディ——R・ケンプ 桜井哲夫訳
1007 日本の風景・西欧の景観——オギュスタン・ベルク 篠田勝英訳
1024 自由の悲劇——西尾幹二

★

529 古代インドの神秘思想——服部正明
1123 はじめてのインド哲学——立川武蔵
924 ヨーガの哲学——立川武蔵
997 空と無我——定方晟

322 中国人の知恵——諸橋轍次
837 中国の名句・名言——村上哲見
13 論語——貝塚茂樹
756 「論語」を読む——加地伸行
846 老荘を読む——蜂屋邦夫
761 「三国志」の知恵——狩野直禎
853 「韓非子」の知恵——狩野直禎
962 「戦国策」の知恵——市川宏
207 「無」の思想——森三樹三郎
1066 「気」の不思議——池上正治
1126 「気」で観る人体——池上正治

★

1079 江戸の無意識——櫻井進

宗教

政治・法律

971 文化大革命――矢吹晋
1070 毛沢東と周恩来――矢吹晋
1153 鄧小平――矢吹晋
774 CIA――斎藤彰
1060 ロビイスト――小尾敏夫
900 アメリカ合衆国大統領――飯沼健真
995 '89・東欧改革――南塚信吾・宮島直機編
998 天安門落書――串田久治
1012 社会主義の軍隊――川島弘三
1015 ナチス追及――望田幸男
1072 ハンガリー狂騒曲――家田裕子
1065 アラブとイスラエル――高橋和夫
1093 ゴルバチョフの2500日――秋野豊
1107 国境をこえるドイツ――永井清彦
1127 超国家EC――横山三四郎
1132 ナチス裁判――野村二郎

★

771 全学連と全共闘――高木正幸
950 日本人の法感覚――中川剛
842 最高裁判所――野村二郎
885 日本の検察――野村二郎
978 弁護士――内田雅敏
866 ことわざの知恵・法の知恵――柴田光蔵
932 大蔵省――川北隆雄
1046 通産省――川北隆雄
1053 外交官――浅井基文
1145 冤罪はこうして作られる――小田中聰樹

社会

経済・経営

350 経済学はむずかしくない第2版―都留重人
904 株式市場―倉澤資成
999 巨大機関投資家―津田和夫
1068 インサイダー取引―森田章
113 日本資本主義の歩み―安藤良雄
1016 インフレとデフレ―岩田規久男
581 「豊かさ」とは何か―飯田経夫
655 「ゆとり」とは何か―飯田経夫
723 「豊かさ」のあとに―飯田経夫
991 日本経済ここに極まれり―飯田経夫
1154 新版・経済指標を読みこなす―朝日新聞経済部編
918 金融指標を読みこなす―三井銀総合研究所編
942 銀行と証券―熊野剛雄
965 日本銀行―古川顕
1157 巨大銀行の構造―津田和夫
957 日本経済の構造転換―小峰隆夫
1003 ジャパン・プロブレムの原点―中谷巌
★
831 韓国―渡辺利夫
980 華僑―游仲勲

1022 東洋資本主義―涂照彦
★
848 転換する日本企業―中谷巌
858 企業数字を読む―森田松太郎
792 日本の経営組織―岩田龍子
860 日本的経営と人材―西田耕三
890 企業のパラダイム変革―加護野忠男
927 変革の企業文化―河野豊弘
1018 ポスト大企業体制―井原哲夫
1028 日本の企業発展史―下川浩一
1087 世界自動車産業の興亡―下川浩一
772 稟議と根回し―山田雄一
854 ラインとスタッフ―山田雄一
947 統率力―山田雄一
1048 M&A―松井和夫
1065 MBA―和田充夫
★
976 アメリカ経済を読む―井上宗迪
952 AT&TとIBM―那野比古
1063 SISは企業を変える―那野比古
1037 ソ連経済の歴史的転換はなるか―S・ブラギンスキー V・シュヴィドコー
★

1146 レギュラシオン理論―山田鋭夫
1150 「欲望」と資本主義―佐伯啓思
★
1010 国家破産―向壽一

文化人類学・民俗学

152 文化人類学の考え方—米山俊直
255 文化人類学の世界—C・クラックホーン 外山・金丸訳
★
420 日本神話の源流—吉田敦彦
664 日本の神々—平野仁啓
879 ブナ帯と日本人—市川健夫
1103 死の国・熊野—豊島修
★
115 アメリカ人—加藤秀俊
911 不思議の国アメリカ—松尾弌之
496 イギリス人と日本人—P・ミルワード 別宮貞徳訳
629 イスラムからの発想—大島直政
834 ユダヤ人—上田和夫
845 中東を読むキイワード—浅井信雄
1112 アラブ・ムスリムの日常生活—清水芳見

日本人論・日本文化論

105 タテ社会の人間関係—中根千枝
500 タテ社会の力学—中根千枝
300 適応の条件—中根千枝
293 日本人の意識構造—会田雄次
258 日本人の論理構造—板坂元
320 日本人の行動様式—荒木博之
560 ユニークな日本人—G・クラーク 聞き手・竹村健一
641 まなざしの人間関係—井上忠司
728 パチンコと日本人—加藤秀俊
378 たべものと日本人—河野友美
937 カレーライスと日本人—森枝卓士
1064 物見遊山と日本人—神崎宣武
1116 食文化の中の日本と朝鮮—鄭大聲

自然科学と技術

心理・精神医学

443 記憶力――岩原信九郎
670 記憶力をよくする――L・クピリヤノヴィッチ 金光不二夫訳
895 集中力――山下富美代
263 性格――詫摩武俊
704 性格分析――小川捷之
693 人はなぜ悩むのか――岩井寛
336 ノイローゼ――宮城音弥
697 自閉症――玉井収介
622 うつ病の時代――大原健士郎
1088 季節性うつ病――N・E・ローゼンタール 太田龍朗監訳
616 自己不安の構造――石田春夫
949 「ふり」の自己分析――石田春夫
780 ストレス・コントロール――内山喜久雄
627 ストレス――宮城音弥
824 森田療法――岩井寛
331 異常の構造――木村敏
166 自己分析――池見酉次郎
662 自己実現の方法――石塚幸雄
194 自己コントロール――成瀬悟策
717 セルフコントロール――原野広太郎

859 自己弛緩法――原野広太郎
539 人間関係の心理学――早坂泰次郎
239 エロス的人間論――小此木啓吾
812 秘密の心理――小此木啓吾
607 催眠のすべて――L・M・ルクロン 生月誠訳
36 うその心理学――相場均
184 異常の心理学――相場均
609 好きと嫌いの心理学――詫摩武俊
744 個性と適性の心理学――詫摩武俊
1077 これからの〈老い〉――詫摩武俊
797 「らしさ」の心理学――福富護
870 「出会い」の心理学――都留春夫
714 集団の心理学――磯貝芳郎
843 自己抑制と自己実現――磯貝芳郎 福島脩美
1020 アイデンティティの心理学――鑪幹八郎
645 〈つきあい〉の心理学――国分康孝
674 〈自立〉の心理学――国分康孝
725 リーダーシップの心理学――国分康孝
791 チームワークの心理学――国分康孝
1044 〈自己発見〉の心理学――国分康孝
383 フロイト――R・ベイカー 宮城音弥訳
855 甦るフロイト思想――佐々木孝次

1094 フロイト以後――鈴木晶
677 ユングの心理学――秋山さと子
841 ユングとオカルト――秋山さと子
914 ユングの性格分析――秋山さと子
613 夢診断――秋山さと子
702 タバコ――宮城音弥
721 天才――創造のパトグラフィー――福島章
1083 青年期の心――福島章
862 青春期内科診療ノート――森崇
877 ナルシズム――中西信男
901 退却神経症――笠原嘉
945 正常と異常のはざま――森省二
1014 逸脱するエロス――森省二
1143 「別れ」の深層心理――森省二
981 対人恐怖――内沼幸雄

人生論・教育

言葉とコミュニケーション

外国語

720 現代米語慣用句コーパス辞典 — 坂下昇

★

52 英語の新しい学び方 — 松本亨
810 英語の辞書を使いこなす — 笠島準一
617 「タイム」を読む — 松本道弘
673 「FEN」を聴く — 松本道弘
748 英語—何をどう書くか — 松本道弘
829 上級をめざす英会話 — 松本道弘
923 交渉力の英語 — 松本道弘
480 英語の語源 — 渡部昇一
958 英語の歴史 — 中尾俊夫
686 英語の発想 — 安西徹雄
935 名訳と誤訳 — 中村保男
540 翻訳読本 — 別宮貞徳
917 はじめてのヒアリング — 田辺洋二
840 ヒアリング上達法 — 森戸由久

★

39 40 英会話のすすめ〈上・下〉 — 田崎清忠
470 英会話上達法 — 倉谷直臣
806 はじめての英会話 — 東後勝明
939 一歩すすんだ英会話 — 東後勝明
867 大統領の英語 — 松尾弌之
891 英語の常識・非常識 — 速川和男
966 英語パズル — 速川和男
951 ことわざの英語 — 奥津文夫
990 英語的思考 — 澤登春仁
994 英語表現のトレーニング — 脇山怜
1069 英語表現をみがく〈動詞編〉 — 豊田昌倫
1102 英会話の常識・非常識 — 田辺洋二
1106 基本英単語を使いこなす — 大内博
1122 英語小論文の書き方 — V・ハーディ 加藤恭子

★

1131 「日本人英語」のすすめ — G・サリバン
17 フランス語のすすめ — 小林正
610 フランス語の新しい学び方 — 田辺保
1114 はじめてのフランス語 — 篠田勝英
26 ドイツ語のすすめ — 藤田五郎
250 ドイツ語の新しい学び方 — 藤田五郎
1073 はじめてのドイツ語 — 福本義憲
49 スペイン語のすすめ — 荒井正道
95 ロシア語のすすめ — 東郷正延
1064 はじめてのロシア語 — 中沢英彦
23 中国語のすすめ — 鐘ヶ江信光
987 はじめての中国語 — 相原茂
614 朝鮮語のすすめ — 渡辺吉鎔 鈴木孝夫
687 はじめての朝鮮語 — 渡辺吉鎔
1090 外国語をどう学んだか — 現代新書編集部編

日本語

372 日本語のこころ——渡部昇一
410 日本人の言語表現—金田一春彦
160 日本の方言——平山輝男
786 大阪弁おもしろ草子—田辺聖子
868 敬語を使いこなす——野元菊雄
996 語源をつきとめる—堀井令以知
1074 故事成語——合山究
1086 ことばの未来学——城生佰太郎

★

883 漢字の知恵——遠藤哲夫
783 漢字遊び——山本昌弘
954 漢字の常識・非常識—加納喜光
897 難字と難訓——長谷川滋成

★

873 日本語をみがく小辞典〈名詞篇〉—森田良行
919 日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉—森田良行
969 日本語をみがく小辞典〈形容詞・副詞篇〉—森田良行
1042 日本語誤用・慣用小辞典——国広哲弥

★

535 聞き上手・話し上手——扇谷正造

773 対話のレトリック——向坂寛

現代新書既刊より——扇谷正造『聞き上手・話し上手』は、
興味深いエピソードを交えて話し言葉の技術を伝授する。
金田一春彦『日本人の言語表現』、板坂元『日本語の表情』は、
日本語特有の微妙なニュアンスと表現法を豊富な実例で解きあかす。
別宮貞徳『日本語のリズム』は、七五調の基盤にメスを入れ、
農耕民族独自の四拍子のリズムから日本文化の深層に迫る。
向坂寛『対話のレトリック』は、比喩・ユーモア・詭弁など、
たくみな論理の用い方をわかりやすく説いた入門書。
他者との共感や納得を得るための表現と伝達の技法を説いた
増原良彦『説得術』、安本美典『説得の文章技術』も役にたつ。
広告制作の現場から人びとの心をとらえる言葉づくりの秘訣を説く
土屋耕一『コピーライターの発想』も面白い。

868

敬語を使いこなす——目次より



●のもと・きくお
一九二二年、神奈川県生まれ。
一九四八年、東京大学文学部言語学科卒業。
一九五〇年、国立国語研究所文部教官となる。
同研究所第一研究部長、言語行動研究部長、日本語教育部長、日本語教育センター長などを経て、
一九八二年から同研究所所長、
一九九〇年から松蔭女子学院大学教授。
著書に、『日本人と日本語』—筑摩書房、『広告に見る「時代のことば」大研究』—宣伝会議—など。

定価＝650円(本体631円)
ISBN4-06-148868-6 C0281 P650E(3)